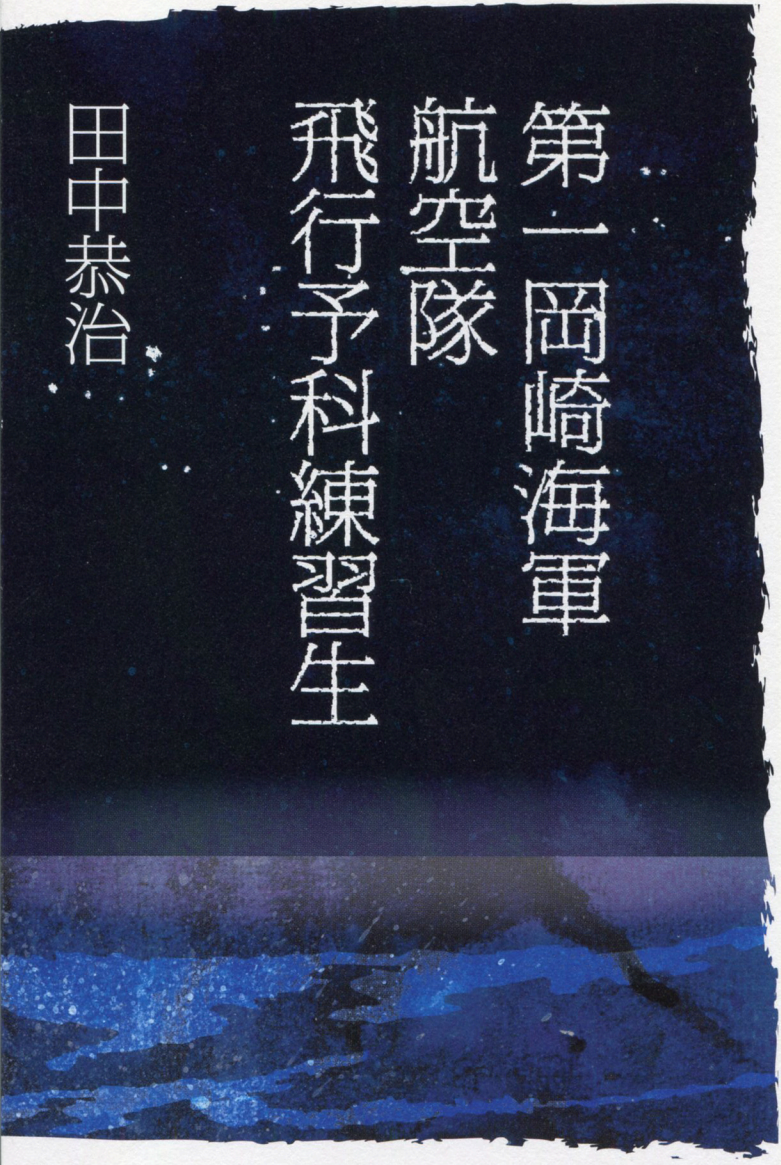
# 第二岡崎海軍航空隊飛行予科練習生

田中恭治



# 目次

**序文　老兵予科練は生きる**……5

偽らぬ心の叫び　6
予科練の生い立ち（記憶を辿って）　12
予科練特攻出撃　22

**憧れの七つボタン回顧録**……25

1 予科練受験　26
2 一次試験　28
3 二次試験　32
4 出発　35

5 入隊 39
6 任命式 42
7 日課 44
8 入浴 46
9 大晦日 49
10 元旦 50
11 水道の水 51
12 酒保 52
13 寒稽古 54
14 入室 56
15 B29の墜落 59
16 バッター 61
17 甲板掃除 62
18 当直練習生 64
19 戦備作業 65
20 引率外出 67

21 自由外出 70
22 基本作業 75
23 分隊長の交代 78
24 田子への移動 81
25 田子上陸 86
26 特攻艇格納庫作業 89
27 或る出来事 103
28 久し振りの罰直 105
29 トンビに油揚を攫われる 108
30 特攻艇震洋格納庫完成 113
31 田子最後の外泊 117
32 桟橋の別れ 119
33 敵機襲来 126
34 さらば岡崎海軍航空隊 130
35 巡検終わり…… 136
36 銃剣術・射撃訓練 139

37 蛸壺作戦 141
38 弾薬の受領作業 141
39 伏龍特攻隊編成 144
40 まとめ 146

**資料編** …… 149

41 予科練の戦史概要 150
42 敷島隊特攻出撃 153
43 最後の特攻出撃隊 153
44 軍人に賜りたる勅諭 159

# 序文　老兵予科練は生きる

## 偽らぬ心の叫び

燦々と
陽は照らしたる　邦（くに）ありき
知らずひとびとは　暗き昭和と

これは、「老兵予科練」私の偽らぬ心の叫びである。

二十世紀は、先進の欧米白人諸国による未開諸国民族への侵略蚕奪資本と軍事圧力を以て、全世界を隷属支配せんとする植民時代の終幕の夜明けであった。

極東の小国日本は、その脅威に早くも目覚めた植民支配に抵抗する、新進の民族国家であった。

強大なる欧米先進諸国の支配志向は、我が日本への経済圧力、軍事圧力、生存資源の分断圧力と包囲網の締め付けを強め、日に日に我が日本孤立の障壁が迫ってきた。遂に万策効無く危機に至る。

孤立無援、あの太平洋戦争開戦の泥沼に突入したのだった。

開戦二年……！

そして、戦局急迫……！

航空決戦の正念場！　最早戦い得るのは、我等十代の熱血のみになった。

まさに、その存亡の時、我等は第一岡崎海軍航空隊、海軍飛行予科練習生として殉国の至情に燃え勇躍して入隊したのだった。

激闘！　決戦の大空を翔け、奮迅して敵を撃滅するを夢見た。我等岡空予科練習生だった。

大東亜戦争は、避け難い大戦と云っても決して過言ではない。今の人達が「侵略戦争」「軍国主義」と、覚え慣らされて呼ぶ時代も在った。バブル経済の時代も在った。裕福な時代も体験した。厳しい流汗復興の時代も在った。

でもあの時代を「暗黒の時代」と一辺倒に誹(そし)る人達に、大戦までの輝けるあの日本を貶(おとし)して、立派な事が云へるとは思えない。

一億の民の表情は、決して今のように萎縮してはいなかった。

勤勉な民、忠良な兵、誰の上にも陰りなき太陽は等しく国民の上に輝いていた。余程のいじけ者か、反国家の運動家でもない限り……。

誰が何故、言い触らしたのか。

今、無用の老兵が、時流に抗し、かき消されつつも、敢えて苦言を呈したい。

敗戦の反動に流れ、この国、我が日本の忠実な史観、本当の文化の認識を歪めてはならない……と。繁栄祖国の柱石となり、散って未だ、南海の底に沈み残る幾万の英霊の声なき声が、聴こえるだろうか……と。

私達予科練習生は、終戦の間近き年の冬から夏へ、岡崎海軍航空隊では連日、日夜あの〈零戦〉無敵戦闘機〈紫電〉夜間戦闘機〈月光〉夜間攻撃機〈彩雲〉艦上偵察機のエンジンの雄叫び轟く、響きの中での寝起きだった。懐かしい。

流れ去った時代の今、「あの戦争は侵略だ……間違いだ……」とまがまがしい限りだ。私達予科練は純に「この国を護る」つわものだ。どんな理由も、一向に関わりも無い事だ……。

なんの理屈があろうか……。

幾十万のつわものが其の為に、黙して死んでいった。その犠牲を、嘲笑う日本人がいるとしたら、それはどんな人間なのか。彼らは、何をしていたのか。

敗戦、一転、無責任な饒舌を弄し祖国の戦いを中傷する。彼らこそ、世を、国を毒する害虫だと、私は独断するのだ。

今、老兵予科練は悲しい……。

真実の何かも判らずして、本質を見失った、「事勿れ主義」ばかりだ。何が、無くなったのだろうか。無くなったものさえ判らなくなったのだろうか……。我ら老兵予科練は、名声利得に無縁、平凡の一兵卒に生き、従容、終らんと希う。

永遠の「すがすがしき予科練」「殉国の美」を夢見続けて……。

「人類」は、一つの地球に住む同じ人間同志でありながら互いに憎み合い「抹殺」しあう。民族、国、宗教、慣習文化の差が、埋め難い憎悪と殺戮の手段のほかに見いだせないという、人間知識の限界が、悲しく見えてくる。そこに気付かずして、極東裁判の被告に列した人々のみに、あの太平洋戦争の因果、責任をなすりつけて「済んだ、すんだ」と善人面で済ましている訳にはゆかない筈だが、この六十余年の間、勝者独善の正義が延々と、老兵予科練の目の前に普遍化されてきた。

真の正義とは程遠い、歪んだ現実なのだ。

今、老兵予科練は、純粋なもの清々しいものだけに心をとどめよう。

黙々、無名、ただただ祖国民族の生存を希求、茫漠の南海に犠牲と散っていった、何千何万の若者達の沈黙の真実、沈黙の誠。これほど美しいものが、この地上にあろうか。これほど崇高なものが、この地上にあろうか。

これこそ我が日本民族の遺産と尊び、心央に永く留めたい。

若者は南海の底に、冷たく眠っている。今も、そのままに……。その若者の集団の名は「予科練」という。

今、日本という国が、社会が、教育が、どこかおかしくなっている……のではと感じる。価値観の相違、だけでは説明できない事件が頻繁に発生している。少なからず心が病んでいるとしか思えないものが見えて来る。

「学級崩壊」「いじめ」「自殺サイト」「尊属殺人」等々。いったい親殺しとは？何だ！この様は！である。

世界の何処かで何時起きるか解らない無差別「テロ」「ミサイル」等々。大難問！だ。しかし、今の社会の反応は、ヒステリックである。幼児的にさえ見える。

被害者達の打撃、悲嘆は云うまでも無いが、メディアの感情だけを煽り立てる、身ぶりだけの擬態に真の哀悼と同情などは無い。

セリフだけの、そらぞらしい偽善が見えるだけである。深いこの国の、病根を感じるのだ。

祖国、同胞の安泰を希って、自らの命を殉じて散った、幾十万英霊に、何の感謝、弔意と哀悼の真情も無く、ぬけぬけと「人の命の大切さ」などと抜かすメディアの企画す

る世論に、真の正義の根抵が在るであろうか。

未だ南海の底に沈む何千の艦船の中に眠る、幾万の英霊の声なき声に、耳を傾けたであろうか……？　また、思い至り得るであろうか。

今、生き残る老兵は、まさに消え去らんとしつつ思うのです……。この国は消えないで欲しいと。

星霜、流れ去る、戦後六十余年。

めぐり巡りくる年々に、あの八月十五日の記念日を体験した。幾度か幾度か、その度に、抑え難き苦々しさの涌く思いを繰り返して来た事か……。

この国は変わった……。自虐的侵略罪悪論、靖国神社排除論等々、老兵予科練には迚も理解できない事ばかりだ。吐き気さえ催す不快感を、何度、感じた事だろうか。

輝ける日本のあの姿、今いずこに……。復興、繁栄の寄与のみで、英霊達の御霊は安らかろうか……。

戦野に、蒼空に、わだつみに、散華幾十万「靖国に眠る」の悲願は空しく忘れられてしまった様だ。

「戦没者記念墓地公園」建設案等と、呆れ返るの外ない。

「八月十五日の祭典」「魂なき儀式」の舞台として、空涙の演出の「ワイドショー慰霊興行」

でもする感覚であろうか、あまりにも空しい……。紛れもなき国民的、忘恩の姿を今も見つつあるのだ。

あの予科練も海軍も心の中だけに生きている「宝」である。

戦後六十余年、不器用な人生の日々に生き、未だ稚き青春の夢にまどろむ老兵にとって、あの渾身の汗と涙の軌跡「予科練」そして、「海軍」は、今も揺籃の温かさと追憶のふるさとであり続けている。

## 予科練の生い立ち（記憶を辿って）

（※参考資料引用）

思えばあの日から、早くも半世紀以上の歳月が流れました。何もかも歴史の彼方に過ぎ去った一連の出来事だった。と、簡単に過去を忘却する事は絶対にできない。

蒼空に流れる白い雲を見るにつけ、使命に燃えて訓練に励んだ〝飛行予科練習生〟当時の想い出が、私の脳裏に彷彿と浮かび上がって来ます。いろいろあった。苦しかった事、楽しかった事、悲しかった事等。他人に全く何の価値もない事柄が、かけがえのない青春の証として、懐かしく蘇ってきます。

一年先輩の練習生Aは、中学校から甲飛予科練に志願して、敗戦間際特攻機で沖縄の空に散った。同級生Bは、小学校高等科卒業一ヵ月残した昭和十九年二月、海軍特年兵として佐世保海兵団に入隊し、二十年初夏、潜水艦で出撃した侭消息を断った僅か十六歳の少年のまま、海の藻屑と消えて行った。

私達は、戦いの悲惨を身を以て体験しましたが、好んで戦争に参加したのでも、強制された訳でもありません。純粋な愛国心の発露からであります。

国おもう道に　二つはなかりけり
いくさの庭に立つも立たぬも

私も、予科練として海軍航空隊に入隊し、困難な試練にもよく耐えた。今にして思えば、吾ながらよく頑張ったものだと感心する。少年志願兵は、己を捨て国に報いることに誇を持っていた。

これら一連の過去を、一時代の流れとして片付けてしまっては、散った先輩同僚に対して、申し訳ないと同時に、自己に対しても余りにも無策に過ぎると思う。何故ならば、私達も生死の極致を通って来た一人だ。それが幸か不幸か生きている。余命の限り、あの悲惨な体験を、後世に伝え決して過ちを繰り返さぬ様努力しなければならない。それが、亡き戦友達への鎮魂であると共に、残った私達の務めでもあります。

ここに私達が憧れと誇りとした〝海軍飛行予科練習生〟の生い立ちを、繙いてみるのも無益ではないと思い、拙筆を執った次第です。

第一次世界大戦後、南太平洋に拡がる広域の南洋群島の委任統治権が敗戦国ドイツから日本に管理が移った。海国日本の軍事力増強の必要性がここに、高まって来ました。そして昭和四年十月二十四日アメリカは、ニューヨーク市ウォール街に始まって世界大恐慌の嵐は、一週間を待たず日本にも上陸、瞬く間に国内に不況の嵐が吹き荒んだ。折しも農村では稲作が大豊作で、米の相場が暴落し、重ねてアメリカを最大の客とする生糸も、恐慌の煽りを正面に受けて、繭の値段は下落の一途を辿り農家は大打撃を受け、都市では失業者が巷に溢れ、日本経済は混沌として根底より揺れ動き、国民は前途の不安に慄(おのの)いたのです。

其のような世相を背景にして、帝国海軍は軍事力増強の為、優れた人材を広く一般から求める必要に迫られていたのです。海軍の上級将校は主に兵学校出身に依って占められていた。

兵学校入学資格は中学校四年修業以上の学歴者に限られ、如何に優秀な人材であっても小学校卒では其の資格は与えられない。世間では寧ろ中学校へ進学出来ない少年の方が多かった。海軍では、この中から埋もれた人材を掘り出して、兵学校に準じた教育を

施す事を考えた。

海軍航空隊では手始めに百名の少年兵を募集した。すると全国から約一万名の応募者が集まり、その内より厳選して七十九名を採用した。この制度が〝予科練〟の始まりです。

昭和五年六月一日、合格した七十九名の少年達が、第一期予科練習生として横須賀海軍航空隊練習部に入隊した。彼等の平均年齢は十五歳で、小学校での成績は殆ど、クラスで一番か、二番、稀に三番の者もいたとの事です。少年達の多くは貧しい家庭の出身で中学校へ進学出来なかったけれど、頭脳と精神力は果然他を凌駕していた。

尚この予科練習生は、十一年十二月から飛行の文字を冠して〝飛行予科練習生〟と改称され、十二年に新しく甲種飛行予科練習生の制度が作られてから〝乙種飛行予科練習生〟となり、十九年度採用の第二十四期生まで入隊した。

※（乙飛予科練は、第一期より第二十四期まで、八万七千人が入隊し、戦没者数は五千人です。第一岡崎空八期は、乙飛第二四期生となります。）

思えばその頃、国内外の情勢は共に風雲急を告げていた。昭和六年の満州事変を皮切りに、七年に五・一五事件。欧州では、ヒットラーが八年にドイツの政権を執る。一一・二六事件は、十一年の春まだきに起こった。

翌十二年七月七日二十二時四十分、北京郊外の盧溝橋に発せられた銃声一発。

以後、八年間に亘る日中戦争の火蓋は切って落とされた。

当然の事ながら、我ら先輩予科練習生は、連日連夜必死の飛行猛訓練に励んでいたのである。

当時海軍の軍備拡充計画の一環として、航空兵力の充足も含まれており、此れらの要員には、従来の予科練や一般兵からの採用では、員数的にも時期的にも不十分であった。

そこで成功していた予科練制度のうち、普通学教程の短縮を目的に、採用基準の学力程度を高くし、中学校四年一学期修了程度の学力の者から採用して、急速に搭乗員を養成しようとした制度が〝甲種飛行予科練習生〟です。

昭和十二年九月一日、甲飛第一期生二四〇名は、横須賀航空隊練習部に入隊した。以後甲飛予科練は、二十年四月採用の第十六期生まで約十三万人が入隊した。

甲飛生は、当初海軍上層部にあっては政策上の理由であろうか、甲飛を兵学校に準ずる制度のような宣伝で募集していた傾向がある。学力も、人物も、優れた者が多かった。兵学校を志願する事も出来たが、それでは飛行将校として勤務するまで長い年月がかかり、時局に鑑み一日も早く飛行機に乗りたいと言う純真な愛国の至情から、甲飛への道を選んだが、入隊後予想に反して水兵服を着せられ、将来の身分は、海兵出身とは大差のある事を知って、騙されたと落胆する者が多く、不平不満は、主として海軍当局に向

けられ、親にも言えない屈辱感を胸に秘め、中には、〝水兵服〟を恥じて折角の休暇にも故郷に帰らない者が続出した。

海軍当局に対する不信感から「我々は軍人として入籍された以上、帰ることは出来ない。しかし、後輩が甲飛に来ることは阻止しなければならぬ」と出身中学へ、甲飛受験を止めるよう指示した文書を送る動きが出はじめたのである。

この気配を見て驚いた当局は、煽動者がいるものとみて厳重に調査をしたが、練習生の結束は固く、ついに首謀者とみなされる者を出さなかった。この間、海軍お得意の体罰による矯正が繰り返されたことは無論である。

この件とは直接関連はないが、近隣から、予科練で鹿児島航空隊に入隊した私より五、六歳年上の上級生が居た。彼の三人目の弟の話によると彼の父母が、入隊先の航空隊へ面会に行ったとき両親を蔭に呼んで「弟だけは絶対予科練には入れたく無い」と涙ながら語ったとか、其の為か、次兄は翌年兵学校に入校した。

※（甲飛予科練は、第一期生より第十六期生まで、十三万九千人が入隊し、戦没者は六千八百人です）

昭和十四年三月、霞浦航空隊に飛行予科練習部が新設され、横須賀航空隊より移った。翌十五年十一月〝予科練〟のメッカとして、土浦海軍航空隊が誕生開隊した。

〔七つボタン〕の軍服は、昭和十七年十一月より制定され、甲飛は八期生、乙飛は十六

期より着用した。

昭和十六年七月、日本軍の南佛印進駐に対し、アメリカは制裁として、石油関係の対日輸出、全面禁止の措置をとった。この時点に於いてアメリカは、日本との戦争を決意し、南太平洋を囲む「ＡＢＣ」ラインを敷いて、我が国を極東に孤立化しようと謀った。打開策を見失った日本上層部は、アメリカの計った謀略の泥沼にのめり込んで行ったのです。

そして……

昭和十六年十二月八日未明、日本軍の一方的な真珠湾攻撃から、米英相手に決戦を挑むこととなった。

大本営発表の予想以上の戦果に、軍部はもとより、国民は耐乏生活を忘れて挙って歓喜した。

中国大陸に於ける混迷硬直した戦況を、一気に挽回しようとした軍部の作戦が、後三年有余で、全てのものを失う屈辱を受ける事になろうとは、神でない身の悲しさで、知る由もないのである。開戦半年にして其の兆しは現れて来た。

初期の戦果に酔った我が海軍は、一挙に優位に立とうとしたが……十七年六月のミッドウェー海戦で、無敵の筈だった我が連合艦隊が、痛恨、壊滅的打撃をこの海戦で被っ

たのです。

即ちこの戦いで航空母艦加賀、赤城、飛龍、蒼龍と重巡洋艦三隈を一挙に失ったのです。

真珠湾攻撃で活躍した経験豊かな熟練搭乗員は、帰る母艦を失い、僚艦の見守る目前愛機と共に海中に没したのです。ミッドウェーの碧い海は、さながら海軍航空隊の墓場と化した。

※（ミッドウェー海戦の日本軍の戦死者は三千六十四名で、最精鋭航空機搭乗員の戦死者は百二十一名です。）

此の悲惨な現実の厳しさに、大本営は大いに慌て、国民にこの事実が漏洩するのを非常に恐れ、敗北をひた隠しに匿してきた。

海軍首脳部はここに於いて、失った搭乗員補充の為大量の予科練習生募集に踏み切ったのです。

※（十八年度の予科練習生入隊者は四万三千人で、不思議にも乗る航空機も無いのに、十九年度には十万人も採用しています。）

その一ツが「特乙」の制度です。一般兵から採用していた航空機要員を十五年採用より甲、乙に対して〝丙種飛行予科練習生〟と称し十八年初期まで続いたが、太平洋戦争

に突入し戦域が途方もなく拡大に及んで、一般兵からの転用が難しくなり、乙種飛行予科練習生の合格者中、高齢者を採用し〝丙種〟に準じた教育を行った制度が、乙種飛行予科練習生（特）で通称「特乙」と呼ばれ、十八年四月第一期生一五八五名が岩国航空隊に入隊し、第三期生より三重航空隊へ移り、十九年十月入隊の第十期生まで続いた。

※（特乙は第一期生より第十期生まで、六千七百人が入隊し戦没者は千三百五十人で、丙飛は十五年十月の第一期生より十八年三月の第十七期生まで七千三百人が採用され、五千五百人が戦死した）

丙飛は各兵科より採用されたのでバラエティーに富み、それに年を食った髭の濃い者もいて、別名〝とっちゃん予科練〟とも云われた。

これら大量採用に従って練習航空隊が全国各地に誕生し、多くの予科練が猛訓練の上、若い血潮で大空の雲を紅に染め目覚ましい活躍をした。

だが十八年二月に入るとガダルカナル島撤退、四月十八日山本五十六聯合艦隊司令長官の戦死。十九年二月にはあの誇り高きラバウル航空隊も、トラツク島に後退し、そのトラツク島も僅か一日の空襲で壊滅した。そして戦況は日増しに悪くなり十九年十月レイテ沖に初の特攻出撃となり、二十年三月沖縄戦へと続き予科練先輩の若き命が散って行った。

以上、予科練の生い立ちと経過です。

「帝国海軍を強く育てたのは海兵である。そして海軍を潰したのは、兵学校出身者である」

（一例として特攻戦死した士官の内、海兵出の士官は何人いただろうか）と口さがない人の言葉の真偽はさておき、身命を惜しまず国に尽した予科練には誰一人、口を挟む者はありません。振り返り見れば先輩の偉業に比べ、私が体験した生死の訓練も儚く小さく見える。いや戦果を挙げる機会がなかったからだと！

今出来る事と云えば、先輩たちの名を辱しめないよう、そして再びあの不幸を招く事のないよう、努めることだと思います。

この項の終わりに、最後の特攻予科練の顛末を記述致します。

終戦の詔勅を謹聴した後、愛機を駆って九州南方敵機動艦隊に特攻突入玉砕した。

この一節にて亡き先輩の鎮魂といたします。合掌

後日、この（特攻は、不条理の記録とされた）

## 予科練特攻出撃

いよいよ
発信命令が出た
滑走路の飛行機に向かって進む
飛行場のはずれにある
わが愛機は
春のカゲロウにゆらゆらと
浮き上がって見える
飛行機が遠くにあるのが
ありがたかった
遠くにあればあるほど
地上に
長くいられる
彼等は
英雄でも

軍神でもない
平凡な一人の少年として
愛機まで
残された僅かな時間の
生命を
いとおしみながら
統率の指揮官の命により
自分の愛する人のため
黙って死の旅にでる
桜の花をかざし
笑みをたたえて
逝ってしまった
彼等少年の眼は
誰一人
笑って
いなかった

戦友の帽振れが
まぼろしか
うるんでる
この世の
ひとみ

# 憧れの七つボタン回顧録

## 1　予科練受験

### 故郷

朝な夕なに狭霧の洗礼を愛し
東肩より飛立する花尾山の城址あり
黒田武士の悲しき戦の跡を偲ばせる
麓に黒煙たなびく鐵都を抱き我が母校あり
遥か玄海の荒波を眺め
西方彼方に黒ダイアの筑豊の峰々
雄大にして沈黙せる故郷

昭和十八年春、高等科二年生は最後の学窓であった。担任は上村昌弘先生。あだ名は愛称ゴリラと呼ばれ、その名の通り体格の良い風貌の怖い先生だったが、人情に篤い優しい先生であった。余暇の時間には時を惜しまず、親しみをもって生徒一人一人に接し

ておられた。時には面白い小説を読んでくれた。我々生徒達は、その小説の続きを知りたいとお願いをした。読んでくれなければ、授業を拒否しますとせがんだ。すると、先生は、お前達は何と言う奴だ！と言って、これは、ストライキだ！と苦笑しながら解った。放課後続きの話をすると約束していただいた。

また野外炊飯の時、焚き火の炎がA君の学生服に燃え移った。すかさず先生はバケツの水をぶっかけて難を逃れた。そのほか色々な事があったが、このクラスは、当時としては珍しく、面白く楽しい中にもまとまりのある学級だった。

同窓会では先生を囲み、この話が毎回話題になり、座が盛り上がった。

先生は、私には特に目をかけて下さり職員室に呼んでは、「山本五十六大将の伝記とか予科練習生の生活」等の本を読むようにと貸して下さった。

ある日、先生から私の家族について尋ねられた。先生は概ね家族の状況は承知された上、敢えて聴かれた。それは義父が去年佐世保海兵団に出征しており、生活の経済面を心配されての事であった。

私は、正直に大丈夫ですとお答えした。それは、父からは毎月送金されていることを伝えました。先生は、頷かれてよし解ったと、少し安堵された様だった。

（父は海軍主計中尉で高額な支給を受けていると母から聴いていた。）

学校の掲示板には、大政翼賛会、国民総動員との活字が目立つビラが貼ってある。陸軍少年飛行兵募集、○○学校生徒募集等のポスターがあり、その中でも軍艦旗と、七つ釦の少年が敬礼している姿に、私は魅せられてしまったのです。

夏休みに入る前、私は予科練を志願する決心を母に話した。母は即座に反対した。

私の家族は、現代で云う母子家庭（義父出征の為不在）である。母を始め、長男の私（満十四歳）、弟二人、妹二人の六人家族であります。

母の胸中は、当時の私には解る由もなかった。しかし、先日、母が強い言葉で反対した理由は、何となく、子供心に薄々とは感じていた。

私は、尊敬する先生に予科練を志願したいと相談をしました。先生は少し考えられて暫く待てと云われた。先生は、私が師範学校に行く事を望んでおられた。しかし、私の返事が捗々（はかばか）しくないので、母に会って何か話をされたようだ。

お仏壇の前で、母は毅然として、私の目を見つめて言った。自分の心に恥ない決心の道ならば征きなさいと。母の声は、かつて聞いた事もない、重く熱い言葉だった。

## 2　一次試験

夏休みも終わり十月初旬、海軍航空隊志願兵第一次試験通達票が届いた。試験会場は長崎だった。

私の母校からは二人が受験した。彼の名前は、篠原守君である。福岡県八幡市から二人で長崎行きの汽車に乗った。指定の旅館に着いたのは昼過ぎだった。旅館には既に他の市町村から数十人の志願者が泊まり込んで、大変賑やかであった。

私は初めて旅館の夕食を戴いた。何と美味い食事だろう！　ご飯も何杯もお代わりが出来た。弟や妹に食べさせてやりたいと思った。

その夜、私は高熱に襲われた。何としたことか、明日は一次試験と云うのに、篠原君が心配して額を冷たいタオルで何度も冷やしてくれた。

翌朝、目が覚めたのは、周囲が騒がしくなってからだった。熱はまだあったが、急いで起きた。篠原君も私の看護疲れが出ているようだった。それでも気遣って声を掛けてくれた。真の友情を感じた。

試験会場に着き、受験票を貰って身体検査が始まった。身長、体重、眼底検査と順番

に進んで行く中、奇跡のように熱も下がり、気分も爽やかになった。盛り沢山の身体検査は、午前中では終わらず午後にも続いた。

私達は少年であっても、一応兵隊検査に準じて行われ、恥ずかしいとは言っておれない。丸裸になってカーテンで仕切っている中に入ると、白衣を着た軍医官が椅子に腰掛けている。前に立つと、出ているものを引っ張ったり、絞ったりして、私の顔を見上げて、ニヤッと笑う。「よしっ、今度は向こうに向いて両手を床に着け」。尻の穴を痛くなる程引き開けて検査し、パチンと尻を叩いて、「よしっ、合格、次の者入れっ」。私は尻だけが先に合格した様な、変な割り切れない気持ちで衣服を着けた。

身体検査で不合格になった受験者は先に帰って行った。

次に学科試験があり、終わって採点中に面接が行われた。

試験官は海軍士官で、「誰に勧められて予科練に志願したのか?」と尋ねられ、「母に勧められました」と答えると、「感心なお母さんだなー」と言ってくれた。私は嘘を言った事に後ろめたい気がして母と、士官に申し訳ないと思った。

第一志望、飛行兵。第二志望、整備士。としたがこれは年齢が足らず、軍楽隊と書き直した。

学科試験の発表が始まる頃には、ガラス窓から差し込んでいた夕陽も、山の端に沈み、

戸外には夕闇が迫って、試験場の高い天井に吊った灯りが明々と受験者を照らしていた。
学科試験は八〇点以上が予科練の合格点である。それ以下は第二志望に廻される。私と篠原君は、第一志望の飛行兵に合格した。
試験場を出て、暗くなった町の通りを抜けて、汽車に乗った。
八幡駅に降りた私達二人は、それぞれわが家に急いだ。

想　い

暗い夜空には
無数の星が輝き
燦いていた
残月は山の端に傾き
今
まさに沈む
夜の空気
叢に啼く虫の声

尾羽を打ち枯らし
途切れ途切れ
哀れに聞こえてくる
黙々と暗い
影を踏む

予科練飛行兵一次試験に合格した喜びはあるが、二次・三次試験・予科練合格まで日々試練は続く。

## 3　二次試験

二次試験は、知能試験、体力機能試験、その外飛行機搭乗員としての適性試験が、あらゆる器具を使って順次行われた。

二次試験の終わりは、パンツ一枚の裸で十名が一列に並び、正面一段高い所に居る検査官が「右から一番目一歩前、二番目一歩後、三番目三歩後……」と次々と指示して行

く。前に進むのと、後に退るのと、どの様に違うのか分からないが、後の方が悪いと思っていると、「左端の十番一歩前……」と自分の番号が呼ばれた。一瞬躊躇していると、早くしないかと、叱られた。前後の一歩に、何の意味があるのか全く解らず宿舎に戻った。因に篠原君も一歩前だった。

二次試験の結果通達がないまま、三ヵ月が過ぎた。何か気抜けした気持ちで、もう駄目かも知れないと、半ば諦めていた。しかし、いやいや試験には自信があったと自分に言い聞かせて、いざというときの為、日々身辺整理に時間を費やしていた。

桜の花片が、ちらちらと舞いはじめるある日。

待ちに待った、採用通知が郵送されて来た。

右海軍乙種飛行兵ニ採用徴募ス、
昭和十九年八月十五日
串良海軍航空隊ニ入隊スベシ
場所　鹿児島県肝属郡串良町

私は、思わず歓声を挙げ跳び跳ねる。諦めていた待望の予科練へ合格だ。

早速、ご仏壇に報告の合掌をする。母は、目頭を押さえていた。

翌日、上村先生に知らせたく、通知状をもって学校に走る。先生は私を見るなり笑顔で迎えてくれた。先生の目は、全てを語っていた。大きな両手が私の両肩を掴んでいた。

篠原君にも採用通知が届いていた。共に友情の絆が強くなった。

樹木の若葉はいつの間にか緑の色も濃く、暗くなると水田の面や、畦の叢に青白い光を灯した蛍が飛び交う季節となった。

後二ヵ月で入隊だ。

先生からお借りしていた、「予科練の生活」を読み返し乍ら早速、軍人勅諭、手旗信号の練習、モールス信号の符号を暗唱し覚える。

そんな或る日、三回目の採用通知が届いた。

昭和十九年十二月十五日

「岡崎海軍航空隊ニ入隊スベシ」

場所　愛知県碧海郡矢作町となっていた。

## 4　出　発

昭和十九年十二月十四日午前十時、岡崎海軍航空隊に入隊のために我が家を出る。薄雲はあったが、風もなく穏やかな日和に恵まれた。

近所へ入隊の挨拶に回ると、お年寄りは皆涙ぐんで、私に応対してくれる。兵隊に行くからと云って必ず死ぬ訳ではない、勿論生きて帰れるとも思ってもないが。私が笑顔で無心に挨拶する姿に、感傷を覚えたのかも知れない。

幾度となく兵隊さん達を送ってきた此の道を、今日は私が送られ通る。母と別れ、未知の軍隊に行くという感傷か、不安なのか、何故か、感激が湧いてこない。きっと家を出る時に、乾杯で飲んだ酒のせいかも知れない。

駅に着いた。そこには先生と同級生数人が見送りに来ていた。篠原君の関係者も数人来ていた。

日清事変、大東亜戦争開戦当時は、出征兵士の見送りは盛大なものであったが、その華やかさは消えていた。今日は、私と篠原君の二人しかいなかった。

「お見送り有り難うございました。後のことは宜しくお願い致します。それでは行って

参ります」。

万歳三唱をお受けしても、周りの人々は、慣れっこになっているのか、私達を見ても、何の感動も示さなかった。

母から日用品と下着、それと弁当の入った風呂敷包みを受け取った。その時咄嗟に母の手を握り締めていた。母の手は温かかった。ジーンと目頭が熱くなった。涙を抑えながら、改札口を入った。

列車がホームに到着した。機関車は、私達を祝福しているかのように、シューッ、シューッと音を立て白い蒸気を吐き出してる。車内に乗り込み席を取り、荷物を網棚に上げる。汽車は静かに動き出す。駅の向かい側には見送りの人々が手を振っている。私は窓を開け誰にともなく手を振った。皆の顔が小さく見えなくなる。

やっと、席に腰を下ろして篠原君と二人きりになった。話はやはり入隊後の事で、実践教育とは、自信、希望、不安が交錯し、何を話したか覚えていない。時間も過ぎ腹も空いたので、母の手作り弁当を開いた。赤飯のおむすびだった。ひとくち頬張ると、母の手の温みが、優しい顔が、浮かんできた。

汽車の速度は早くなっている。列車の揺れに合わせ、車輪の軋む音が大きく速くなる。列車のどの窓も黒い幕が降ろされて、薄暗い電灯の下に乗客は、皆眠ったように動かない。

足元の暖房が心地よく体に伝わって来た。

駅で別れた母が、幼い弟を背負ってとぼとぼ帰って行く寂しそうな姿が浮かんだ。レールの響きが子守歌に聴こえて来て、何時の間にか眠ってしまう。

翌朝目が覚めた時、左の車窓に湖の一部が眺められた。降りていた窓の黒い幕は、全部引き上げられて、朝の陽射しが射し込んでいた。

列車が一段と高いホームに着く、米原である。駅舎もホームも、付近の家も向こうの山も白く雪に覆われていた。雪の山峡や、畝々を、黒い列車が煙を吐いて走って行く。山が遠ざかり濃美平野に掛かると、雪も消え麦畑が拡がっている。

名古屋駅のホームも一段高い所にある。ホームから眺めると随分遠くの方まで見通す事が出来る。その中で一際高いのが名古屋城の天守閣である。金の鯱鉾が、日差しを浴びて輝いて見えた。

私達は、名古屋駅を通り過ぎ次の熱田駅で汽車を降りる。引率されて熱田神宮に参拝する。鳥居の外側に大きな石が置かれていた。或る篤志家が奉納したのだが、余りにも大き過ぎて、置き場が決まらず放置されているそうだ。

参拝が終わると、今度は私鉄の名古屋鉄道に乗り宇頭駅で降りる。

駅からは松並木の東海道を徒歩で航空隊に向かう。何十分位歩いたか思い出せないが、

右に折れ広い道を約百メートル行くと、門柱が建っていて、「岡崎海軍航空隊」と書いた大きな板の看板が掛っている。

門を入ると左に衛兵室があり、水兵服の衛兵が銃を持って立っていた。私達は、案内されて一箇所に集まって待機していた。

少し離れた練兵場に、白い帽子白い運動シャツ、パンツ姿の集団が、二つに別れて今より棒倒しの競技を始める所だった。私達は、手に荷物を持ったまま立ったり屈んだりの自由な姿勢で見学した。

棒を守る者は約二十名で、他の者は攻撃に廻る。「ピーッ」とホイッスルが鳴ると双方から攻撃隊が相手の棒に向かって突進する。守る者の肩と云わず、頭と云わず、駆け登って棒を倒そうと縋り付く。守備隊は倒されまいと必死で守るが、多勢に無勢結局は、倒されるのであるが、倒れる時間の遅い方が勝ちだ。

競技の最中に、担架が持ち込まれた。倒れている一人を乗せて運んで行く。この競技では必ずと言っていい程、怪我人が出る為、予め担架は用意されていると係の人が説明してくれた。

競技が終わると整列して、聞き馴れぬ節で「海行かば」を歌っていた。何処かで聞いた曲の様にも思ったが思い出せない。

間もなく私達は、医務室に連れて行かれ身体検査を受ける。その外簡単な体力測定と血液型を調べる。私はO型だ。

十数名が荷物を持って別の所に集まっている。ここまで来て帰されるそうだ。

## 5　入　隊

私達は、医務室から凡そ六百メートル程離れた兵舎に案内される。兵舎は細長く柾目葺きで四棟が並んで建っていた。室内は板張りで、手前の方に長い土間の通路、向かい側は硝子窓で、窓の下が棚になっている。中央にも大きな棚があり、舎内を二分していた。

すぐ目に付く所に一本の棒が立て掛けてある。長さ一メートル余り、太さは一握り少々、擂り粉木の親方の様なもので、棒には黒い字で（Ｖ一号）と書いてある。好奇心の強い私はそれを手に取って見た。充分な重さで、裏に精神注入棒と書いてある。ソッと元に戻す。これが私達が今日から大変お世話になったバッターであった。

係の人が来て大きな声で「封筒を配るから表に名前を書き貴重品を中に入れ、事務室迄持って来て預けろ」と言って丈夫な紙封筒を配る。

皆云われた通りに財布を入れ事務室に持って行く。その後私達はなす事もなく三々五々と集まって雑談をしていた。突然「ドスーン」と人が倒れる大きな音がした。

当りは一瞬静かになる。音のした方をソット見ると倒れた者が財布を拾っている。背はあまり高くはないが、がっしりとした体格の下士官が立っている。「貴様、貴重品を預けろと言ったのが判らんのか、ここを何処だと思っているんだ、娑婆じゃねんだ」と言う。後でこの人が信号担当教員の高橋兵曹だと判る。

「そうだ、私はもう海軍軍人だ」という自覚が湧く。

しかし、娑婆の人間から軍人への変身は、生易しい事ではないと、後で知るのであった。それは、失敗と体験は訓練に依って、時間をかけて身に備わってくるものだ。極自然の中に、否応無しに順応させられて行くのが軍隊だ。

「貴様ら良く聞け、これから衣服その他を支給する。名前を呼ぶから順番に並べ、それから兵籍番号も読み上げるから良く覚えておく事。これは貴様達の海軍での名前である。支給品全てに後で、氏名と一緒に記入しろ」急に忙しくなってきた。

一番最初に大きな衣納が渡され、この中に一種軍装、作業服、下着、帽子等次々と支給された品物をいれて行く。終わると自分のテーブルに戻り、支給品に言われた通り名前と兵籍番号、（佐志飛三五二四八）と記入した。続いて今まで着用していた私服を作業

服に着替える。私服類は不要品として、送り返すため荷造りをする。

明日行われる任命式の用意で目が廻りそうだ。白い布の名札を作業服の左胸に縫い付ける。

私は、二十四分隊三班田中と書いた。やっと一段落して厠に行こうと外に出た。瞬間、身体が寒風の冷たさに震えた。

○六○○、総員起し。我が生涯の記念すべき一日が始まった。真新しい作業服、錨の紋章の戦闘帽、真っ白い運動靴、何もかも新品だ。外は未だ暗い。

戦友も昨夜決まったばかりで、顔も充分覚えていない。皆同じ服装で、自分の並ぶ場所捜しに一苦労、舎外に洩れる僅かな電灯の明かりで、自分の前に来る者を確認、それは、顔の横に少し痣のある者と、昨夜覚えていた。「駆け足前へ」と、号令が掛かる。海軍では三歩以上は全て駆け足だ。「ザッ、ザッ、ザッ」足元の砂利が音をたてる。仰ぐ空には夜明け前の星が輝いていた。

「左ッ、左ッ、左右」「ピッ、ピッ、ピッピッ」と歩調を合わす号令と笛の音が、大地を駆ける音によく調和して、未だ明けぬ闇の静寂を破って響く。途中の兵舎からも黒い影が、一本の帯びの様になって集まって来る。暗い練兵場に部隊全員が揃うと「第四期第四十一分隊」と先輩の分隊から順々に点呼が始まる。五期、六期、七期、そして、八期

となる。「第八期第二十四分隊」。目を凝らして向こうをよく見ると、高い号令台の上で、当直下士官の報告に対し、一々答礼している当直士官の姿が、それとなく判別出来た。

点呼が終わると直ちに自分の兵舎に帰る。食卓番は、烹炊場へ朝食を取りに行き、残った全員で兵舎内外の清掃を始める。

食卓番は食器を入れた網袋を下げて、烹炊場に着くと、大きな釜の中で沸騰した湯に漬けて食器消毒、他の者は飯缶、汁缶と大きな薬缶に茶を入れ、それぞれ手に下げて帰る。その頃には兵舎内外の清掃も終わり、食卓も並べられて準備が整い、帰って来た食卓番による配食が始まる。

助教員が配食の要領を見て廻り、班長に出す飯の盛り方、沢庵の並べ方、食器、箸等の配置を指導、注意をする。

配食が完了すると、班長に報告、班長が食卓に着いて食事となる。食事が終わると食卓番は食器を洗い箱に納め、食缶類は烹炊場にて奇麗に洗い所定の棚に返納する。食缶は洗い方が悪いと、主計兵に飯を入れて貰えない事がある。

## 6　任命式

今日は入隊式である。朝食後、昨日支給され襟章等を付けて用意しておいた、第一種軍装に全員が着替える。真新しい軍服の匂いに私の胸は高鳴る。正帽には錨のマークが金色に輝き、襟章の桜と翼が誇らしげに光る。胸の七つボタンは海軍のシンボル、桜と錨。正服を着替えながらも夢見る心地がして、足が地に着かぬ深い感激と自覚の念。それが希望となって私の胸の中で熱く燃えた。それは私一人だけではない。誰の顔にも歓びと、感動が漲っていた。

時間が来て全員兵舎外に整列する。班長、助教員も正服を着けている。その姿は、何と凛々しいことか、作業服の時とは見違える程立派である。

私は、周囲を見回してがっかり、誰一人として軍服姿の似合った者が見当たらない。まるで母親に手を引かれて入学式に臨む新一年生にそっくりだ。

初めて履いた海軍の靴は履き易いが、駆け足ともなると脱げそうになり困った。

朝礼の後、任命式となる。

号令台の上から、司令の声が高らかに「海軍二等飛行兵ヲ命ズ」と響く。「ここにたっ

た今、日本で一番新しい軍人が誕生したのである。海軍軍人としての誇りと自覚を持ち軍務に精励することを望む……」と。

## 7　日　課

一日の日課は、〇六〇〇総員起しより始まる。〇五五五拡声器より「総員起し五分前」の声がかかり、〇六〇〇起床ラッパが鳴り響き「総員起し、総員起し」の号令にて一斉に跳び起き素早く服を着て寝床を揚げる。気がついた時には靴を履き違える事もなく、きちんと舎外に整列している。その所要時間僅か二分少々「左ッ、左ッ、左右」「ピッ、ピッ、ピッピッ」海軍独特の号令と笛の音が静寂を破って鳴り渡り、空には今日も星が降りそうに輝いている。「ザッ、ザッ、ザッ、……」大地を蹴る足音が闇を刻む。今日の日課は、陸戦、銃剣術、手旗か？　と考えながら駈けて行く。

点呼を終えて兵舎に帰ると、食卓番は炊事場へ他の者は分担して兵舎内外の清掃が始まる。掃除が終わる頃、食卓番の配食が始まる。その外の者は通路に向かって並び配食の終わりを待つ。終了すると全員が席に着く。班当番の私は、班長に配食完了を知らせ

に行く。

「第三班田中練習生参りました。第三班々長食事用意よろし」。班長が食卓に着いて食事が始まる。班長の食器にご飯を山盛りにしていると、他の者と見比べ機嫌悪く「俺の飯は盛り上げるな、今後はすり切りにしろ」と言って、前にいる者の食器に上の分を移してやる。

食事が終わると、食卓番は茶を利用して食器を洗う。（私の班ではお茶を飲む者はいなかった）汚れの少ない食器から先に洗うのがコツである。食器返納が終わると、本日の課業準備、時間になると舎外に整列、当直練習生の指揮で朝礼場へ向かう。

○八○○、「イヤデモカカレマタヤスマセル」の課業始めのラッパにて、分隊毎に一番最初は敬礼の動作、海軍は狭い艦内生活を配慮して、陸軍の敬礼に較べると動作は小さい。右腕を体斜め前から挙げて、人差し指の第一関節を右目前の帽子の縁に当てる。掌は相手から内側が見えぬ角度を執る。

課業は、二時間毎に区切られている。午前の課業が陸戦。手旗二時間である。午後も同じである。また何事も「十五分前」「五分前」の号令が掛かる。例えば（総員整列十五分前）とか（巡検五分前）等々である。

一七○○、国旗・軍艦旗降下で今日の課業が終了。夕食が終わると温習となる。この

時間は、テーブルで学習をしたり、手紙を書いたりする。また郷里の自慢話等にも花が咲く。中でも一番関心を呼ぶのは食べ物の話である。羊羹・ぜんざい・カキ餅・大福餅・特に大福餅のテンプラは美味いとの話、長い間お目にかからぬチョコレートも登場する。そして話だけであるが、喰べたつもりになって、目を輝かせている。

## 8　入　浴

浴場は、兵舎から駆け足で約二・三分の所に在る。入浴時間帯は日によって異なるが、入浴する時間は三十分時間前に罰直があると、それだけ入る時間が少なくなる、それは各分隊毎の入浴時間が決まっているからだ。

「入浴用意」の号令でテーブルの上を手早く片付け、タオルと石鹸を持って舎外に整列出発する。浴槽の広さは子供用のプール程もあるが、一度に百五十名も入ると狭く感じる。全員裸となり石鹸箱をタオルで巻き洗い場に集合する。

浴槽近くには、鬼が島の青鬼がまがいのボイラーマンが、バッターに似た長い棒を持って立っている。頃合いを見計らって棒で床を「ドスン」と叩き「入れ」と号令を掛ける。

私達は一斉に浴槽の中に飛び込む。かけ湯する余裕はない。全員が入ったのを確認すると「座れッ」と号令する。そこで又一斉に湯に浸る訳である。体を湯に沈めたら両手の人差し指二本、目の前に突き出す。これは（私は湯の中で体を洗っていません）と云う印なのです。それは何百人もの練習生が同じ湯に浸るため、後になる程湯が汚れてくるからだ。「上がれ」の号令で上がり体を洗い、「入れ」の号令で又入る。石鹸を持って行っても洗う時間が短いので、いつも頭の上に縛って置くだけである。指先が湯面より出てないとボイラーマンの怒声と同時に持っている棒が飛んでくる。要領を覚えると、浴槽の端に陣を取り、コンクリートの縁に背中を持って行き静かに上下する。そうすると少しでも垢が落ちた気がするのである。

終わり湯に当たった時は、その分隊から数名のバス当番が残る。全員帰った後で当番になった者は、気兼ねなく石鹸を使って十二分に体を洗う。洗い終わると、係員の指示で浴場の掃除をする。浴槽を洗う者、床を拭く者と作業を分担して始める。丸裸でマットを押して床の上を拭く、足を交互に送る度に、股間のものが内側をパタパタと叩くので気持ちが悪い。四つん這いになって拭いていると、係員が面白半分に股間を覗き「何だ、貴様未だ生え揃って、いやしねえじゃあねえか」と言ってからかう。

「ヨウーシ、今日はこれで終わり帰ってよろしい」と優しい声で言った。

分隊に帰ると、巡検は終わって兵舎の中は暗い、同班の者が敷いてくれた寝床に入ると、すぐに眠ってしまった。

一日に一課目は必ず、陸戦がある。私達練習生が銃を担いで訓練をしている練兵場の上空を、隣の航空隊から複葉の練習機が数機やって来て、頭上を煩く飛び回る。胴体も翼も皆布張りで、濃い橙色をしているので、通称赤トンボと言う。翼と胴に白で縁取りの日の丸がある。これは海軍の標しだそうだ。

今日も数機がやって来て、頭上を賑やかに飛び回る。時にはエンジンを止め頭上に来て突然回転させると大きな爆発音と共に黒い煙が噴き出す。黒煙だけを我々の頭上に残して飛び去る。得意そうに機上から見下ろす、パイロットの顔、眼鏡がキラリと光った。その時「田中練習生ッ」赤羽根教班長の声に、思わずドキッとして吾に返った。「ハイッ」「ここまで来い」と手招きする。私は銃を支えて列から離れて班長の許へ行く。「貴様は、あの飛行機が墜ちるまでここで見て居れ」と言って班長は、小隊を連れて去って行った。

後には、広い練兵場の中で只一人、私は銃を持ってポツンと立っていた。

## 9　大晦日

昭和十九年十二月三十一日大晦日、夕食は大きめのビスケット二枚と、ぜんざいであった。初めは食卓番が、酒保の配給を持って帰ったのかと、大喜びだったが、これが夕食であると判って、がっかりした。

今夜の温習時間は、バリカンを総動員して、各班とも散髪に大童である。「痛ッ、毛を引っ張ったぞ」「我慢しろ、毛の一本や二本抜けたといって、文句を言うならここで止めるぞ」「覚えとけ、今度は俺がやる番だからな」初めてバリカンを手にする者もいて、どの班も大騒ぎ、巡検が近づいているが、何時終わるのか果てしない。

一応打ち切って就寝する。

巡検が終わると早速点灯して、残った者の散髪が又始まる。「元日と言えば、昔は下着を始め褌に至るまで皆、新品と着替えをしたものだった」と某班長の話である。

## 10　元　旦

昭和二十年元旦、〇六〇〇、総員起しで新年が始まった。朝食は冷えて固くなった雑煮餅が二切れ、味噌汁の底に沈んでいた。噛むと口の中でコシコシと粘り気なし、胃袋の中には未だ相当の空間を残している。

正月三ヶ日の間、この雑煮餅二切れだけであった。

〇八〇〇、第一種軍装に着替えると儀式に出席のため練兵場に向かう。大地を踏む一足毎に、霜柱の砕ける小気味よい音が「ザクザク」と脚を伝わってくる。清々しい元旦の青空の下に練兵場には何時の間にか、白い天幕が張られ、式場が設置されてあり、折りからの朝日を浴びて、神々しく光っていた。

順番を待って各分隊の列が、天幕の外で控えている。多勢の為に一度には収容出来ないので、分隊毎に分けて儀式は行われた。二十四分隊の番が来て分隊長の指揮で、式場に入る。天幕の中は陽が透かして明るい。

正面の玉座に、天皇・皇后両陛下の御真影が飾られてあり、分隊は其の前に姿勢を正して整列す。両側には白布で覆ったテーブルを前に、司令、副長、その他の士官が威儀

を正して見守っている。直ちに分隊長の声、「最敬礼」、稍あって「直れ」、儀式はこれだけであった。次の分隊と入れ替わり、兵舎に戻ると作業服と着替える。

後の課業は、休日である。

## 11　水道の水

入隊して一番不便に感じたのは洗面の水である。点呼から帰ると皆一斉に洗面所に走る。洗面所には電灯はなくコックを捻っても水が出ない。蛇口をトントン叩く音がする。私も掌で受け拳でトントン叩くと僅かに掌に水滴が落ちて溜まる。其の水を、化粧水の様に顔に塗る事で、顔が濡れ、洗ったつもりになる。従って朝歯を磨いた覚えがない。早朝を外せば充分、水は出るから昼休みにでも、磨けば良いのであるが、朝が過ぎれば洗顔の事など忘れている。

班長の話に依ると、揚水場のモーターの、能力不足で、朝一斉に水を使うと、揚水タンクから遠く離れている所では水圧が弱く、水が出なくなるとの事である。課業始め頃には充分に出る。

艦船勤務になれば水は非常に貴重である。洗面器一杯の水で口を漱ぎ顔を洗い、褌の一本も洗濯する様に、ならなければ一人前ではないと、班長は言われた。

## 12 酒保

一週間に一度ぐらい、温習時間に酒保からの配給が有る。これを各班に分配するのが、村上兵長で、各班当番は、それを自班に持ち帰り、個々に配分する。酒保品は主に乾パン、蒸し芋であった。乾パンは数で分けられるが、芋はそうはいかない。それで大凡の身当てでいく。今晩も班当番整列があり、当番の持って行ったバス桶に芋が盛られ、デッキの上に並んでいた。場所は事務室前で、天井の電灯から少し離れているので、村上兵長を取り囲んでいる場所は薄暗い。何時もなら「田中ッこれでよいか見てみろ、貴様は文句が多いんだから」と言って私を睨む。しかしこの睨み方は、兄が弟を諭す眼差しで少しも怖くない。これは一番始めの配給の時、分配を終えた兵長は、班当番全員を見渡して、「どうだ、これでいいか見てみろ」と尋ねたので私一人が「私の班のは少ないです」と言ったのを捉まえて分配の度毎に、口癖の様に、私に向かって言うのである。私の方も心得

たもので「いいです」と言った。

「ようし、持って行け」と、なるのであるが、今晩は違っていた。村上兵長は、数を算え直して首を傾けている。私は心の中で「シマッタ」と思った。数を算えていたとは知らぬ私は、手近な芋を一つ〝ギンバイ〟（失敬する）して、ズボンのポケットへ忍ばせていた。ポケットは一目瞭然大きく盛り上がって太股の上でコロコロしている私はズボンの上から手で芋をそっと押さえた。

村上兵長は顔を上げると、「誰か一ツ持っているだろう、出せ」と言った。私は折角ズボンに入れたものを渋々出し、村上兵長の前に差し出す。

彼は黙って受け取ると、予定されていたバス桶の中へ入れる。

「よし、持って行け」班に帰った私は、芋を分配しながらやり切れない気持ちになっていた。土井が私の顔色を察して尋ねた。私は経緯を話すと、「何んだそんな事か、くよくよするな、班の為にやったんだろう」と慰めてくれる。しかし、私の心は治まらなかった。

思い余って事務室へ行き村上兵長の前に立った。「先程は済みませんでした。自分が悪かったので殴って下さい」傍に居る各班長達が皆私の方を見た。しかし、村上班長は「何の事を言ってるんだ帰れ」と、取り付くしまもない。仕方なく事務室を出たが、村上班長は、班長達に知れない様気配りをして下さったのである。

## 13　寒稽古

「総員起し」で舎外に整列すると同時に、実習部隊の方向から耳を劈(つんざ)くエンジンの始動音が、星の燦めく払暁の空気を震わす。其の爆音は決して十秒か二十秒で止む。甦った静寂の中に霜を踏み砕く駆け足の歩調がセコンドを刻む。見上げる暗黒の空に星が凍り付いている。

「ザッ、ザッ、ザッ、ザッ、……・」

「左ッ、左ッ、左右ッ。左ッ、左ッ、左右ッ」

「ピッ、ピッ、ピッピー。ピッ、ピッ、ピッピー」

大地を駆ける練習兵の足音に、海軍ならでの号令と、ホイッスルの音がよく調和して、夜明け前の闇の中を駆け抜ける。毎朝点呼に通う道は決まっているが、途中で餅を焼く匂いが漂ってくる。醤油の焦げる芳しい匂いが朝食前の、胃袋を刺激する。航空隊の外柵近くに、一軒の民家があり、朝早くから部屋の明かりが灯っている。匂いは其の家から流れてくる。

寒稽古は駆け足である。点呼後裏門から隊外に出る。梨畑と、隊の柵との間の細い道

に沿って走り東海道に出る。松並木に添って西へ行くと航空隊の正門に至り、衛門を潜って分隊兵舎まで帰る。松並木に差しかかった頃に、やっと空が明るくなって来た。駆け始めは普通の速歩であるが、途中から何故か全力走法となる。それは後から出発した先輩甲飛生が、我が分隊を追い越すことが出来る。これが原因であった。

甲飛生は、年齢、体格ともに私達より優れており、粒も揃っている。

私達は、年齢が十四歳から二十歳と、身体も大きい者から小さい者と、まちまちであった。先頭を走るのは背の高い者から、後のチビ連中は、始めから終わりまで早駆けの連続だ。追い越されたら、追い越し返すのが予科練の精神とかで、私の心臓は破裂しそうであった。其の寒稽古も残る処、あと一日となった朝、寒稽古から帰ると、腹具合が悪く痛む。厠に行くと下痢だった。

病室で診察を受ければ、明日の寒稽古を、休めるかも知れないとの、良からぬ予見で、班長に受診の申し出をすると、「今日は、実弾射撃の体験訓練があるので、是非受けておかないと、教育期間中には二度とはない。下痢位なら、一回飯を抜けば良くなる」と勧めてくれる。だが私には、食事を一回抜くなんて、とんでもないことで、その上、若しかすると、あの苦しさから逃れられるとの方が、実弾射撃より魅力があった。それが大

きな誤りであったとは、神のみが知るのである。」

## 14　入　室

班長から許可を貰って、課業始めより一足早く兵舎を出る。

医務室の玄関を入ると、数人の患者が待っていた。受付で受診票を貰い必要事項を記入して提出、すると硝子コップ一杯に入った下剤のヒマシ油を飲めと渡される。私は一滴も残してはいけないものと全部飲み干す。

暫くすると気分が悪くなり、厠に急ぐ。目眩（めまい）がして鼻血が足元の床を赤く染めた。便意を催すので便器を跨ぐと壊れた水道の水の様に、腹の中の物が勢いよく流れ出てしまい、胃も腸も空となって身体が軽くなり、気分も幾分よくなった。

名前を呼ばれ診察室に入り、上半身裸となりベットに寝る。医官は聴診器を胸に当て、手で腹を押えたりして病名を、急性胃腸炎と診断し、入室となる。

病室は、ベットが二十床程あり七～八名の患者が静かに寝ていた。私も与えられたベットに横になり天井を見上げる。こんな筈ではなかった。今日と明日の寒稽古さえ休めた

ら好いと甘く考えていたのに、入室とは余りにも予想が狂い後悔先にたたず。

今頃班の者達は、実弾射撃を始めているだろうか、射撃場は何処にあるのかな、と思っている中に眠ってしまう。突然周囲の騒ぎで目が覚める。食器の触れ合う音がして配食が始まっていた。もう昼なんだ、だが元の静けさを取り戻した時は昼食は終わっていて、私の所は食事が通過していた。

病室の患者は何事もなかった如く上を向き静かに寝ている。患者同士の対話が全くない。私の胃袋は猛烈に空腹を訴えていた。貰った薬袋を開くと、中には濃い橙色をした粉薬が入っている。舌の先に少し着けて舐めると苦みが口の中に広がる。薬を飲み終わると眠る事の外何もすることがない。

又配食の音で目が覚めると窓の外は暗くなり窓硝子に電灯の明かりが映っている。待っていた夕食も素通りして行く。仕方なく残った薬袋を開き粉薬を舐める。舐めながら班の事を考える。

今、夕食が終わり温習の時間だ。皆何をしているだろうか、明朝の寒稽古を休める私を羨やんでいるかも知れない、こんな惨めな状態でいる事を知る訳がない、又私も知られたくない。後悔と苦い薬が心と胃壁を攻める。それでも巡検ラッパが鳴る頃は空腹を忘れ眠っていた。

翌朝、総員起しのラッパで目が覚める。起きる必要はなかったが、朝食に寄せる期待が先に立っていた。だがそれも裏切られる、その上昼食までも。待ちに待った食事は夕食で来た。盆の上にアルマイトの食器が一つ、先輩が私のベッド迄運んでくれていた。食器の中を覗いて驚く。紅白の梅干しが二つ並んでいるのかと思う程お粥が少ない。お粥を一口と言うよりも、一舐と言った方が確かである。食事が終わっても梅干しの味が無くなってしまう迄しゃぶる。

翌朝になっても、食事の量は変わらない。ふと先輩の食器を見て吃驚。彼等の食器には白く旨そうな粥が、いっぱい入っていた。このまま行くと私は、栄養失調で本当の病人になってしまう。梅干しの種をしゃぶっているどころではない。私はそう思いつくとすぐ行動に移った。

事務室のドアをノックして入る。部屋の中では二人の衛生兵が、雑談しながら掃除をしていた。私が病状が回復したので退室させて欲しいと告げると、一人の衛生兵が「貴様、誰の許可を受けて隔離病棟から出て来た、股を開け、歯を喰い縛れ」と言うなり頬を数発殴られる。「よし、便を持って来い」と言われて厠に行く。が如何せん入室以来昨夜の食事まで、水の一滴も口にしていなかったので、困った事に便がなかなか出ない。必死に力んでやっと、兎の糞に似たものが一粒ポロリと出た。それを紙に包んで持って行く

と「何だそれは、ちゃんと容器に入れて持って来い」と言われ、改めて患者用の便器に移し持って行く。それで無事退室許可が出る。

ふらつく足元をしっかり踏み締め、勇んで病室を後にして、懐かしの分隊に帰る。分隊ではデッキで体操をやっていた。早速着替え体操に参加した。

## 15　B29の墜落

「第二警戒配備、総員配置に付け」拡声器から大きな声の号令が練兵場一杯に広がる。分隊は直ちに課業中止、急ぎ兵舎に帰ると、防毒面を右肩から掛け、左の腰に紐で結び、左肩からは、止血棒の細い紐を胸の前で交叉し、片方を口で噛んで固く締めながら舎外に出て、備え付けの大きな火叩きの縄を水で濡らして全員整列、格納庫に向かう。一月の風は冷たく、濡らした縄から雫が顔に落ちる。

私達の任務は、格納庫の屋根に落ちた焼夷弾を火叩きで払い落とし、燃える火炎を叩き消す事だ。あの高い格納庫の屋根に、この火叩きで消せるのか、と思案しながら走ってる途中、第一警戒配備となり、道端に深く掘った壕に入って身を伏せる。

「おい、飛んでるぞッ」誰かの声に、指さす空を仰ぐと碧い空の中に、短い飛行雲を引き銀色に輝くB29の編隊が、東に向かって飛んで行く。岡空の東は名古屋、南は飛行場を挟んで実習部隊の格納庫が並び、そのずっと向こうに、低い緩やかな山並みの尾根が、濃美平野を縁取る様に東西に延びている。北は安城、西は岡崎を望む。

B29二～三十機の編隊が通り過ぎた後、一機遅れて飛んでいるB29がいた。編隊はもう肉眼では見えない。高度も低く速度もかなり遅く、尾部からは飛行雲と違った白い煙を引いている。私達の目は、その敵機に集中していると、機体の下に小さな白い花が三ツ四ツ開いて後方に流されて行った。搭乗員が落下傘で脱出したものだった。その間にも、B29の速度は目に見えて遅くなり、白い煙に黒いものが混じり、やがて黒一色に変わった。機体は一瞬、空中で停止したのではないかと思われ、銀色に輝くジュラルミンが静かに、静かにその侭の姿で黒煙に包まれて降下して行った。

その姿が、山の嶺にかかる頃、急速に機首を落として山腹に激突した。その瞬間黒煙が盛り上がり、火柱が立った。

私達は、誰一人声を立てる者もなく、敵機B29の最後を見ていた。

## 16　バッター

悪事をはたらけば当然制裁はある。しかし海軍では、やれ動作が遅いの、やれ気合が抜けているのと、休む間もないほどよく殴られる。

海軍の罰直の中で代表的なものは、バッターと、前支えである。「前支え」の号令で、両手両足を地面につけて身体を支える。十分、二十分とたつうちに、あぶら汗が流れ身体全体が震え出す。これに較べて、バツターは男性的だ。「バシッ」とダイナミックに響くあの音、ジーンと激痛が前身を駆け廻る。この激痛こそ海軍独特の醍醐味ではなかろうかと、言うのは聊か負け惜しみであろう。

「おい、何があったんだ」

「うん、何班の誰某が何々だったんだとよ」

バッターの後、痺れの残る尻を撫でながらこの様な会話をする事がよくある。だからといって彼を恨み責めたりはしない。そんな事は痛みが去る頃は忘れている。だが黒い痣だけが尻に残っている。

或る日、こんな事があった。一日の訓練が終わり夕食前の一時は心の緊張が緩み、一

部の練習生が、デッキで七・八名が略帽を被ったまま騒いでいた。そこへ運悪く、某班長が通りかかった。「貴様らッ、兵舎の内と外の区別もつかないのか」と、大きな声がテッキに響き渡る。慌てて帽子を脱ぐも後のまつり。

「貴様らの弛んだ心を叩き直してやる」と、言って銃架から徐に木銃を一本抜き取った。騒いでいた連中はと見ると、おとなしく一列に並んでいる。

「ようしッ、一人づつ前に出て来い」と言って班長は列の一番端の者を指差し、掌に唾を付け木銃を構えた。一人づつ前に出て足を開き、両腕を伸ばして高く上げ、尻を叩き易く突き出す。「バシッ」と、鈍い音がして木銃の床尾板が尻の柔らかい肉を打つ。「次ッ」の声で、順番に班長の前に出て同じ姿勢で立つ。三人目で「ボキッ」と、異音がして木銃が折れた。すると班長は銃架から別の木銃を取り替えると再開する。何時の間に来たのだろう、村上兵長が傍に立ってニヤニヤと笑っていたが、班長より木銃を受け取り残りを引き受けた。

## 17　甲板掃除

毎週土曜日は大掃除がある。これを、甲板掃除と云う。

日常起居している板の間を、軍艦の甲板に見立てて拭く。掃除にかかる前に数名の者が大きなオスタップに、並々と水を湛えて運んで来て、床に撒き散らし甲板ブラシ又は、マニラ麻ロープを三十センチ位に切り揃え、五～六本を束ね、周りを細い、ロープで堅くグルグル巻したもので床を擦るのだ。

甲板ブラシを床の上に両手で押さえ、腰を落として構え、左足を前に送ると同時に二、三回擦りながら前へ前へと進んで行く。この作業が一通り終わるとソープで拭きとりのデッキ回りが始まる。七、八名が甲板の端に一列に並び、逆の壁に向かって雑巾で床を擦りながら身構える。「ピィー、回れッ」と、笛の音が響き号令がかかる。

一斉に振り向き雑巾を押して一気に駆ける。距離は二十メートル余り、前の板壁に突き当ると又、床を擦りながら次の号令を待つ。「ピィー、回れッ」振り向くと同時に脱兎の如く駆けて元に戻り、次と交代をする。だがビリとなると交代が出来ず、次の者と一緒にもう一度回される。デッキの上に水が残っている時は、雑巾が滑り駆け易いが水が無くなると、足腰に相当の力が必要となり、駆けるのが苦しくなってくる。

このデッキ回りも罰直に使われる。二、三回ならともかく、四、五回と連続に回されると終わっても直ぐには立てない。

或る日、甲板掃除が中止になった事がある。当日はデッキに撒いた水が見る見る内に凍り、デッキ回りが不可能となった時だった。

今年の寒さは六十年振りだと、農家のお年寄りが言っていたそうで、そのためか、手が赤黒く浮腫(むく)んで、痛そうな凍傷に罹っている者が、多くみかけられた。

## 18　当直練習生

私に、当直練習生の順番が回って来た。当直練習生は朝礼、課業始め等の行き帰りに分隊の指揮を執る。私はこの指揮号令に自信があった。小学生の時代から、号令を体験していたからだ。

その朝、二十四分隊は私の指揮号令で朝礼場に向かった。今までは隊列の中に居たが、今日は百五十名の列外に只一人。号令一声、隊列が整然と移動する。緊張の中、少しの優越感あり。

温習時間も、残り少なくなった頃、何時もの通り当直下士官から翌日の日課を聞き全員に告げる。「明日の課業は、陸戦、体操、手旗信号、銃剣術、以上」。

「消灯」「巡検」を最後に、今日一日、当直練習生の、課業は滞りなく終了した。

## 19　戦備作業

名古屋の空襲以後、課業の中に戦備作業が組み込まれた。

作業は飛行場の拡張工事で、土を掘ったり埋めたりする仕事である。十文の足に支給された地下足袋は十一文半だ、足袋の上からしっかりと脚絆で巻き付け、スコップを担いで現場へ。小高い岡を切り崩して低い所に土を搬ぶ、近くは、モッコを使い、遠い場所はレールを敷いてトロッコで搬出する。

良い天気が続いて風のない日は汗ばむ程だ。作業場の近くは梨畑が散在して、ここも元は梨畑だったのだ。

お百姓が、梨木の幹の皮を道具で削っている。そうすれば果実の歩留まりが良いそうだ。休憩には、岡を切り崩した恰好の場所に、風を避けて腰を下ろして休む。

そこからは実習部隊（第三岡崎空）が手に執る如く良く見える。広い飛行場の遥か向こうに、建ち並んだ格納庫の屋根が陽炎に揺れて、蟻のように小さく見える人々が忙し

そうに動いていた。

一と月前には煩い程、飛んでいたアカトンボの練習機は今では影も形も見えない。錬成中なのか、天山艦上攻撃機が盛んに離着陸訓練に励んでてる。「離陸は易いが着陸は難しい」と、或る班長が言っていたが、矢張り九三中練の飛練を卒業したばかりの搭乗員であるのか、二日に一度の割で着陸に失敗する機を見る。

今しも着陸姿勢に移った、天山に巧く着陸してくれよと、私達は祈りながら見物していた。車輪が地面に着地すると土煙が上がる。「巧いッ、その調子で行け」と自分が操縦している様な緊張感で思わず手に汗が滲む。土煙が切れて僅かに機体が浮く、又土煙が立って高く浮き上がる、二度三度とバウンドを繰り返して前にのめり転覆した。三枚のプロペラは巴形に曲がり逆さになった機体の下から飛行眼鏡をキラキラさせて、二人の搭乗員が這い出て来た。

恐らく滑走路が、充分に整地出来ていないのだろうと、私達は素人判断で話し合っていたが、広い滑走路ですら班長の云われた通り難しい。まして狭く動いている空母の甲板に、着艦ともなれば神業にも等しいと思う。

それをやり遂げるには、弛まぬ日常の訓練と努力が大切と痛感する。私達に課せられた日頃の厳しい訓練も、バッターやビンタの罰直は緩性になる我々に対しての修正だろ

う。この様な課程を得て、誇りある海軍航空隊飛行機搭乗員としての道を一歩一歩進んで行くのである。

振り返って見れば不可能とさえ思えた事が、ある日意図も簡単に出来る自分を発見して驚く。これも偏に訓練の賜物だ。風が凪いでもモッコ担ぐ者もスコップを握る者も汗を飛ばし作業をする。

滑走路と覚しき当たりで、飛行服を着た訓練生十数名が駆け足をしている。

額の上の飛行眼鏡が、太陽の光を反射して時々ピカッ、ピカッと光る。罰直の駆け足だろう、恐らく飛行服の中は大汗が噴き出て流れていることであろう。

## 20　引率外出

小学校時代の遠足を思い出させたあの行軍。そして今度は待ちに待った引率外出である。日曜日の朝の食卓番は大忙しだ、何故ならば昼の弁当分まで、持ち帰って配食しなければならないからだ。当然食卓番以外の者も手伝って、柳行李の弁当箱にご飯を詰める。赤い福神漬と黒い佃煮が、副食として飯缶の蓋に盛ってある。「この黒いのは何だ？」

忙しそうに食卓番は手を動かしながら「いなご」と答える。「へーッ、いなごッ」、「そう、いなごを醤油で煮付けた奴」。

如何にも物知り顔の食卓番、実は彼も烹炊所で聞いて来たばかり、成る程、翅も脚もある。私は最近まで「いなご」は風邪薬とばかり思っていた。

一種軍装に着替え、弁当を入れた糧納と、水筒を肩から掛け、用意が整うと舎外に整列、一班を先頭に兵舎を出発した。

私達が縦隊で隊門を出る時、白い風呂敷包みを小脇に抱えた先輩達が、三々五々と隊門を出て行く、彼等は自由外出だ。東海道の松並木に沿って東に上る。老松の枝が青空高く聳え、古き参勤交代の往時を偲ぶ風情が、多分に漾(ただよ)っていた。

風はなく穏やかな、遠足日和とでも申すべきか、軍歌に足並み揃えて行進した。

滔々たり矢作川の清き流れ、その昔、日吉丸が、筵を被って寝ていた橋の袂とは、何処なのか、時は数百年も経っている。

橋を渡れば岡崎市である。先ず最初に練習生倶楽部を訪れた。案内されて入った部屋は講堂の様に広々として先客は誰も居ない。お世話になる人だと言ってニコニコと善良そうな年配の男性を紹介された。その人がこの倶楽部の責任者らしい。

私達以外に、客の居ない広い座敷は寒々として、隅の方に、囲碁や将棋の盤が人待ち

顔に置き並べられていた。倶楽部を出て岡崎公園に着き解散。自由行動になった。旧岡崎城跡には城らしい建物はなく、石垣のみが、昔日の面影を留めているだけだ。天守閣の跡は、広場になっていて、大勢の人達が行き交っている。広場の隅に小屋が在って、日本猿が四、五匹飼われていた。木屋に嵌めた金網と、鉄棒の狭い隙間から仔猿が一匹、出たり入ったりしているのが、愛嬌である。仔猿が木屋の外に出る度に親猿がやきもきと騒ぐ。なんか仔猿の方は、それを面白がっている風にもとれる。

猿の檻を眺めていると、人混みの中に、一際目立つ存在の女性が、二人何事か話し合い笑い声をて足早に通り過ぎて行く。頭の島田は鬘か、髪に挿した花簪がヒラヒラと踊る。彼女達の年齢は私と同じか、多くとも二ッ三ッ上だ。長い振り袖の袂をヒラヒラさせ、白化粧の下には未だ幼い面影を宿し、殊更にカッポの音を響かせて、坂を下り姿が消えた。その女性達の背に、女の悲哀を感じて見送る。

猿小屋の向こうに行くと、広々とした濃尾平野が眺望出来た。遥か彼方は、焼き爛れた名古屋の市街、ずっと手前は我が航空隊、その左側が安城だ。すぐ足許の女性の去った方向を見下ろすと、濠に沿って長い棟の家が並んでいた。そこが彼女達が帰って行った住居である。私は、北側の濠の方へ下りてみた。青い水に白い家鴨の群れが泳いでいる。濠の左の方へ行くと道が細くなって、小さな石橋で区切られていた。石橋の手前に、露

店が一つあり、年配の男が何かを売っている。近付いて覗くと、細く切った干し大根を蒸して売っていた。一杯五銭也。

## 21　自由外出

柳行李の弁当箱を真っ白ノ風呂敷で包み、小脇に抱えて兵舎を出た。外出点検を受け衛兵所の窓口に敬礼し、木製の外出札を所定の箱にいれる。衛生伍長は立派な鼻髭を生やした上等兵曹、左腕の善行章が四本賑々しく光っていた。

戦友の、深谷、石松、某の三名は、勇んで衛門を出る。弾む足取りは自然と東海道を東に向いている。矢作橋の上を吹き抜ける寒風と一緒に、橋を渡り切るともう岡崎市内だ。先ず練習生倶楽部を覗いて見るが、人の姿が見えないので其の侭引き返す。行く宛もないので、岡崎公園に行くことにした。公園の中は子供連れの親子が、三々五々と散歩を楽しんでいた。

猿の檻には相変わらず、仔猿が一匹出たり入ったりして遊んでいる。

向こうの方から、外套の袖に黒い腕章を付けた二人の下士官が来たので、私達は敬礼

すると、答礼して通り過ぎた。腕章には白い字で、巡邏と縫い取りがしてあった。

公園の中では散歩する以外、何にもすることがない。誰言うこともなく公園の外に出ていた。行く当てもない全くの方向音痴、だらし無い三人である。仕方なくぶらぶら歩いていると、狭い人通りも少ない裏道に入っていた。

三人の気持ちは同じで、下宿を探すことを考えていた。それで、その方法について話し合った。

「どんな理由にしたら良いだろうか」「そうだなお茶を飲ませて下さいと言うか」三人寄れば文殊の知恵。と言うが仲々良い考えは浮かんで来ない。

そう簡単に下宿は借れる筈はない。俺は厠へ行きたくなって来た。何処かで借りようと、石松が言った。いいじゃないか、それでいこうや。皆が順番に厠を借りて、時間を稼ぐ中、親切な人であれば、お茶でも飲んで行きなさい、てな事になるかも知れない。でなければ諦めて別を探そうと、言う事で話が決まった。「厠へ入ってもあまり早く出るなよ」と、色々考えていると、丁度裏木戸が開け易い民家が目に付き、格子戸を開け中庭に入る、二人も後に続く。「御免下さい」と声をかける。「ハイ」と、裏木戸からの訪問に驚いた声が奥の方から返って来た。四十過ぎのおばさんが、姿を見せて硝子戸の間から予科練が顔を出したので、怪訝な顔をしてこちらを見た。

「あのう、済みませんが厠を貸して下さい」「あ、どうぞどうぞ、此の向かいにありますから」一人かと思ったのに、後に二人もいるので尚更驚いた様子で、私達を見渡した。外で所在なさそうに、立っている私達を見て「そんな所に立ってないで内にお入りなさい」と言ってくれた。渡りに船とばかり「失礼します」と中に入る。

上がり框（かまち）の長火鉢には、五徳に薬缶が掛かり、口から湯気が出ていた。おばさんは奥に行くとすぐ茶道具を盆に乗せて来る。火鉢の薬缶を取り外すと、代わりに餅網を掛け、皿の上に盛ってきた物を乗せた。

「これは配給の、大豆粕だけど食べてごらん、余り美味しいものではないけれど、香しいよ」湯呑みにお茶を注ぎながら話してくれた。その時、「おい、次ぎは誰だ」と、心配そうな顔が細く開いた硝子戸の間から覗いた。石松「もういいんだ」と言って、早く入って来る様に手招きをすると、怪訝な顔をし気兼ねしながら入ってくる。

「皆さん靴を脱いで上にあがんさい」と、言って又奥に消える。私は大豆粕をかじりながら熱いお茶を啜った。

娑婆では主食の代わりに、この様な物を食べているのか、耐乏生活もここまで来ているのかと思うと、何だか悲しくなった。

大豆の粕と言えば大きさ直径一メートル程、厚さは二十センチ位の円板で中央に穴が

開いている。油を採った搾り糟で、肥料として満州から送られて来たもので、四、五年前まで農家の納屋隅に、青黴びを生やして一ッや二ッ転がっていたものである。

おばさんは奥に行く度、何かを運んでくる。今度は米櫃を抱えて来た。

「そうそう、味噌汁が温まったかな」と言って立ち上がると奥に行き、今度は湯気の上がる鍋を運んで来て、椀に味噌汁をよそいながら「今日は突然で何も出来なくてごめんね、今度は何か造っておくから、次は何時来られる」と言う。私達は次の外出日を教えて、家族の話などする。おばさんのご主人は、一人娘と共に名古屋の軍需工場に努めているとの事である。「では自由によそって食べてね」と、私達が気兼ねしない様気遣って奥に行った。私達は遠慮もせず出してくれた物は全部喰べてしまい、お礼を言い次の日を約束して別れた。

〝今日も行く行く岡崎街道、七つボタンの乞食が通る〟

「貴様らは、此の歌の意味を知っているのか。今、岡崎市民の間で流行っている歌だ。一体全体貴様達には、誇りが有るのか」と、先日某班長が言った言葉が、強烈にに蘇ってきた。

私達も予科練に入る前まで、耐乏生活をしていたではないか、一般市民の生活、特に生きて行く上で尤も大切な、食糧事情を考えるべきではないのか。

先日おばさんが出してくれた、大豆粕が如何にもそれを物語っている。市民が好意で提供してくれる御馳走は全て、乏しい配給の中なら自分自身の食を、削って私達に喰べさせてくれたのである。それに引き換え、私達の食事は充分とは言えない迄も、一般市民より多く支給されている。それを思うとあの親切で優しいおばさんの事が、思い浮かぶ、私の母と同じ年配である。ことさらそのご好意が痛い程、心に沁みるのである。こんな事を思うと、次の外出日の足は、どうしても岡崎に向かない。私一人が、行かない事でおばさんの負担が少しでも軽くなる様に思えて、約束を破り隊門を出ると一人、東海道を安城へ向かった。

安城の町に入ったが、別に当てがあっての事ではない。何時しか町を外れ、岡崎の方に向かって歩いてる。私は、岡崎に行くのを態々遠回りをしたのだ。

行く当てもなく公園の中をうろついていた。すると私に声を掛けた人がいた。その人は、同じ分隊の某練習生だった。彼も行く当てもなく、うろうろしていたと言う。

どちらともなく、帰ろうかと言って公園を出る。

街外れに一軒の小さな食堂があった。誰に教えて貰ったのか、彼は練習生が良く行く店だ、入って見ようという。

建付の悪い硝子戸を開けて中に入る。狭い店の中は、中央と両端にテーブルが並び七・八

名の先客は、皆練習生ばかり。数名の者が競り合う様に、腰掛けて湯気の立つ丼を啜っていた。私達二人も雑炊を注文して空いている席に腰を掛けて待つ。

程なく二人の前に、湯気の立つ丼が運ばれて来た。湯気を吹き箸で中身を探って見ると、殆ど大根と菜っ葉ばかりで、米粒は菜っ葉の陰で、目高の様に泳いでいる雑炊だった。店の主人が「葡萄酒がある」と言うので、飲んでみる事にする。色鮮やかな赤い液体の入った硝子コップを見ると、子供の頃母が買ってくれた赤玉ポートワインを思い出す。期待して一口含んでみる。「酸ッパイー」私は、顔を歪めてコップから唇を離す。まるで梅酢の様な味だ。「おい、どうしよう」と言ったが金を払うのに捨て難い。二人揃って目を瞑り一気に飲み干し、雑炊五十銭、葡萄酒七十銭也を支払って店を出る。

## 22　基本作業

昨日までは、銃を持ったり、銃剣術の防具を付けての訓練が主だった日課が、今日からは一変して、教科書にノート、筆記具を持って教場へ通う事となった。

教場は、格納庫と、工場の様な作りの建物で、中には教材の機械、部品等が並べてある。

教員が、「これは（ノギス）これが（マイクロメーター）この（ゲージ）は（ダイヤルインジゲーター）で何れも長さを測る工具である」と説明があった。

聞き慣れぬ名称、初めて見る工具の種類、絡んだ配線コード、星形発動機、クランクシャフト・ピストン、初めて知る部品の名称、解体したエンジンを洗滌する白紋油の匂い、バケツに入ったシンナーの臭いが鼻をつく。立て掛けた戸板には、大小の、ナットを号数順に、又は種々の形をした針の見本が、幾何学的に配列されている。

「田中、一寸来て見ろ」赤羽根教員が何かを持って来て、私を呼ぶ。駆け寄ると、「この針金とこちらの針金を持って見ろ」言われた通り私は両手に、一本づつ針金を持つと、教員は持った道具のハンドルを回した途端、（ビリッ）と衝撃があって電流が私の前身の筋肉を叩く様に流れた。「ワッ」と、言って思わず持っていた針金を手離す。「どうだった、今のが電流と言うものだ。この発電機で百ボルトの電流を起こすことが出来る」と言ってニコニコしている。

「百ボルトだと人間は死ぬんじゃないですか」と、尋ねると「ボルトは百、五百、あっても、電流が小さければ大丈夫だ。但し、百ボルトなくても、電流が強いと死ぬことがある。この発電機は電流が弱いから大丈夫」と教えられる。

別の教場には、飛行機の張り布の張り方、機体の骨組み、塗料の種類、塗装順序等々、

飛行機整備の基礎教材が並べられている。整備基本作業を、略して（基作）と云い、教育は、基本発動機整備（基本発整）応用発動機整備（応用発整）と進み最終は「エナーシャ回せ」の号令が掛かり、発動機試運転で卒業となる。

教場の広場に初期の「零式戦闘機が二機」並べて置いてある。優秀だったこの飛行機も今では、私達の教材となっている。（基作）へ行く回数が段々減って来た。

第二警戒配備となると、格納庫に行き機材分散の作業が多くなる。エンジンのない布張りの練習機を多数で押して退避作業、発動機を四、五人掛かりで移動させている組もある。

司令塔建設作業もあった。指揮所を地下に移動させて、地上には防空監視塔が建つと言う。私達の作業は、地面を深く掘り土砂をモッコで地上へ運び上げる仕事だ。

定員分隊の兵隊と一緒に作業をしているが、年配の補充兵のため動作も鈍く、今日もモッコの紐を引き摺っていて、甲板士官から天秤棒で、バッターを受けていた。

## 23　分隊長の交代

軍人精神が軍服を着ている様な、分隊長大畑清松中尉が転出されて、後任の、平野啓三大尉が着任された。新分隊長は若く溌剌とされた方で、恐らく岡空随一の美男子である。六尺近い長身と、長髪七、三に分けた容姿は何処か、貴公子の風情がある。腰の佩剣（はいけん）と、飛行靴を履いた凛々しい姿は、我々練習生の憧れの的であった。

前分隊長の厳父、パッキン型とは対象的で、新分隊長には優しい肉親の様な、心温まるものを感じた。大畑分隊長は、教班長に対して自らバッターを振ったらしいが、平野分隊長になってからは、練習生に対する班長の体罰が目に見えて少なくなった。それは、或る班長が練習生を殴っているのを目撃されて、全教班長を、自室に呼び、厳しく体罰を禁止させたそうである。

分隊長は普段、練習生との接触が少ないので、ある日、一緒に食事をされた。それが、食事が始まっても物音一ツ聞こえない程静かであった。

緊張した空気を盧った分隊長は、私達の堅くなった気持ちを解きほぐす為、「食事は楽しく団欒の中で食べる処に意義があるのだ。緊張しているのは私が居るからだろうが、

私は貴様達が楽しく食事をしている姿が見たくて参加しているのだ。その楽しさを一緒に味わいたいと思っているので、普段と変わらず隣同志、楽しく話しながら食事をして貰いたい」と以上の様なことを言われた。しかし、そう言われて話を始め様としても無理なことである。分隊長のお気持ちは有り難い事であるが、我々海軍航空隊員は日夜実践部隊として訓練を受けている。常に行動の機敏性が要求されている。早飯、飯糞は、海軍の常套語となっている程である。まして余裕のある食事など今だしたことはない。従って、分隊長の真意感情は充分に理解しているが、希望にそえず、今まで通り、食事中に雑談をする事は出来なかった。

ある日、昼食の配食時に第二警戒配備がかかる。「五分間で食事と後片付け」との号令で、食べ始める。口に入れた物は全部丸呑み、味も何んかも有ったものではないが、それでも分隊長との昼食より、心理的には余裕の食事が出来た。

思えば最近、「基作」でノートを小脇に抱えて教場の格納庫に通ったのは、数える程であった。朝礼、課業始めで練兵場に集合する練習生が、めっきり少なくなった。それは八期生以降の入隊が途絶えているためだと言う。だが、そのような事に関係なく、自然はすっかり春らしくなって来た。路傍の草にも緑が萌え、大気は日毎に暖かさを増した。そんな時「総員整列」の声がかかる。何事だろうと不審に思いながら兵舎の外に整列する。

そこへ、分隊長が来られた。

分隊長はおもむろに訓示された。

「今、我々が直面している戦局は、貴様達が考えている以上に事態は切迫している。詳細は軍の機密で公表を差し控えるが、正に未曾有の大難である。国家存亡に関わる非常事態となっている。貴様達はもっと気持ちを引き締めてかかれ。私は、或る海戦で乗艦が撃沈され、重油の燃える海中を必死に泳いで生き延びた。これから先、何時かこの様な事態に直面するかも知れない、その場に当たり戸惑わない様、今から充分心しておけ」。

曾ては優しく見えた平野分隊長が、今日は別人の如く見えた。分隊長は確かに何かを知っている。それを我々に知らせて自覚を促したい。しかしそれを言えぬ、もどかしさが感じられる。所詮、私達如きには、その何かを感知する知識をもってないのである。分隊長の訓示は、私の心に一抹の不安を残した矢先、「八期生は教育停止」との命令が下る。

## 24　田子への移動

教育停止と同時に、伊豆半島への移動命令が下る。

直ちに出発準備が始まった。教科書の返納、夏場に不用な冬物の下着、チョッキ等の返納で、その日は一日中騒然となる。

夕食が済み食卓番の食器返納が終わると、兵舎内の片付け、全員衣納を背負って舎外に整列する。

陽は既に西に沈み、黄昏に包まれた兵舎の電灯が明々と庭を照らしていた。暗くなった空に星が輝き始め、兵舎の影が夜空にくっきり浮かび上がっていた。

兵舎の電灯を消すと、「前へ」の号令が掛かり、思い出多い兵舎を後に出発した。

足元の砂利が賑やかに音を立てる。暫く歩いて振り返れば、懐かしの兵舎は闇に没して形までもわからない。前方に衛兵所の灯が見えて来た。

そうだ、此処だった、私達はこの道の両側に並んで卒業した先輩を見送ったのだ。左上膊に一重桜（ひとえざくら）のマークを付けた姿を羨ましく見送ったのも、ついこの前の事だった。その内俺達だって……と、希望に大きく胸膨らませたのは、夢だったのか。

歩調に合わせて時間が無意味に過ぎる。遠く霞んで逃げて行く卒業の夢を追いかけるが如く分隊は進む。衛兵所の中には、何時もの立派な鼻髭を生やした衛兵伍長の姿はなく、水兵服の若い衛兵が、裸電球の明かりの下で敬礼して見送ってくれた。

月の無い薄墨を流した様な空には雲もなく、無数の星が燦めき始め、街道の老松の梢が星空に黒い影を写していた。

東海道を横切り、灯火管制で暗く閉ざした民家の間を分隊は進んだ。家並みが途切れると、両側は梨畑になっていた。その道を私達は黙々と進む。誰も口を噤んで歩いている。私達は何も考えてはいけない、只命令に従えばよいのだ。希望も現実の戦況の中では通用しないのだ。

先日、分隊長の訓示の如く戦いは切迫している。命だって俺達の物であって俺達の物じゃない、既に国に捧げた命だ。大きな黒い影の様な、隊列が街道を進んで行く。

前方にボーッと灯かりが見えて来た。安城駅の灯りだ。広い踏切を渡って駅の待合室に入る。戦闘帽を被った老人が大きな荷物を手に下げて立っていた。防空頭巾に、モンペ姿の婦人も片手に荷を持ち、片方は幼児の手を引いている。

狭い待合室が一変に一杯になった。婦人の胸にも子供の胸にも、住所氏名を記入した大きな白布を縫い付けている。

防空頭巾の可愛い子供が、大勢の私達が来たので、物珍しく見ている。

間もなく改札が始まり、私達は一列になって狭い改札口を通りホームに出る。電柱の上に付いた電灯が僅かな明かりをホームに照らしていた。電球の光りの輪を少し離れると、もう人の顔も判らぬ程に暗い照明だ。

暗闇の中から丸い明かりが近づいて来たと思ったら、ブレーキの音を軋ませて列車が入って来た。私達は分散して客車に乗り込む。暗くて足許も判らぬデッキを通って車内に入る。ここも暗く、申し訳の様に電灯が二ッ三ッ天井に灯っているだけで、窓は全部黒幕が下ろされていた。座席は全部塞がっていて、通路に立っている客もいたが、私達が乗り込んだ為通路が一杯に人が溢れ車内は一層暗さを深めた。私は通路に立って衣納を降ろし、すぐ横の手摺りに寄りかかる。列車は動き始め車輪とレールの継ぎ目との音が次第に遠く聞こえて来る。何もかも夢のように思え、ゴトンゴトンの単調なリズムが、全ての思考を過去に、運び去って行っている様だ。

その時、「兵隊さん」と呼ぶ声で、ふと吾に返り振り向くと、窓際の座席に座っている年配の婦人が、私の方に腕を伸ばして何かを差し出して「兵隊さん、これおあがり」と。私は礼を言って包みを受け取り開けると、巻寿司が三切れ並んでいた。私は一つ取って

口に入れ、背を向けて立っている練習生に「戴いたから食べろ」と声をかけ包みを渡す。彼は頷いて包みを取り、一つ頬ばって隣の者に残りを渡した。

私の周囲には同じ班の者や、見知った練習生は一人も居ない。車内は暗く大変混み合っていたので、改めて班の者を捜す気もなれず、話し相手もなく衣納の上に腰を下ろし、忙しかった今日一日の出来事を振り返る。

憧れの予科練習生として、希望に満ちて岡崎海軍航空隊の門を潜って、僅か半年で教育中止とは、これも運命だ。諦めるより道はないのだ、と自問自答している内、眠りに落ちる。

「オーイ着いたぞ、忘れ物の無い様にしろ」。ざわめきでふと眼を覚ますと列車は停まり、暗い車内の通路に、大勢の人々が出口に向かって動いていた。

「何処に着いたのだろう」と、思いながら私は急ぎ衣納を背負うと、人の流れに続きホームに降りる。眠りの途中で起こされた私は、未だ半分眠っていて、先を行く者の後を、遅れまいと必死になって付いて行く。何処を見ても真っ暗で、おまけに寝惚けていたので、何処を通ったのか、どう曲がったのか一切が不明のまま、前の黒い影だけを頼りに夢中で歩いた。時間が何分経ったのも判らず気が付くと、天井の高い広い建物の中に入っていた。

「翌朝まで此の講堂で休憩する」と指示が出た。
背負っていた衣納を降ろし、中から雨衣を取り出しその上で横になった。天井からは幾つかの電灯が薄明かりを投げている。冷たい床の感触が雨衣を透かして身体に沁み込む。雨衣を広げ身体を丸くして包むように覆い横になるも、眠いのに寒さが邪魔をして眠れない。周囲の者はどうかと見れば皆同じ様に、ゴソゴソと動いて眠られない様子だ。毛布が一枚欲しい、叶わぬ願いと思っているうちに、寝返りを打つ数も次第に少なくなり、いつの間にか眠っていた。
眼が覚めると窓越しに、朝日が床の上を暖かく照らしていた。
一斉に身支度をして外に出る。庭木には柔らかい春の日差しが当たっていた。
水道の蛇口を捻ると、勢いよく水が出る。久しぶりに冷たい水で朝の洗面をする。心まで清々しくなった。仰ぐ空は蒼く雲一つ無い。その碧空の下に、五合目当たりまで覆った残雪が折からの朝日に、銀色に輝いている富士山が見える。感動の一齣だ。

## 25　田子上陸

校門の上に伸びた桜の枝には、ちらほらと蕾が膨らんでいる。門柱には一対の日章旗が立てられていた。蒼い空の下にくっきりと浮かび上がった富士山、夢か幻か、写真や絵でしか知らない。私はその崇高な姿を見て、大自然の美しさに打たれ、唯々感動感激をするのみ。頂より五合目当たりまで覆った残雪が、折からの朝日に映えて、銀色に輝き、なだらかな斜面が左右に流れ、右に低い連峰の山々を従え、左は緩やかなスロープを描いて裾野が延々と続き、その先は水平線と重なり合って海上に消えていた。恰も大空をキャンパスと見立て描いた、名画の如く、まさに眼前にその雄姿を披露している。

小学生が三々五々と校門を潜り登校して来た。今日は小学校の始業式である。

朝食に、乾パンが支給される。二食分で半分は昼食とのこと、乾パンを噛りながら昨夜からの出来事を反芻してみる。夜半に降りた駅は、沼津駅であった。

今居るこの場所は、沼津の小学校である。昨夜の寒さにはいささか参ったが、それでも何時のまにか眠ったらしく、頭の中はすっきりしている。それにしても今日は、一番嬉しい思い出が残った。日本一の富士山の印象である。早くこの事を、母や弟に知らせ

てやりたいと思う。

始業式が始まる前に私達は学校を出発した。徒歩で約三十分程行った所に港があり埠頭に係留された貨物船に乗り込む。船は間もなく桟橋を離れた。

乗船後殆どの者は船倉に降りたが、甲板上には、四、五名の者が残っていた。

静かな海、富士の裾野がなだらかな斜線を画いて、海に消えるあたりから、水平線は海と空をクッキリ境界（わけ）ていた。

船の進む方向から吹く風はまだ肌寒く、私は太い煙突の傍らに体を寄せ、風を避けて、出航して来た彼方を眺めていた。外海に出るとうねりが大きくなり、船首で跳ね立つ潮の飛沫が、私の立っている甲板の上まで風に乗って来る。

何時の間にか視界に、濃い乳色をした霧の幕が下りて、当たり一面は靄の中に閉ざされ、私の影も甲板から消えていた。岬の様に突き出た沼津の街も、富士山も霧の向こうに消え、灰色をした上空には、満月の様に黄色い太陽が、ぼんやりと浮かんでいた。視界は恐らく百メートルもない距離である。

何時間で目的地の田子に着くのだろうか、田子が伊豆半島のどの位置に在るのかも知らない。濃い霧で前方が見えないのに無事着くのだろうか、敵潜水艦が近くまで来てい

るかも知れないと、不安が募る。

甲板上の四、五名は、一度も船倉に降りようとはしないで、甲板上を行ったり来たりしている。反対に船倉に降りた者は、誰一人として甲板上には来ていない。

そうこうしている中、出航して凡そ五、六時間も経った頃、霧が薄れて遠くに緑色の島影が見え始めた。船はゆっくり島影に近づく、島はゴツゴツとした岩肌がそそり立つ断崖である。海面に張り出た岩肌は剥ぎ取られ、打ち寄せる波が白い泡となって砕けていた。

島影を見上げるまで近づいて来た。そこが湾の入口であった。

入口中央に岩だけの小さな島がポツンと浮かんでいる。波の侵食作用で削られた大きな岩穴に波が打ち寄せて、岩全体が黒々と濡れていた。後でこの岩が〝天狗岩〟と知る。この岩を過ぎると広々とした湾が忽然と現れた。左の方は断崖の続きであるが、正面には砂浜が拡がり、海岸線を右に辿れば漁船を繋ぐ港になっている。港に向かって張り出した様に家並みが続き、海に突き出した桟橋には、村人達が大勢出迎えてくれた。

天狗岩から湾の入口に差しかかった頃から、潮の香りが強くなったと思ったが、船が桟橋に近づくに連れて一層強烈になっていた。船は無事桟橋に接岸した。

初めて見る伊豆半島の田子、今この地に第一歩を下ろしたのである。

下船したその足で、私達は宿舎に向かった。岸を上がり、道を海岸線に沿って右に辿っ

て行くと、海岸寄りに、低いトタン葺きの市場があった。
陽が傾き日影になったせいか、屋根の下は薄暗く、片隅には箱が積み重ねてある。市場の周辺は特に磯の香りと言うのか魚の生臭さが鼻についた。どうやら田子は魚の町である。
左側は山並が連なり、右側は切り立った崖になっている。四、五メートルの崖下は、海水が岩に当たって砕け散っていた。

## 26　特攻艇格納庫作業

静岡県加茂郡田子村局気付安達部隊第二十四分隊。これが私達の所書である。
部隊本部、兵舎は、小高い丘の中腹に建っている小学校の校舎が当てられた。
岡空予科練習生の飛行訓練は、一旦中止。新課業は、特攻艇（震洋）の格納庫整備工事である。（所謂岩窟工事である）
ここは、田子湾の幾重にも入り組んだ入江の一ツで、裏山の向こうが先ほど着いた田子の港である。

入江の向こうは岬の山が迫り出て、海面に黒い影を落としている。

作業場は其の山を一ツ越えた奥の入江で、ここも後で〝竹の浦〟と知る。翌日から早速作業開始、未だ道らしい道の着いていない、獣道を踏みしめ尾根を越えて現場に向かった。途中の山路には、まだ出揃わない木々の若芽の中で、箱根うつぎの花が、若葉の間に可憐な姿を覗かせていた。雑木の小枝を押し分けて谷間に降りると、少々違った磯の香りが漂ってきた。

ここが作業場である。まさに、特攻艇マル四こと「震洋」の格納庫に適している場所である。

左側の岩肌には、既に掘り初めている穴が黒い口を開けていた。それは六期生の現場である。岡空では気付かなかったが、彼等は私達より一ヶ月前に、此処に来て作業を始めていたのだ。

八期の作業場は、向かい合った右側の岩場である。掘る位置が決まると邪魔になる雑木や蔦草の除去に掛かった。小さな木や草は手で引き抜いた。そんな作業中突然「ジャラン、ジャラン、ジャラン……」と、鐘の音が谷間にコダマして響いた。何が始まるかと思い、立ち止まって音のする方を見ていると、「ハッパを仕掛けたから退避しろ」。その人は、握りの付いたアイスキャンデー売りの持つ真鍮製の鐘を振りながら、我々に向

かって大声で怒鳴った。私達は急いで山に向かって駆け登った。

上の方から見ていると、穴の中から二、三人飛び出してこちらに走ってきた。直ぐその後、間髪を入れず土埃が噴き出し同時に「ヴァン、ドカン」と、激しい音と共に大小様々な岩石が穴の口から噴き出てきた。

土砂塵煙が治まり「タンカターン」と休めのラッパが高らかに鳴って、爆発完了の合図、退避していた人々が続々と、作業場に戻って行く。私達もそれぞれの持ち場に戻って作業を開始する。

伊豆に来て、七班の班長は斎藤二曹に代わった。或る時、作業場で「各班で、手の空いている者で特攻隊を編成する。各人スコップを持って整列」。私は士官の用事で参加しなかった。特攻隊員はその日の作業が終わるまで帰って来なかった。

宿舎に帰って聞いた話では「特攻隊と言うから何をやるのかと思ったら、山芋掘りだった。お陰で酷い目にあった」と言ってこぼしていた。その日の班長達の食膳には山芋料理が出た事だろう。

暫くの間は昼間だけの作業が続いた。雑木や蔦草等を取り除いた跡には僅かに土を被った岩肌が現れた。その岩に洞窟を掘るのが、私達に課せられた任務である。

この洞窟には、マル四こと「震洋」特攻艇が格納され、任務に就くのだ。

次に行う作業は、ハッパの穴を掘る事であった。指揮者に穴の位置を決めて貰い、ノミを当てて、ハンマーで叩いて、ダイナマイトを入れる穴を掘るのである。「カチン、カチン」とノミ打つ音が、あちこちから聞こえ始めた。

毎日、岩に穴を掘り、ハッパを爆発させ、砕けた岩石を片付ける単純な作業の繰り返しが続いたが、十日もすれば洞窟の入口らしい形が出来てきた。

非番の時には宿舎前の潮の引いた干潟に下りて、岩に付着した名も知らぬ生物や、貝殻を見つけたり、岩に付着している牡蛎の殻を石で割り食べた。

竹籠を背負った三十過ぎの婦人が四・五人、私達の傍らへ寄ってきて貝の名を教えてくれ、話し込んできた。

「この長いのはタバコ貝と云って味はほろ苦いが美味いよ。時季が良かったら色んな美味い貝を、食べさしてやるんだが」と言ってくれた婦人達も、その日だけで立ち入り禁止にでもなったのか、その後は姿を見せなかった。

私達が作業を始めて暫くすると、作業場中央の砂浜上に、削岩機を動かすため圧縮空気を造る船舶用のディーゼルエンジンが設置されて威力を発揮していた。

このエンジンを始動するには圧縮空気が必要であった。そのため始動させる時は、八期から作業員が二名出て、圧縮ポンプの長いレバーを振り子時計の様に左右に動かして圧縮空気を造る。これが中々の重労働である。規定の圧力まで上がった時、作業員の任務は終わりである。後は係員の操作でエンジンが回転を始めると、大きな騒音は作業場一杯に轟く。この削岩機の使用は、作業の進んでいる六期生だけで、八期にはまだ巡ってこない。

作業は次第に慣れて、要領も覚えてきた。ノミの先が摩耗すれば纏めて、鍛冶屋に持って行く。鍛冶屋は六期の作業場近くの、小さな木屋で軍属が一人で働いていた。

他人の仕事を見るのは面白く、持参したノミが出来上がる迄の間、息抜きも同時にできた。鍛冶屋は唯、黙々と鞴（ふいご）の柄を押したり引いたりして風を送っている。その都度、シューツシューツと、風の音がして黒いノミが真っ赤に焼けたコークスの中で、次第に赤くなって来る。送られる風に炎が吹き上げ、ブーブー音を立てる。

彼は空いた片方の手でコークスを注ぎ込む。赤く焼けたノミを取り出し、金床の上でコンコンと調子をとりながら叩いて形を整える。それを二、三度繰り返して水に漬け焼きを入れる。ジュッと水槽から湯煙があがり出来上がりである。

穴を掘るにも技術がいる。二十センチや三十センチの穴ならば差ほど難しくはないが、それ以上の深さになると余程注意をしなくては、途中で穴が曲がってノミは釘を打ち込んだ様にびくともしなくなる。ノミは少しずつ廻しながらハンマーでノミの頭を叩く。効率を良くするために穴の中に水を少量入れる。ノミを叩く度に泥水が撥ね返って、顔や体を汚す。それを防止するには、藁縄で小さな輪を造り、ノミに嵌めると泥水の撥ね返りを防げる。穴の奥に溜まったねん泥は大きな耳掻きの様なもので掻き出す。

始めのうちは数人の職人が、ダイナマイトの装填をやっていたが、余り慣れ過ぎて点火の後、逃げ遅れて飛んで来た石の破片で怪我をする事故があった。その若い人は少々頭の遅れた人だったそうな。

三週間もすれば、今まで職人ばかり頼っていたダイナマイト装填、点火その他一切を、私達も、見様見真似で引き受けて一週間もすれば、職人の手を煩わさなくても、出来る様になった。慣れたと言っても、一歩間違えば命にかかわる作業である。矢張りダイナマイトに点火する時は緊張した。完成した各穴の中にダイナマイトを装填し導火線を挿入して穴から垂らす。三・四人が火の付いた火種棒で、導火線に火をつける。垂れ下がっている導火線の中の火薬が湿っていると中々点火しない時がある。先に着火した線は、

煙を上げてシューッと音を立てながら、黒い線の中を進んで行く。次第に短くなって行く導火線を、横目で見ながら気が気でない。慌てると余計に火が着かない、導火線の口を広げて火種を当てると懸命に息を吹き付ける。やっと火が着くと急いで次に移る。

ハッパの穴数に応じて、ダイナマイト、導火線、雷管を受領に行く。

マイトの数は普通の穴で二本、少し深いと三本の割合で計算する。導火線の長さは大体同じで、多少の長短は使用時に使い分ける。雷管に差し込んだ導火線は固定し抜けなくする為、歯で咬んでやる。太さは鉛筆位、長さ約二センチ、爆発力は五馬力も有るのだ。ダイナマイトの種類は、薄い黒砂糖色（桐）、白色（梅）、薄紅色（桜）の三種類である。

作業は予定通り進行した。私達より一足早く来ていた六期生は、作業の完成間近の六月初旬に、岡崎航空隊に引き上げた。六期生は教育が再開され学課に励むとのこと、羨ましい限りである。それを聞くと何だか我々にも希望の光が、さして来るように思えるのだ。

夏休みは未だ先の事だと思うのに、小学校には学童の姿は無く、勿論授業もしていない。私達が教室を借りているためだろうか、一体小学生は勉強しなくて、何をしているのだろうかと思う。

海辺で小学生位の男の子が一人、大きな盥（たらい）に乗り一本の櫂を上手に操り静

かな凪いだ海上を、スイスイと水澄ましの様に漕いで遊んでいた。矢張り蛙の子は蛙だなと感心して眺めていた。

昼間の作業場通いは楽しかった。舟の上から見る海の中はまるで水族館を、上から眺めている様だった。海の水は青く澄んで随分深く迄見える。奇麗な縞模様の大きい魚、大小様々な魚の群れが泳いでいた。

何時だったか暗くなった海上で一本釣りの小舟に出会うこともあった。彼等は片手で櫓を漕ぎ、一方の手で糸を操り、烏賊を釣っていた。

三直勤務は二四〇〇、現場で作業を引き継ぐため、夜中の二三三〇頃に起こされ直ちに出発する。この時間帯は丁度眠りに入った一番心地よい時間帯である。作業服に着替えて、大きめの地下足袋を履き、寝ぼけ眼で校庭に整列し、それから先は自分の意思で歩いているのではない。手足の神経が私の命令無しで、勝手に動いているのに過ぎない。

梅雨に入って土砂降りの雨の中、辺りは墨を流した様な闇の夜、寝静まった家々の間の道を雨衣の行列が通る。頭から被ったゴム引きの雨合羽は煩い程「グァサ・グァサ」と耳元で騒ぎ、降りしきる雨の音に混じって、更に大きく響いて来る。叩きつける雨の中、水溜りをビシャビシャと踏んで歩く。先頭で無くて良かったとつくづく思う。この暗い道を一体、先頭は何を頼りに歩いているのだろう。石段を降りて、舟に乗り船縁に腰を

下ろし、着く迄の僅か五分間を貧る様に眠った。

さて今日は二直、昼食を早めに終えて小学校を出発した。私達の乗った舟が桟橋を離れると、その岸辺から子供たちの声がする。低学年の児童が四、五名、海岸のコンクリートの堤防に腰を下ろして、皆一様に足をバタバタさせている。

その子供達をからかっているのは吉田班長だ。子供たちが何か言うと、班長も言い返しながら、細い竹竿の先で、海面に浮いているコールタールを引っ掛け、子供達に向けて投げ様としている。舟は動いているので一度外すと竿が届かなくなる。

それで、次に流れて来るのを待たねばならない。コールタールを見つけると又「此の野郎、此の野郎」と、言いながら面白がって、「コールタン班長コールタン班長」と叫ぶ。班長の顔が赤いので言うのか、コールタールを投げ様とするので言うのか判らないが舟が岸から百メートルも離れているのに、それでも子供達は精一杯の声を張り上げて合唱する。「コールタール班長、コールタール班長」。吉田班長は懲りもせず、海面に浮いた真っ黒い油の塊を、竿の先で引き寄せ様としている。顔を赤くして如何にも楽しさうにしているが、子供達の姿は、もうぼやけている程遠くになっていた。

子供達の合唱する声が、櫂の軋む音と共に静かな海面を流れて行く。

舟は岬を回って静かな入江に入った。無邪気な子供達の姿は島影に隠れ、海底には赤茶けた海藻の揺れるのが見える。

田子では、こんな長閑な一時もあったが、夢も希望も閉ざされた青春、限られた枠の中でたぎる若者の血潮、時にはそのエネルギーが食み出す事もある。その日も爆破作業が終わり、崩れ落ちた岩石をモッコで外に運び出す者、側壁を削る者、或いは地面を均す者等、誰が何をすると決めなくても、皆夫れ夫れ慣れた手順で作業に掛かっていた。そしてAとBが二人で石を運びながら、入口付近で立ち止まり又口論している。何故か彼等は気が合わず、常日頃は二人してやるモッコ担ぎ等は余りやらないのだが、今日はたまたまやる事になったのだ。やれ天秤に架かるモッコの綱の位置が、俺の方に来て自分の方が重いと、やれ歩き方が遅いとか、些細な事で口論になる。今日もそれだったのである。「おい邪魔だ、一寸其処を退いてくれ」。通り道で口論している二人の横を、別の組みが砕石を山のように盛ったモッコを担ぎ、ヨロヨロと出て行った。何時しか洞窟内がシーンと静かになった。全員作業を止めて彼等の回りに集まった。二人が気づき立ち去ろうとした時は、既に周囲を囲まれていた。

「おい、やれよ」と、Cが唆す。DがAの肩を突くと、AがBにぶっかる。始めの中は二人ともその気が無かったが、周囲の者達が、それを許さずけしかける。二人は逃げ場

がなくて仕方なく掴み合い、組み合った侭地面に倒れる。

見物人が上になった方の足を引っ張ると上下が変わる。二人が気を抜くと見物人が気合を入れる。地面には角のある石がゴロゴロしている。さぞ痛いだろうと取ってやるのも、同期生としての温かい戦友愛に外ならない。

入口で当直士官を見張っていた見物人が、押し殺した声で「おい分隊士が来るぞ」と叫ぶと二人は立ち上がり衣服の埃を払った。他の者は素早く散って当直士官が入口に顔を覗かせた時には、何時もと変わらぬ作業をしているのであった。

「気を付けっ」。入口近くの者が殊更に大きな声を張り上げる。「ご苦労さん」。何も知らない当直士官は、入口から一寸奥を覗いただけで、通り過ぎた。

その後、事ある度にけしかけるが、回を追う毎に双方が白けて、二～三回で自然消滅してしまった。

六期生が居なくなった後、削岩機は八期生専用になった。しかし台数に限りがあるので何時でも使用出来る訳ではない。我が班に使用する順番が回って来た。この機械は二人一組で使用する。一人は本体の把手（とって）を持って操作、他の一人は横で脚を持って機体が移動しない様に維持する。削岩機の把手を持ってボタンを押すと「ダ・ダ・ダ・ダ……」と、機銃を発射した様な音がする。

重量感のある機体から圧縮空気が白煙の様に噴き出し、銃身に似た長い鉄ノミが、振動と共に回転して岩を撃つ、強い振動で身体の肉も骨も、バラバラになりそうだ。

長時間使用すると、身体に何等かの弊害が、と思ったが何といっても機銃に似た機械、弾丸を撃っている様な格好良さに、私は使用する度、敵機を撃っている様に良い気分だった。

普通の穴は深くても三十センチ止まり、削岩機を使えば五十センチは簡単に掘れて、作業の進行も早い。それでも削岩機のない時はノミを使って穴を掘る事もあった。始めは短いノミで掘って、後長いノミと取り替える。これは二人でやるのだが、余程注意しないと危険が伴う。一人が長いノミを維持して、もう一人が大きいハンマーでノミの頭を叩くのだ。

今日は、この作業を小森と堀田がやっていた。「コツン・コツン・コツン」と其の時、急に小森がノミから手を離し、「ウウッ」と言って蹲った。横で堀田が大ハンマーの柄を立てた儘、呆然と突っ立っている。

「おいっ、小森どうした」異常に気付いた私は作業の手を止めて、小森の側に駆け寄った。彼は両腕で自分の胸を抑えている。事由は聴かなくても判っている。

彼はやっと立ち上がる。「大丈夫か?」小森は頷いたが未だ苦しそうである。

「堀田、注意してやれよ、もうお前は止めとけ」堀田の打ったハンマーが滑り小森の胸を打ったのだ。大丈夫と判ると集まっていた者は、又部署に戻って行った。洞窟は、大分掘り進み奥行き凡そ、七～八メートルにも達していた。一番奥の天井には二十燭光位の裸電球が一ツぶら下がっている。

眠い目を擦りながら舟に乗り、現場に着いて作業が始まったばかりであった、その時、誰かがノミを打つ音に合わせて、突然軍歌を唄い始めた。

〝四百余州をこぞる十万余騎の敵……〟

元寇の歌の次ぎは、軍人勅諭を謳う。

〝軍人たるの本分は心は忠に気は勇み……〟

この次は艦船勤務を替え歌で唄う。

〝四面海なる帝国を、守る海軍軍人は。戦時平時の別ちなく、勇み励みて勉むべし。〟

始めは、岡崎海軍航空隊時代に習った軍歌だった。その内に、歌詞は砕けたものに替えられている。皆は何を思ったのか、大きな声で唄い始めた。

〝飛行機の乗りには娘はや一れぬよ、やれぬ娘が行きたがるダンチョネー。〟

歌は一つ終わると次々と、誰かが別の歌を唄い始める。歌を唄っていると作業も楽し

くなり、能率も向上と我が三班は、洞窟内では何もかも忘れて毎晩唄った。

ある夜、今迄はタブーの様に誰も唄わなかった〝若鷲の歌〟を誰かが唄い始めた。しかもそれが替え歌である。

〝若い血潮のドカレンの七つボタンはモッコとスコップ
今日も掘る掘るハッパの穴をでっかいハッパの音がする〟

全く自暴自棄の様な歌であった。面白半分に皆で唄っていると、最後の文句ハッパの音がするが、終わった時、音痴のKが突然「ドカン・ドカン」と、言ったので、全員大笑いになった。気を良くして、同じ歌を繰り返し唄っていた。その時、入口で、「気を付け」と号令がかかる。私達の心臓は瞬間、止まった様に全身が硬直した。洞窟内は一瞬深海の様な静けさになる。入口に顔を出しているのは、当直士官だ。その前に神妙に不動の姿勢で、一人は天秤棒を持ち、一人はモッコの綱を握って立っていた。

「貴様達は娑婆の人間では無い、海軍軍人である。別ったか！」予期に反して優しい士官の言葉に、生き返った様な気持ちで一斉に「ハイ」と、応えた。

「では歌を止めて作業に掛かれ」とそれだけ言って、士官は立ち去った。

「休めっ」。私達は再び作業を開始したが、何か心の中に消え去らぬ蟠りが残っていた。それは挫折した予科練学課への未練だったのかも知れない。

## 27　或る出来事

「ケーン、ケーン」。初夏の訪れを歓ぶ雉の啼き声が、入り組んだ岬の山肌に谺して撥ね返り、眠りから覚めたばかりの田子湾の、波穏やかな海面を滑る様に、飛んで行った。何と清々しい朝なんだろう。

同室の者は未だ誰一人として起きる気配はない。私はそっと床を抜け出すと、階段を降りて前庭に立った。仰ぐ空は抜けるように蒼い、岸辺に寄せる波の音が夜の名残りを未だ残している。遠い岬の尾根に朝日が差して其処だけが夜明けの様に明るい。

姿こそ見えないが、また雉の声が遠く尾を引いて消えて行った。平和な田子の一日が今日も始まっているのだ。

外出の或る日、一人防波堤に寄り掛かって沖を眺めていた。田子湾の向こうは太平洋である。湾内の波は静かだが、外海の太平洋では大きな波がうねってた。その波浪の中で、小船が六・七隻、絡み合う様に上下しながら右往左往している。素人目に見ても様子が変だ。どう見ても漁をしている様には見えない。遠くて定かではないが、船の上の人達は、

明らかに櫂の様なものを振り回して、争っているとしか見えない。波に揺れ上下している船の様は調度、茣蓙の中でバイ独楽が互いに撥き合っているように見えた。

私の傍らで同じ様に、立って見物している村民に尋ねると、漁場の事で隣村安良里の漁師と喧嘩しているのだそうだ。暫くの間、様子を窺っていたが、何時果てるともなく繰り返しているので、私は飽きてその場を去った。

その足で下宿の、薮さんの家に行った。おばさんに先刻見物して来た事を話すと、事も無げに「よくやるよ、安良里の衆とは」。別に驚いた風でもなく、呆れたようにそう一言いっただけだった。

「戦前は硫黄島の方まで、田子の漁師は挙って漁に行ったものだが」と、話してくれる親父さんの顔は寂しそうである。

「田子の衆は皆いい人ずら、漁師だから口は悪いけど、心はとても優しくていい人ばかりなのよ、田中さんも吃度、戦争が終われば田子で暮らしたくなるわよ」と。

おばさんは芯の強い女性だが、心の中では平和を望んでいるのだろう。

## 28　久し振りの罰直

今日の課業は無難に終った。夕食も済み、食卓番は飯缶を返納して各自は思い思いに憩っていた。時間は一九〇〇頃だろうか、陽は西に傾き前庭はすでに陰っていた。

班長室に近い奥の方で、何人かの悲鳴が聞こえて来た。耳を澄ますと時折物が倒れる様な音がする。何かあるなと其の時、嫌な予感と体の緊張を覚えた。田子に移動以来、長い間罰直から遠ざかっていた。

「総員舎外に整列」。村上兵長のよく透った声に、そら来たぞ、と私達は舎外に出て、海を背にして班毎に整列した。

顔を強張らせた教員達がゾロゾロと前庭に降りて来た。最後にX班のSが村上兵長に背を押されてヨロヨロと出て来た。面長の彼は顔がまるで別人の様に丸々と膨れ上がり、押されて歩くさまは、半ば夢遊病者の如く、意識が朦朧としている様子だが、私達の居並ぶ前でバッターの洗礼を受ける事になった。

モッコを担ぐ天秤棒が、彼の尻にくい込み鈍い音をたてる。何本目だったろうか耐えかねてドウッと倒れた。「水を持って来い」。早速海水を汲み上げると倒れているSの顔

にぶっかけた。意識の戻った彼を村上兵長が抱き起こすとその尻に又バッターを叩きつける。再び意識を失った彼は、いくら兵長が抱え起こそうとしても自力で立ち上がる気力はなかった。Sを部屋に運び込むと、次は私達の番だ。

「一人ずつ出て来い」。陽が沈んで風もなく当たりは黄昏が漂っていた。

バッターは二人の教員が受け持った。作業に使う、竹や桜の天秤を持って身構えた班長の前に最初の者が横向きに立ち、稍股を開き両腕を上に高く伸ばし、前かがみになって尻を後に突き出す。「バシッ、バシッ」。各自二本づつ。途中で「ペタン、ペタン」と突然変な音が聞こえた。音の方に目をやると、棒を立てた班長が変な音の主に、「ズボンを脱いで見ろ」と怒鳴った。渋々とズボンを下ろした彼の尻には、白いフランネル製の、厚い胴巻きが保護していた。「この野郎、胴巻きを取れっ」。今度は正常な音が響いて一安心。百数十人の尻を二回ずつ思いきり叩いて行くので、班長とても相当の重労働である。しかも班長は四名である。「私が交代します」と、村上兵長が、班長からバッターを受け取る。竹で造った天秤は二十人も叩かないうちに、竹刀の様に割れて使用不能になる。

辺りは次第に薄暗くなり私の順番が回って来た。私は列を出て兵長の前で、左に向いて立つと両腕を高く上げ所定の姿勢をとる。罰直の中でも、痛いのを我慢すれば、勝負が早く一番好きな罰直である。これまでにも随分経験していたので幾分、嘗めて掛かっ

ていた。ところが「バシッ」と。最初の一本が来た時、ケツ圧で腹の空気が上に押し出され、肺の空気と混じって喉に突き上げてきた。思わず「ヒーッ」と言う、如何にもだらし無い声が口から洩れた。「しまった」と思って歯を食い縛ったが遅かった。不覚にも声を出した恥ずかしさで、顔がほてってきた。

次の二本目は歯を食い縛ったので無事終わった。しかし、村上兵長はあの声を見逃さなかった。つかつかと傍らへ寄って来て、薄暗くなっているので覗き込むように私の顔を見て「何だ田中か」と。大勢の中で悲鳴を上げたのは、ただ一人恥ずかしく俯いたまま列に戻った。そもそもこのバッターの原因は馬鹿馬鹿しい事であった。作業中Sは体調を崩して兵舎に帰っていた。そして食卓番を担当したまでは良かったのであるが、その後がいけなかった。腹を空かして帰って来た彼の班員は、普段より飯の量が少ないのに、不審を抱いて、他班の配色を見ると皆平常道りである。自班の食事だけが何故少ないのか、食卓番のSを疑い調べると、棚の奥に赤ん坊の頭程もある、大きな握り飯を発見。Sを問い詰めると彼の仕業と判明したのである。

食い物の恨みは怖いという。先ず同班の者から制裁を受ける。班長室に近い彼等の此の騒ぎが班長達に聞こえぬ訳がない。班長らが知ればこれが軍隊、当然の事として以上

のような結果となってしまったのである。バッターが痛くて言うのではないが、同じ釜の飯を食っている戦友の仲ではないか、何故班内だけで解決しなかったのか、と思った。

こんな事件があって十数日が過ぎた或る夜半に、何かが床に倒れる音がして眠りから覚めた。場所は又々班長室の方向からだ。始めは半ば夢かと思っていたが、音は現実で、隣に寝ている者も気になるらしい気配で、「何があったのだろうか」と、誰言うともなく小声で囁く。隣のYの話では、それは一・二班の何名かの者が、前の海で泳いでいて班長から見つけられ、許可なく身勝手な行動をした罰で、急降下をさせられているとのことで、原因さえ判れば勝手のいいもので、我が身に災いが及ばない事を知ると、時々「ドスン」と落ちる音や、悲鳴が気にならなくなり、いつの間にか眠っていた。

## 29　トンビに油揚を攫われる

或る日、同僚の深谷・石松に、おばさんの家に行こうと誘われたが、武田士官からの仕事が有るからと断った。実は、度々お世話になるのは迷惑と思ったからだった。

製氷会社の前を通り過ぎ、海辺に沿った道を歩く。太陽は既に昇っていた。海面は、

キラキラと輝いていた。

魚市場の低い屋根の下は、薄暗く広々としていた。波止場に繋がれている漁船が、波に任せてゆっくりと揺れてた。持ち上がった様な船尾に書かれていた船名は、第一宝栄丸、第五宝栄丸と云った同名が多かった。海辺の広い岩場には、四、五人の漁師が雑談をしながら、網を広げて繕っていた。その中でよく陽に灼けた精悍な、一番年長の漁師は、真っ赤な褌を締めて、忙しそうに指を動かしていた。

行く宛もなく、海を眺めて防波堤をブラブラと歩く。海は大好きだ。静かな海、荒波逆巻く海。今日の海は凪ぎである。ふと、子供の頃（五、六歳）、元寇・蒙古襲来時に、造られた石塁で、岩場の間に居るツガニを、弟と捕りに行ったことを思い出した。

仕掛けは、針金の先に付けたイワシの頭である。岩の間に、この仕掛けの餌を何本か置いて行く。暫く待っているとツガニがイワシの頭を覆うように食いついている。捕まえたカニは用意したバケツに入れて、二人で遊んでいた事を。

いつの間にか、民家の狭い露地を通って表通りへ出ると、家の前で鶏に餌をやりながら「コ・コ・コ」と言って鳥小屋に追い込もうとしている若い奥さんがいた。私に気づいた彼女は、色は白くはないが大きな目でニッコリ笑って「家に入ってお茶でも飲んで行きなさい」と言ってくれ、鶏を追い込むと彼女も奥に入る。

「上がんなさい」と声がかかり座敷に通される。暫くすると「風呂が沸いたからお入り」と言ってくれたので、台所の板間に来てみると、五十過ぎで日焼けした頭の禿げた達磨さんの様なおじいちゃんが、二、三歳の幼女を膝に座っている。傍らでは、四、五歳の男の子が遊んでいた。多分若奥さんのお父さんだと思い。「田中です、お邪魔してます」と挨拶すると、いきなり、「何だ田中、お前のズボンは少しも折目が付いてない、海軍軍人がそんな事でどうする」と、一喝された。

怖いおじいちゃんだ、海軍の軍歴の有る方かなと思っていると、横で若奥さんが私を見て笑いながら（気にしないで）と目で言ってくれる。

懐かしいわが家と同じ、五右衛門風呂だった。お湯に浸かりながら、ゆったりとした気分になっていた。先程のおじいちゃんは何処かで見た様だと、考えていると、岩場で網を繕っていた真っ赤な褌をした、長老格の漁師さんだった。

風呂から上がると、食事の準備が出来ていた。大きな海老が器からはみ出している天丼が二ツ盆にのっていた。

持って来た柳行李の弁当は、「鶏にやって下さい」と言って渡した。

台所と座敷は障子戸で仕切られていた。私が海老に舌鼓を打っていると、障子の向こ

うから、おじいちゃんの声がした。「○○雄、☆☆子、これが兵隊さんの弁当だよ。一緒に食べよう美味しいぞ」と、子供たちに食べさせている様子がぼんやり障子に映り、鶏に上げてくださいと言った事が、何だか申し訳なく悔やまれた。

帰える時、おじいちゃんの名前は、佐藤大蔵さん、若奥さんの名は結子さんと紹介された。家族の皆さんに、心から感謝と礼を言って帰隊した。

ズボンの折目が、奇麗に一本の線になっていた。とても嬉しかった。

これが縁で、毎回外出、外泊には必ずお世話になっていた。

ある日、隧道を出て倶楽部の横を通りかかると、向こうから思いがけなく薮さんのおばさんに出逢う。長い間行かなかったので少々ばつが悪い。おばさんは傍らに寄って来て「どうして来なくなったの、今晩は吃度お出でよ、お餅を搗くから」と言ってくれた。

夕方一人でおばさん宅を訪ねると、大きな大福餅や草餅を包んでくれた。「深谷さんや石松さん二人は作業中でも山越しに来て、何かないと云って来るよ、田中さんも遠慮しないでお出でよ」と言ってくれる。おばさんの親切が本当に嬉しく心の中ではいつも感謝している。

しかし、おばさんの家は、私の家同様に貧しそうにみえた。私以外何人かが来ていることは知っていた。これ以上負担をかけては申し訳がない。つい遠慮していた。

初夏の日差しが大分強くなった或る日を境に、田子湾を毎日波飛沫を立てて走っていた暁部隊の上陸舟艇は、何時の間にか、隊員と共に姿を消していた。

真夏の晴れた青空を仰と、白銀に輝くB29の編隊が数十機、北を目指して飛んで行く。今日、奴さん等は何処を爆撃するのだろうか。

最近、部隊内外で何かが起きている。これは練習生の皆が感じていることである。

或る日、何故か五右衛門風呂を頂いた佐藤さんの若奥さんに逢いたくなった。そしてズボンの折目のお礼も言いたかった。

学校の坂道を下りて佐藤さん宅に行った。若奥さんは優しい笑顔で迎えてくれた。

「丁度よい処へ来たわね、今ドーナツが出来たところよ」と言って、お皿に入れて、熱いうちにおあがりと持って来てくれた。早速頂いた。食べながら郷里の事や、家族の事を色々と話した。優しく受け答えをしてくれた。

帰りぎわ、ドーナツを四・五個包んでくれたが、嵩が大きいのでポケットに入らない。仕方なく手に持ったまま石橋を渡り、坂道を学校の方へ上りかけた時、上から先輩が一

人下りて来る。拙い事になったと思ったが道は一本、何処へも逸れることも出来ず、ままよと中程付近で出会い、私が敬礼すると彼は答礼しながら、私の手元を見ていた。行き過ぎようといたら呼び止められた。

「おい貴様何を持っているんだ」「ドーナツです」と言うと、彼は私の手から包みを取り上げ、開いて中身を確かめると「今後は気を付けろ」と包みを持って坂道を下りて行った。

これが本当の、「トンビに油揚を攫われる」と、言うのだろうか……。

折角のお土産が、奥さんの優しい笑顔が、浮かんで悲しかった。

## 30　特攻艇震洋格納庫完成

三直の勤務は夜食に雑炊が出た。食卓番は暗い山道を越え、小学校の烹炊場迄取りに行く。洞窟内での食事は、吊るされた一個の電球の元に集まり、皆思い思いに食べ始める。贅沢は言えないが、時には糊の様になったものや、焦げ臭いのもあったがともかく、空腹を癒してくれるのが有り難かった。食事が終わると再び作業開始。

奥に近い天井の裸電球の明かりが、黒い岩肌を物憂さく照らしている。ノミを打つ者、

側壁の出っ張りを削る者、地面を均す者等。指揮する班長は作業が始まって以来一度も姿を見せていない。私達は自然に各自の部署を決め作業を遂行して来た。

もうすっかり夏の季節になっていた。

私は、用足しの為洞窟の外に出た。ディーゼル・エンジンは、停止している。作業場は深々として暗く、人影もなく我が班の洞窟から、微かに槌打つ響きが聞こえて来るばかりである。各洞窟は掘り進み、今は深くなっている。入口には木の枝を束ね囲ってあるので明かりは洩れない。私は岩影で放尿しながら空を仰いだ。天空から今にも降って来そうな程星が瞬いている。用を済ますと私は憑かれた様に、洞窟とは反対の海の方に向かって歩いていた。山肌に沿って大きく右に回ると、ゴツゴツとした岩場に出た。ここまで来ると潮騒が聞こえ、足許に波の音がする。空は田子湾に向かって拡がっている。足許の岩に寄せる波が砕けてザッザッと音をたてる。押し上げられた海水が岩の窪みに溜まり流れ落ちる時、「チロチロ」とせせらぎの音をたてて海に流れてゆく。田子湾を取り巻く岬の尾根が、夜空にくっきり黒く浮かび上がっていた。

私は一人、岩の上に立ち陸戦訓練の事を思い出していた。小休止の時、叉銃（さじゅう）して練兵場に腰を下ろし班長は私に言った。

「田中、貴様泳げるのか」と、私は勿論「泳げます」と答えた。班長は疑いの目で私を見たが、

それ以上は何も言わなかった。

　此処には槌の音も明かりも無かった。ただ静かに寄せては返す波の音は、海の鼓動の様な響きを持っていた。振り返って闇の中を透かして見たが、遠くに鍛冶屋の灯りが小さく見えるだけで、辺りは人の気配も無い。私は衣服を全部脱ぎ捨て足許に置くと、岩場を降りて足を海水にそっと浸した。冷んやりとした感触が足から伝わって気持ちが良い。思い切って海水に体を沈めると岩を離れた。海面に出ると、静かに水を掻き沖に出る。対岸迄は約七～八十メートルの距離、向かいの岬が黒い屏風を立てた様に右の方へ延びていた。夜光虫が青白く光るその裾を目当てにして進んだ。対岸に寄せる波の音が（チャボ・チャボ）と聞こえて来た。岸を目前にしてどれ位来たのかと振り返って、思わず「ハッ」とした。

　私の泳いで来た海面には、泳いだ跡が青白い帯の様に、くっきりと浮き上がっていた。一番心配したのは誰かに知られる事だった。あれ程静かに波を立てない様、泳いだにも拘わらず夜光虫は光った。どう仕様かと思っていたら、初めて田子の透明な海底を覗いた時、あの海藻の間からキラキラと不気味に白く光っていた光景だった。あれは海豚の白い骨と聞かされ驚いた事を思いだした。何か不吉な予感に怯えた。

　今、その骨が私に襲いかかり、食いついて海底に引きずり込む様な錯覚に落ちた。早く引き返そう、この様な暗い海には、他にも得体の知れぬ怪物が、いるかも知れない。

それにしても夜光虫には参った。急げば光りは益々強くなるだろう。私が海から上がるまで何も出ないでくれ。誰も海を見ないようにと、祈る気持ちで泳いだ。

やっと元の岩場に辿り着き、岩の上に上がると人心地がつく。闇の中を透かして見たが幸い人の気配は無い。急ぎ衣服を着けると洞窟に戻った。窟内には薄明かりの中で、私のやった秘密の冒険は知ら無い。同年兵の打つ、槌の音が「カツ・カツ」と、聞こえていた。

私が田子に来て既に、四ヶ月が経っていた。上陸した当初未だ肌寒い日の多かった日々も、今では夏服（第二種軍装）を貸与されていないので作業服を着用していた。

叢（くさむら）には、早くも虫の音楽が聞こえた。

洞窟は完成間近、それ迄、顔を見せた事のない班長が来て、削岩機を使って天井や側壁の凹凸を削ってくれた。

時々何処かでズシンと腹に響く音がする。部隊長が入江に舟を出し、ダイナマイトで魚を捕っているのだという。其処で三人程が揃って見に行く。浜に出て見ると入江の中程に浮かべた小舟の中に、安達部隊長が一人の従兵を連れて乗っていた。彼は、ダイナマイトを詰めたビンを海に投げる。ズシンと腹の底に響く様な音がして、海水が小山の様に盛り上がる。すると大小の様々な魚が、海面に飛び上がったり、腹を上にして浮き上がって来た。大きいのを選んで従兵が網で掬いあげる。部隊長は得意満面で次々にダ

イナマイトを海に投げ込んだ。
私達は浜で、その様子を苦々しく見物していた。
作業は完了した。後は特攻艇（マル四こと震洋）を出し入れするレールの付設作業であるが、その作業と管理の為に残留希望者を募った。我が班からは、EとJの二人が残る事になった。若しかしたら教育再開の淡い夢を見ていたが、これで完全に断ち切れてしまった。
明朝早く、田子を発ち岡崎に帰隊する事になった。

## 31　田子最後の外泊

今日の外出は、最後の外泊となる。
お世話になった、薮さんのおばあちゃん宅に、別れのご挨拶に伺った。おばあちゃんは、顔をクチャクチャにして泣いて別れを、惜しまれた。
母の温みを肌で感じた思いがした。
別れ際おばあちゃんの手に、十円札二枚を、しっかりと握らせた。

感涙で咽ぶ。無言の別れの挨拶であった。

田子には、姉と慕う人がいる。佐藤結子さん（二十八歳）である。私が初めて純真に異性として感じた人である。これが不純な恋とは、当時の私には判る由もない。

私は、結子さんを優しいお姉さんのような気持で、何でも話し合える人であった。

明日の、朝未き時間に、田子を離れます。今日は最後の外泊を告げると、おじいちゃんは到頭来たか、これからが正念場だ。お国の為、しっかり盡くしてくれ。と励まして頂いた。

結子さんが呼ぶので隣の部屋に行くと、棚から紙箱をおろし、箱の蓋を開けると中から白い紙袋を取り出して、「この薬はね、田子に伝わっている万病に効く薬よ」と言いながら袋の口を開いて掌に傾けると、中から白い丸薬が数個転がり出て来た。

「食あたりなんかで、お腹が痛くなったら二つ三つ飲みなさい、若し傷をした時はこれを咬んで砕いて傷口に塗るのよ」と。結子さんは私の目を吃っと見詰めながら、噛んで含める様に言ってくれた。私は一粒取って噛んでみたが、味は全く無かった。

錠剤の入った袋を、私の掌に乗せると「本当に効くのよ」と、大きな目を悪戯っぽくしばたいて、言ってくれた。

今夜の夕食は、田中さんの好物、「海老フライ」「海老の刺し身」色々沢山造るから一杯食べてね。

又、「明日船に乗るときは、お寿司を造って持って行ってやっからね」と。遠足に送り出す様な感覚で言ってくれた。これは彼女の精一杯の送別の言葉と、身に染みて嬉しかった。真夜中、出発の準備の為、最後の別れを告げた。

結子さんの手を握った。胸にジーンとくるものがあった。

## 32　桟橋の別れ

出発準備も整い待機していると、暗くなって「総員集合・舎外に整列」の号令が掛かる。長い間お世話になった小学校とも今日でお別れ、今夜は月も無く暗い空に星の光があるばかり。校庭を出て石段を踏み谷川に沿って道を下りる。大通りの石橋を渡ると、佐藤結子さん宅に突き当たる。道は其処を左に曲がる。昨夜遅く帰隊した際、出発は夜中になると知らせていた。若しかしたら靴音を聞き付けて、結子さんは出て来てくれると信じていた。いよいよその時が来た。彼女は小走りで来てくれた。私は無意識のうちに声

掛けていた。約束どおり包みを手渡してくれた。結子さんの両手を思いを込めて強く握っていた。薄暗い中でも彼女の瞳には涙が光っていた。

言い盡くせぬお礼の言葉は、彼女の瞳を凝視し心の中で叫んだ。

今朝の海は凪いでいるのか、静かで波の音も聞こえない。暗い道を靴音だけが通り抜ける。漁業市場の広いコンクリートの道の横を通り、石段を降りると板を敷いた、桟橋がある。細長く海に突き出た桟橋の端に建ってる電柱の裸電球の灯りが、既に着岸している黒い船体を物憂げに照らしていた。その時、村上兵長の大きな声が闇に響く。

「先の者から順番に乗り込め、暗いから足元に気を付けろ、ボサッとして居ると、海に落ちるぞ」と。桟橋の踏み板が、気忙しく（カタカタ）と音を立てる。海水が、（チャブ・チャブ）と船腹を洗う音を聞きながら船板を渡って乗船した。

上甲板に出ると其処はもう先着の者で混んでいた。彼らは甲板の鉄柵に寄って、今歩いて来た魚市場の方を見ている。私は皆の肩越しに眺めて驚いた。今通って来た時には人の気配は無かった魚市場が今、見送りの人々で埋まっている。矢張り私達の足音を聞き付け、急ぎ駆け付けたに相違ない。辺りは次第に騒がしくなって来た。

「○○さーん」「☆☆さーん」、送る人、送られる人の名前が交錯している。この混雑と

暗い中ではお互いの顔すら判らない。私はじっと闇に目を凝らして、結子さんを探した。「田中さーん」と騒音の中に紛れもなく彼女の声がした。思わず私は大きな声を張り上げて叫んだ「結子さーん！」「ゆうこさーん！」と、彼女を名前で呼んでいた。其れは自然な精一杯の意志の発露であった。彼女にこの声は届いたと私は信じている。別れとは何時も悲しく寂しいものである。

エンジンの音が高くなり、船は静かに桟橋を離れた。今度は桟橋の上が零（こぼ）れんばかりに、見送る人々で一杯となっていた。

「さようならー」、「げんきでねー」「有り難う御座いました」。桟橋上では裸電球の灯りに照らし出された人々が、重なり合う様に高く手を挙げて振っている。桟橋から暗い甲板は見えないだろうけれど、私達も離れて行く桟橋に向かって、夢中で手を振った。口々に呼び合う声が暗闇の中を行き交う。期せずして甲板上では歌声が挙がった。

**ラバウル小唄**（替え歌）

♪さらば田子村よ、又来るまでは、
しばし別れの涙が滲む、

恋し懐かしあの山見れば、
人の情けの火が灯る。

♪船は出て行く、田子村沖を、
愛しあの娘の打ち振るハンカチ、
声を忍んで、心で泣いて、
両手合わせて、ありがとう。

歌声は甲板上で全員の合唱となり、繰り返し、繰り返し唄われた。歌声は明け行く田子湾の波間に吹く、風に揺れながら流れて行った。村の皆さん達と私達の距離は次第に離れて行き、桟橋を去り難く何時迄も手を振る人の姿も、淡く霞の闇の中に溶けてしまった。今は桟橋の影がぼんやりと港の位置を知らせるのみ。別れの歌も何時しか止んで、甲板に残る人影も僅か、船は青白い航跡を残して只々進む。聞こえるものはエンジンの音と、舳先に砕ける波の音のみとなる。遥かに見えていた桟橋の影も何時の間にか消えていた。外海に出ると船はうねり始めた。私は甲板を降りて船室に入る。皆それぞれに荷物を下して休んでいた。私は寛ぐ場所を探して、衣嚢（いのう）〔ものいれ〕を下しそ

の場に座って休んだ。

船は、無事沼津港に着く。この春来た時は夜中であった。その上明かりが一つも無い暗闇だったので何も判らなかったが、今日は何処を見ても、荒涼たるものだった。

それは、焼け跡が片付けられていた為であるが、空襲を受けたと云うのは、駅に来て判った。駅の建物は残っている。ホームに立って四方を見回すと広々とした中に、未だ片付いていない崩れた瓦礫が、随所に残っていた。引込線の上には、焼け爛れて赤く錆びた骨組みだけの貨車や客車が放置されている。三月の空襲で名古屋の空が赤く染まっているのを、兵舎から見えていた。今日は沼津の焼け跡に接している。人々の顔には悲痛な陰は見えないが、日常生活は大変だろうと心が痛む。

列車に乗り込み座席につくと直ぐ、うとうとと眠っていた。時々目を開けて眺める車窓の景色は、無残な焼け跡ばかりが目に付く。安城駅には昼頃着き、列車を降りて懐かしいの岡崎海軍航空隊に向かう。やっと帰って来た岡崎はもう夏の真盛り、景色は全く四ヵ月前の面影をとどめていない。此処を発つ時は、芽ぐみもしてなかった梨棚は、暫く見ぬ間に装いを変え、濃い緑が繁ってその木の葉隠れに、鶏卵程に育った青い実が沢山覗いていた。懐かしい東海道の松並木だけが変わらぬ姿で、私達を待っていてくれた。東海道を渡り広い道に出ると隊門が見えた。作業服の兵士を乗せたトラックが数台、砂

煙りを上げて隊門を出て行く。門柱に“第一岡崎海軍航空隊”の名称は無く、代わって見慣れぬ看板名“第二陸上輸送隊”となっていた。衛兵所には鼻髭の先任伍長の姿も見えなかった。

「只今」と言う気持ちで兵舎に入ると衣嚢を下した。日夜訓練に励んだ兵舎は、四ヵ月の空白をその侭、切り抜いた様に索漠としている。夜になっても田子からの延長の如く、寝具用意も巡検もなく、堕落というよりも不安な気持ちに駆られる。

帰隊した翌日、支給された第二種軍装を着用し、一月延びていた進級式が練兵場で行われた。

「海軍上等飛行兵を命ズ」。なんて空々しい進級式なんだろう。本来は純白であるべき夏服（第二種軍装）も、雑草を使って緑色に染めている。帽子カバーも然り。俺の中身は実の所、海軍上等土方兵じゃあなかろうか。

伊豆から帰って来た私達には、訓練も作業も無かった。毎日三回の食事の外には何も無く、暇を持て余していた。「総員起し」「点呼」「朝礼」「課業初め」「温習」「寝具用意」そして「巡検」。其れ等はもう私達に取っては、死語の如くなって終わるのか、嗚呼、何たることか！

暇を持て余した、深谷、石松の三人で、隊内を偵察する事にした。訓練に朝夕駆けた

道端の雑草は、六月の太陽に照りつけられて捩れ、道路は乾いて埃っぽくなっていた。先輩たちの住んでいた兵舎の厠に入って見ると、長い間使用した形跡は無かったが、内壁の板には当時の落書きが残っていた。「九州男児頑張れ」「薩摩隼人」「海軍の味噌汁は菜っ葉ばかりで拙い」等。こんな事書いて無事に済んだのかと、不思議に思う。各兵舎は変わらぬ形で建っている。今は誰も居ない此の兵舎、曾て数千人の若い血潮の漲る予科練生が躍動、連日の訓練に励んでいたのである。

酷寒の朝、霜柱を踏み砕き、霜解けの泥濘を駆けたのは、此の道であった。あの日の訓練は夢か幻か、その道を灼熱の太陽がジリジリと照りつけていた。

無人であるのは判っていても一つ一つ兵舎の中を覗いて見まわる。

絶え間無く聞こえていた実習部隊の爆音も、今は途絶えて部隊全体が、ひっそりとした霊気の気配がする。若人が青春の情熱を、この大地に燃やしたとは夢の様で、空には一機の機影も見えない。

烹炊場の横を抜け曾て戦備作業に通った道を行くと、低い丘の起伏している所に出た。松根油を採った跡に釜が放置されていた。その裏手に回ると窪地にトタン屋根の小屋が建っていた。小屋の前に泥濘があり、三、四頭の仔豚が、その中で寝ている。小屋の中にも、何処にも人の気配は無い。一体此処は航空隊ではないのか、と不思議に思った。引

き返す途中、ある一棟の兵舎の片隅に、トマトが二本互いに寄り添う様に、植えてあった。二本とも三十センチ位の高さに延びていて、どちらにも黄色い可憐な花を数個咲かせ、健気にも片方の枝には小さな青い実を一つ付けていた。

　このトマトは誰が植えたのだろうか、その人は今何処に行っているのか、きっと、心優しい人に違いないと思うと心が和む。それにしても此のトマトが赤く色着く頃、我々は何処の基地で、如何なる作戦に従事している事だろうか。

　四ヵ月留守の間に、航空隊の様子は随分変わっていた。否、もう航空隊ではないのだ。教場に使っていた格納庫は、飛行機の組み立て工場になり、組み立て半ばの機体に、色取りどりの配線が束で、剥き出した侭放置されていた。どの作業所も部品不足で作業が捗らない様子。庫内に女性がいるので不思議に思ったら、彼女達は女学生の挺身隊で、飛行機の組み立てに携わっているとの事。完成は未だ大分先だと思ったのに、二、三日見ぬ間に飛行機も、女子挺身隊の姿も忽然と消えていた。

## 33　敵機襲来

「第一警戒配備、戦斗要員各部署に着け、総員退避、退避急げ」。何時もと違う、当直士官の緊迫した声が、拡声器から響き渡る。報せると言うより、寧ろ叫び声に近い。私達は急ぎ兵舎を出て防空壕に走り込んだ。私は壕の入口まで戻り、外の様子をじっと息を凝らして伺ったが、何の音も聞こえない。壕の奥は暗くて判らないが全員声を潜め、緊縛した空気の中で身動きもしない様子である。

拡声器は後の情報を少しも伝えてこない。一体何が起きたのかさっぱり判らない。敵機襲来であることには間違いないと思い、私は全神経を集中して外の様子を探ろうとした。それにしても当直士官の、あの慌てた声は普通ではない。高鳴る胸を静めながら耳を澄ましていると、爆音らしき音が或いは高く、或いは低く聞こえて来た。敵機か友軍機か、状況を確かめるために私は壕の外へ出た。

周囲を見渡すと相変わらず薄雲が低く空を覆って、所々僅かに青空が覗いている。地上に人影は無く、時間が停止している様に見えた。建ち並ぶ兵舎や格納庫の向こう遥かに見える、第三岡空の建物の一角に、細い白煙が一筋、風が無いので真っすぐ、上に昇っている。其処に何かが飛んでいた、恐らく其れが敵機だと思った。滑走路の上を低く飛んでいる状態は、秋空に茜蜻蛉を見ている様だ。約三十機、時々豆の弾ける様な音が聞こえる。敵機はまるで自分の基地上空を飛ぶが如く、傍若無人に振る舞っている。私は

座敷を土足で、踏み躙られている様な屈辱感。我々には奴らを迎撃する戦闘機は無いのか、余りの不甲斐なさに向かっ腹が立つ。

我に返った時、敵機の影は次第に大きくなって、上空に迫っていた。飛行場を飛び越え格納庫の屋根すれすれに飛び、手当たり次第に機銃を、乱射しながら近づいて来た。ジュラルミンの持つ、冷たい銀色の光沢、不格好な機体、先を切り取った翼等、零戦や天山艦上攻撃機を見慣れた私には、零戦に勝るとも劣らない此のムスタングも、数段劣っているかに見えた。「くそっ、ヤンキー野郎っ」。思わず握り締めた両の拳、キリキリと歯軋りをした。銃が欲しい、今此の手に銃があれば一機、いや二機も三機でも撃ち墜すことが出来ると、そう思う程敵機は低く飛んでいる。

奴らは何を目標にしているのだろう、地表すれすれに飛んで手当たり次第に撃ちまくる。その中の一機が私の眼前で旋回し、奴さんの顔が私の方を見た様だった。今度は俺を狙って来る、奴が向きを変える前に、壕の中に走り込もうと思ったその時、私の腕を掴んで壕の中へ引き摺り込んだ者がいた。その僅か後に、「ピュッ・ピュッ・ピュッ……」機銃弾が空を切る音と同時に、「プツ・プツ・プツ・プツ……」と、土嚢に突き刺さる音がして、天井板の隙間から、土塊がぱらぱらと頭や肩の上に降り掛かった。「ダ・

ダ・ダ・ダ……」と、体に響く機関砲の発射音がする。来襲した敵機の銃撃と、応戦している我が軍の対空砲火音で、壕の外は騒然となっている。今先、撃って来た弾は間違いなく俺を狙ったものだ。私は曾てない程の憎悪を覚えた。暗い壕の中では皆息を潜めて、状況の成り行きを推している様だ。そのうち機銃音も次第に遠ざかり外に静けさが戻る。私を壕の中に引き込んだ彼はやっと腕を離した。途中で離せば又、外へ飛び出すとでも思ったのだろう。辺りが落ち着いて、初めて私を壕に引き摺ったのは、村上兵長だった。

どれ程の時間が経ったか判らないが、第二警戒配備となり壕を出る。台風が通過した様な空襲跡を視察しようと、又、三人で隊内を見て回った。

空地や路上に、薬莢（やっきょう）を赤く塗った不発弾が数発落ちていた。酒保前の電柱に通していた四～五十本の電話線が、一本も残さず切断されていた。

墜落したＰ51が酒保倉庫に墜落炎上していた。このＰ51を撃墜したのは、七、八期練習生の機銃隊員の武勲だった。

尚、この日の戦果は、「Ｐ51三機撃墜・撃破二機ナリ」。

## 34　さらば岡崎海軍航空隊

私達、八期生は、関東方面への転任が決まった。

愈々、岡崎を去る日がやって来た。

貸与品（作業服、冬シャツ、冬袴下、フランネルの胴巻、体操衣上下、雨着、地下足袋、等々）を返納すると、残った物は第一、二種軍装、制帽、下着類、巻脚半、その他となり、二種軍装を着服すれば、衣嚢は貧しい程ペチャンコになる。

夕食を終え一休みすると舎外に整列の声が掛かった。すっかり軽くなった衣嚢を持って兵舎の外へ出る。太陽は西の空に傾いていたが、相変わらず日差しは強く、兵舎の影は長く延びていた。私達は一応整列はしていたが、思い思いに立ったり屈んだりして、雑談を交わしていた。その時、見知らぬ下士官が来て、誰彼無しに話しかけている。私はこの下士官が引率者になる人かと思った。

私の傍らに来るとペチャンコになった衣嚢を、指差して、「何だ貴様等の消耗品はたったこれだけか！」と言って珍しい物でも触る様に、衣嚢を手で押して見る。

「まあ何たって貴様等も、消耗品の員数の一部だからな、消耗品は少ない方が面倒無く

て良いだろう」と、馬鹿にしたような口調で言った。今迄雑談でざわめいていた辺りが急に沈黙した。周囲の視線が下士官に集まった。居心地を察した彼は逃げるように立ち去った。「出発用意、前へっ」と号令が掛かる。

練習生訓練時代、分隊士から訓示があった。其の時の、目の輝きは、今の我々にはもう無かった。

振り返って見ると、思い出の兵舎は何も語らず、西日に照らされて地面に長く、影を延ばしていた。庁舎前の広い道、この道の両側に並んで、先輩の三期、四期、五期の卒業を見送ったのである。右上腕に上等兵の階級章、左腕には一重の桜マーク。意気揚々として出て行く姿に、羨望と自分の将来を想像していたのに、その想いは大きく崩れ、現実は卒業ではなく転属として、この岡空を去って行くとは夢想だにしてなかった。あの下士官の言葉の様に、俺達は消耗品の員数なのか、消耗品が衣嚢を背負って隊門を出て行く。見送る人は数人の衛兵だけだ。懐かしの松並木ともお別れだ。左様なら。元気でな。

これから先俺達はどう成るのだろうか、不安の中歩いていると、太陽は山の向こうに沈み、空全体が白く光って来た。一番星が西の空に燦めき始め、道に沿った梨棚の暗い影を見ながら安城駅に着く。辺りに黄昏が迫った頃、私達は車中の人となる。

車内は案外空いていて座席に腰掛ける事が出来た。転属先は関東方面と、一応聞いているが、果たして何処だろうか、〈行く手定めぬ旅鳥、明日は何処の空とやら〉、こんな心境になってしまった。変な夢を見てハット目を覚ますと、列車は停まっていた。何処の駅だろうか、いや駅ではなさそうだ、客の乗り降りがない。どうしたのだろう？　客車の窓には灯火管制の、黒い幕が降ろされている、外の様子は全く判らない。顔を上げて車内をぐるっと見てみるが誰も動く気配がない。耳を澄ませ外の様子を窺っていると、時折機関車の吐く蒸気の音が（シューッ）と、溜息の様に聞こえて来るだけである。乗客は何も無かった様に眠っている。

（ザクザク）と、砂利を踏む音が近付いて来て、私の窓下で止まった。「良く燃えてるなー」沈んだ声で言う。「んー」気の無い別の声が聞こえる。時計を持たない私には時間が判らない。安城を出たのが二十時頃、二～三時間は過ぎている。そうすると静岡辺りかなと見当を付けた。場所は不明だが列車は空襲を避けて停車していると判る。今、何処かで数多くの人々が住む家を焼かれ、命を落とされておられる事を思うと、胸が痛む。列車はこの後二、三度停車・発車を繰り返していたが、私はもう目を開けなかった。

車窓から射し込んだ朝の日差しを、真面（まとも）に顔へ受け眩しくて目を覚ます。私達が乗った列車は何事も無かった様に、駅のホームに着き停車した。衣嚢を背負った同僚が通路

の先頭になって、一般の乗客と一緒に移動しだした。私も急ぎ立ち上がると押される様にプラットホームに降りた。ホームは乗降客で混み合っていた。

　此処は何という駅なのだろうか、改札口を出ると駅前の広場は少し下り坂になっている。駅前には沢山の人が集まり賑わっていた。

　太陽は高く昇り日陰の無い広場に、容赦なく熱い陽が照り付けている。四、五人の戦友が駅舎の前にある水道に集まり、備え付けのアルミコップで水を飲んでいた。私も仲間に入り、コップに水を注ぐ、コップの水は牛乳を溶かしたように白い。同僚の一人が驚いたようにじっと見つめている。「大丈夫だ、水に空気が混じっているだけで只の泡だから」と言っている間に水は透明になった。彼は頷いて飲み干した。

　駅から引率されて着いた所は小学校だった。割り当てられた教室に入って、小さな机を片付ける。今夜は此処で一泊する事になった。

　翌朝、学校を出発して吾らが着いた所は、横須賀市久里浜の海軍工作学校だった。此処で初めて、吊り床（ハンモック）を使用した。始めに吊り床の取扱い説明と、注意があって早速訓練に移る。私達の居る二階は低く、吊り床用に造られている。天井下の梁には等間隔に駒が付いている。太い丸太の様に、括ったハンモックを、銃の様に立て、緊張した空気の中で号令を待つ。「吊り床用意（ピーッ）」。吊り床の片方のロープを、梁の駒

に掛け本体を縛っているロープを解く。隣との間は肩が触れ合う程狭い。そんな処で競争するのであるから、解いたロープが、所構わず飛んで来て顔に当たる。痛いが自分の解くロープも、相手に当たるからお互い様だ。吊り終わるとハンモックの横に立つ。

永年の経験者である兵曹が新兵教育での吊り床上げの話をしてくれた。

「総員起し」の号令でハンモックから飛び降りると、吊り床を縛り駒から外して、その場に立つ。所要時間を計って。タイムオーバーをすると、その者は罰直が待っている。縛り上げたハンモックを担いで、練兵場を駆け足で回る。ロープの縛り方が緩いと途中で形が崩れ、中の毛布が食み出して大変な事になる。幸いにして私達にはそんな罰直は無かった。それは吊り床の数量が不足していた。約三分の一がハンモックの下に、カボック（藁布団）を敷いて寝る羽目になっていた。ハンモックの上で服を脱ぐ時は重心が高いので、安定が悪く転落するから要注意である。夜中に物音で目が覚めた。私のハンモックの下で言い争う声がしている。顔を出して下を覗くとハンモックの下で、石松が床の上に胡座をかき、誰かを怒鳴り付けている。

「田中、聞いてくれ、此奴、俺が眠ってる腹の上に落ちて来やがって、驚いたの何んの、当たった所が痛くって……」。その横で、首項垂れ畏まっているのは、他班の福井であった。彼は私の斜交いのハンモックで寝ていた。何かの弾みで落ちたのだ。吊り床に慣れ

ぬ彼も気の毒だが、その下で寝ていた石松は災難である。

「そうか、でも仕方がない事だ、我慢してやれよ」と言うと、石松はブツブツ言いながらも横になり毛布を被った。

福井は、やっとほっとした顔で、私に一寸頭を下げてハンモックに這い上がった。

此処に来て二、三日経った夕食後、辺りが黄昏始めた夕暮れ、向かいに建っている二階建て兵舎のガラス窓を透して、遥か向こうの景色が真っ赤になっている。先程迄は、夕日が窓ガラスに反射して、ギラギラ光っていたのにどうしたのだろうと思ったら、ドンドンと太鼓の音がする。「おやっ！」と思ったら、空襲警報のサイレンが鳴り出した。急ぎ防空壕に飛び込んだが騒ぎは直ぐに治まった。この所、毎日の様に敵の飛行機（ＴＤ４Ｙ）が東京湾から侵入し偵察に来ているという。足の遅い敵の飛行艇がたった一機で来ているのに、撃ち墜とす事が出来ないのか。久里浜に来て又一歩戦場に近付いた感じがした。

## 35　巡検終わり……

久里浜に来て三日目の朝、部隊編成替えが発表された。私達は浦賀の奥に移動する事になった。部隊名は、「第十三特別陸戦隊・ウ・七三〇部隊・米川隊」である。主力は予科練生であるが、一般水兵、通信兵、が加わって総勢百数十名、皆同じ年代の一般の水兵であったが、海軍に籍を置いてるだけで、何の教育も訓練も受けていない名ばかりの兵隊であった。

暑い日盛りの乾いた道を衣嚢を背負って歩いた。途中の山を一ツ越えると海岸に出た。ここで小休止する。引き潮で遠浅になった海に、素足で入ると気持ちが良い。波間の大きな石の間に、黒い束子（たわし）の様な海胆（うに）が沢山いた。

小休止が終わって再び歩き始めた。暫く行くと、今度は左側に山が迫り出し、海岸に沿って歩いた。右前方の海が広い湾になっている。海岸には大小様々な船舶が繋留されていた。無線のアンテナを張った舟、大きいのは漁船で、田子でよく見かけた、「宝栄丸」と言う船名の漁船もいた。

漁港の近くに造船所があった。その造船場の広い二階が、隊員の宿舎となった。

此処数日の間に色々と変化があった。しかし何一つ安定していない。何故なのか、不安と焦りで、何故か気持ちが落ち着か無い。

いつの間にか、窓ガラスには夕闇が迫っていた。部屋の電灯が明るく床板を照らしている。忙しかった一日も、潮の引くように静かに暮れた。今日も無事終わったと言う安堵感と寛ぎの一時である。私は窓辺に立って涼しい夜風を胸に入れた。

夜空の星の輝きは変わらないが、私の境遇は目まぐるしい程の変化だ。当初は失望と空しさに心は苛まれたが、諦めと言うのか、今では返ってサバサバしていた。

欲望が無くなれば人間って強くなるものだな、と感心する。新聞も読まず誰も戦局の状況を教えてはくれない。しかし目の前の大きな物が崩れかけているのが、身に感じる。本土決戦、水際特攻と勇ましい掛け声が聞こえて来る。

最後には、特攻魂に神風が吹き荒れ、日本は勝つを信じて。

そろそろ横になろうかと思っている時に、「田中上等兵、事務室へ来る様に」と、連絡があり急ぎ階段を降りて行く。事務室は、一階中央階段の側にあった。

事務室の中央には大きなテーブルが置いてある。そのテーブルを挟んで隊長と二人の

下士官が居た。

「田中上等兵。参りました」と、廊下に立って開いたガラス戸の外から申告する。

「おう、田中か、貴様は今夜から当直担当だ。今から（巡検終わり。何々……）と皆に聞こえる様に言って来い」と、一人の兵曹から命令された。「ハイッ」。返事良く事務室を出たものの「巡検終わり」その後の言葉が何の意味か判らない。引き返して聞き質すのも恥ずかしい。海軍用語には屡々英語を使っている。これも其の類いだろう。ゴロさえ合えば判るだろうと、階段の中央に立って、大声を張り上げた。

「巡検終わり、タイケルボンヒーダツ。巡検終わり、タイケルボンヒーダツ」。と二回叫んで事務室に戻った。

事務室に入ると、米川隊長と二人の兵曹が、顔を真っ赤に体を捩って笑っている。特に隊長は頭をテーブルにぶっ打つけんばかり、三人は何を笑っているのかと訝しくしていると、隊長が口を開いた。「田中、今何と言ったんだ、（巡検終わり、タバコボンヒラケ）と言って来いと言ったんだぞ、まあいい、タバコはお前達には用無しだからな、帰ってよし」。私は帰る途中階段で立ち止まり考えた、「タバコボンヒラケ」って何の事だろう、あゝそうか「煙草盆開け」と言う意味か、と気づくと体が一気に熱くなっていた。好い

加減で無責任な発言をした事を恥じた。私の信念であった的確な判断をする持論を、自分自身が裏切ったのだ。無性に腹が立った。両手で思いきり両頬を何度も叩いた。階段を登り部屋の前まで来たが、入るのを躊躇してしまった。

「お前、今何と言ったんだ」と、皆に笑われそうに思えて、そろっと部屋に入ったが、何の反応もない。誰もが上の空で聞いていたのだろうか、私の顔を見合わせた者も、何食わぬ顔をしている。皆知らぬ顔をしていたのである。恐らく「巡検終わり」だけしか聞いて無かったのかも……？　一瞬、気が抜けてしまった。反面ホッとして床に横になった。

## 36　銃剣術・射撃訓練

翌日、小銃が支給され訓練が始まった。宿舎の広い庭に杭を打って、その杭に藁束を固く太く巻き付け縛り付ける。銃に着剣して、藁人形を敵と見なし突き刺すのだ。「藁人形と思うな、本当の鬼畜ヤンキーだと思え。突き刺した剣はその儘、抜かず一度捻ってから抜け、其の方が殺せる効果が大きい。では始めっ！」二列に並ぶと順番に走って行き、二つ立っている藁人形に向かって銃剣を突き刺す。いざ実戦となって敵が、この藁

人形の様にじっといているだろうか、と考えながらも「此の野郎」と気合諸共突いて振る。列に戻った私の所に、つかつかと隊長がやって来た。「田中、貴様の突きは中々良い、此処に来て恰好の悪い奴を直してやれ」と言われた。相手は殆ど実習訓練を受けていないが、同じ年代の者である。口幅ったい様で実に遣り難い、でも余りに醜いのは、側に行って耳許でそっと言った。隊長が横に寄って来て聞き耳立て、「そんな甘ったるい事では駄目だ。実戦訓練だ！」と怒鳴られた。「ハイッ」。其れからは気合を入れて、遠慮なくビシビシと指導した。

銃剣訓練は僅か三日限りで終わった。代わりに射撃訓練が始まった。支給されたのは、猟銃で、私は銃身が二つある二連発銃である。射撃の経験の無い者は、猟銃である。猟銃は散弾だから多少、的が外れても、一つや二つ、何れかには当たるだろうというのだ。これで戦争に成るのだろうか？

この射撃訓練も、またも三日で終了した。それは戦備作戦の変更であった。

私達は、ここ数日の戦備訓練の変化に、何か異常なものを感じていたが、其れが現実となった様だ。

## 37　蛸壺作戦

上陸用舟艇で上陸してきた敵兵に対し、この海岸線で応戦する為の訓練である。その作戦が所謂「蛸壺作戦」である。海岸線の砂浜に蛸壺の様な穴を掘り、その穴の中に隠れて手榴弾で、上陸して来た敵兵を撃退阻止する作戦である。

穴の数は百個以上になる。手榴弾は一人数個装備している。

そうこうしている内に、陸軍が履く様な編み上げ靴が支給された。「ドイツ」へ送る筈が輸送出来なくなり、吾々が使用する事になった。戦備作業の時に支給された。地下足袋と同じく十一文の大きさである。靴底にはスパイクの様な鋲が、沢山打ってある為非常に重い。

## 38　弾薬の受領作業

横須賀軍需部へ、弾薬を受領に行く作業が始まった。真夏の陽射しを浴びて、山を越え海の景色を右に見ながら横須賀に着く。手続きが長引くので建物の軒下に腰を下ろし

て待つ。太陽は真上に来て日陰がないが、腰を下ろすと眠たくなる。僅かの時間だが居眠りをする。

　此処の倉庫要員の彼等は搭乗員だと言う。「俺も飛びたいんだが乗る飛行機が無いんだ、な」と、言って隣の一人に言うと（うん）と頷いていた。こんなに飛行機が不足して戦争に勝てるのだろうか、いささか不安が募る。

　手続きが終わって運ぶ荷物が来た。ずっしりと重量感のある長方形の木箱である。箱を括った縄に棒を通し、二人が組んで肩に担ぐ。真夏の太陽は輝いて暑い。直射日光を受けて顔も背中も汗が滲んでくる。陸軍帽子の様に後ろに垂れた日除け布のお陰で、首筋は案外涼しい。街中の公園にある大きな樹木の陰のベンチで、老人と幼児が寂しそうに腰掛けていた。公園を過ぎると家数も少なく殆どの家は雨戸を締め切って人の気配がない。

　家並みを過ぎて暫くは道だけが続く。路上に人の往来が多くなって来た。大きな岩石が道に競り出ている場所がある。その岩には大きな洞窟があり、多くの兵隊が出入りしていた。此処は武器庫とのこと。これを過ぎると乾いた埃っぽい道一本だけとなる。靴は埃を被って白っぽくなっている。ずしりと重い箱の中味は何だろう。機銃弾と言う者もいるが、我々の部隊には機銃は見ない。とするとこれは手榴弾に間違いない。一人に

幾つ貰えるのだろう。左に海を見下ろす所に差しかかった。ここから道は右に曲がって山越しになる。ここで小休止になった。

荷物を下に置いて汗を拭いた。周囲には木陰になる樹木が無い。赤土が剥き出して所々に薄（すすき）が群生している。雑草も乾燥で捩れ、今にも枯れてしまいそうだ。

木箱は大切な武器である。腰を下ろす場所が無くても、皆立って休んでいる。海から吹く風は心地よく、汗ばんだ肌に生気が戻る。道の海側は切り立った断崖で、その先は青い海である。道の端まで行って見ると、断崖の下には網を掛け小枝で覆った、砲台が海を睨んでいた。

砲台の中から白い整備服を着た兵隊が一人出て着た。見上げた時、私に気が付き中に入ったが、今度は別の兵隊が入れ代わり出て来て、私を見上げると今度も直ぐ引っ込んでしまった。

砲台の前方は砂浜になっている。四～五十メートル先の浜に波が静かに寄せていた。砲台は左右に幾つか見える。平時であれば、さぞ海水浴客で賑わうことであろう。潮騒も聞こえて来る。青い海原はずっと水平線の彼方まで続いている。見渡す限りの大海原にキラキラ光る波頭には、小舟の影も、水鳥の一羽も飛んでいない、何んにも見えない。遥か水平線上に大きな積乱雲が二ツ、ぽっかりと並んで浮かんでいた。不動の如く、眩

しく輝く白雲も、よくよく見れば、僅かであるが姿を変えている。

艦砲射撃が始まれば、この山も海岸も一変することだろう。蛸壺の中で手榴弾の、安全ピンを抜いて「一、二、三、」と三つ数えて、出来るだけ遠くへ投げろと言うのだ。其れだけの知識を持って、戦わなければならぬ。こんな不安な心を思い出していると、「出発」の号令が掛かり、再び重い手榴弾の箱は私の肩に乗った。

弾薬の受領作業が無事完了し、隊に戻ったのはもう夕暮れ近くになっていた。

隊長命令により当直担当として今夜も巡検終わり……の号令を掛ける時間が来た。「巡検終わり、煙草盆開け。巡検終わり、煙草盆開け」と、確実明瞭に叫んだ。隊長に報告のため事務室に行った。その時隊長、班長全員の視線が、私に向けられていた。隊長が毅然として「田中上等兵貴様、如何なる訓練にも耐えられるか！」「ハイッ耐えられます」と、即座に答えた。「よし判った。帰ってよし」。

## 39　伏龍特攻隊編成

「海軍伏龍特攻隊」として、海軍特攻兵器の中でも、マル秘中の秘密兵器である。訓練は、

深夜沖合の海上で秘密裡に実施された。

特攻隊員は、第一岡崎海軍航空隊予科練習生七期、八期生から選抜された。

「伊豆久里浜嵐部隊」七十一突撃隊が、「特攻伏龍隊」である。

第十五突撃隊は江ノ浦海龍隊と、震洋隊である。

特攻隊の任務は、敵アメリカ海兵隊の本土上陸用舟艇撃滅である。

上陸用舟艇には、海兵隊百名以上が乗船している。これが上陸を水際で阻止壊滅する。

自爆機雷である。簡単な潜水具（アクアラング）に、X0キロの爆薬を背負い、水深三～五メートルの海中に潜伏し体当たり敢行の時機を待つ。

所謂「人間機雷」である。

訓練中装備の不備で、水圧、窒息により、耳鼻の出血が多発した。まさに決死の訓練である。

実戦の出撃の有無は極秘である。更に実戦及び訓練中の殉職者は……。

これ以上、此の記録の詳細に付いては、記述のペンを進めるに忍びない。

合　掌

## 40　まとめ

「予科練」の存在は、強制の所産ではない。若さが故に、純真が故に、名声もなく、喝采もなく、黙々と戦い、祖国に殉じていった若者の群像である。

我が国の此の戦争は、決して非人道的なものではなかった筈だ。

民族の抹殺、最大の罪悪「戦争」と云うものがひき起された時、発揮される惜しみなき「固体の犠牲」は、民族、国家にとって、必須の宝であり、貴重な遺産である、と考えられるからだ。

「予科練」とは、「輝く」閃光であったと見るべきではなかろうか。

私にとりましては、晴天の霹靂余りにも非情な悲しみが訪れました。戦友高橋是行氏御逝去の報を高橋方子（みちこ）御内儀から受けました。一瞬耳を疑い愕然として、その場に伏せて号泣致しました。この作品執筆については、良き理解者であり資料の提供も頂き良き協力者でありました。心からご冥福をお祈りいたします。

合掌

戦後六十有余年前の、乏しき記憶の糸を紡ぎ書き記しました。
拙い文章の回顧録になりました。誤字・誤文・送り仮名等々、至らぬ作文恥じいる次第であります。

平成二十年三月六日　田中恭治

完

# 資料編

## 41　予科練の戦史概要

### 予科練の誕生

第一次世界大戦（一九一四～一九一八年）で飛行機の重要性を認識した日本海軍は、（一九二〇年／大正九年）下士官の中から航空適任者を採用した。当時の軍用機は、今から考えると全く技術的性能的に不備があり、研究開発の段階であった。高性能の飛行機が出来れば勿論高度な操縦技能も要求され、その技術技能を修得するためには、若くて優秀な人材を、最初から飛行機搭乗員として、養成することが必要となった。

（一九三〇年／昭和五年六月一日）全国の応募者の中から七十九名の少年航空兵が採用された。即ち海軍飛行予科練習生（予科練）の誕生です。それから（一九四五年／昭和二十年八月十五日）太平洋戦争終結までの十五年間に、続々と巣立った予科練出身者達は、日本海軍航空隊の中核として活躍、約二万名が祖国日本を守るため、その若い生命を、大空の彼方に海原の果てに散らしました。

予科練の制度

昭和五年、海軍飛行予科練習生制度が発足した当初は、高等小学校終了以上の者で満十四歳以上二十歳未満で、学力・体力ともに優秀な少年飛行兵として採用した。厳しい教育訓練課程を経て海軍航空隊の中堅幹部に育てました。

昭和十二年、更に航空戦力の急速な拡充のため搭乗員の大量養成が必要となり、従来の少年航空兵を、乙種飛行予科練習生と称し、新たに中学校四学年一学期終了以上、（後に三学年終了程度）の学力を有する志願者から採用する、甲種飛行洋練習生制度を設け、合格者を短期間で養成しました。年齢は満十五歳以上二十歳未満でした。また、海軍部内の一般下士官兵の中から飛行科を志願、選抜された者を、丙種飛行予科練習生と呼びました。

更に、昭和十八年から、乙種予科練志願者のうち一定の資格のある者を、乙種（特）飛行予科練習生と称して、短期教育の上第一線に送り出しました。

予科練の活躍

昭和十二年七月七日、日本と中国が戦闘状態に入った。海軍航空隊は同年八月十五日、

九州の大村基地を発進、折からの暴風雨を衝いて東支那海を飛び越え、中国の首都南京の軍需施設を爆撃した。当時、大編隊を組んで海を渡る事は、世界航空史に例がなかった。この渡洋爆撃に予科練出身者も参加し、予科練（少年航空隊）の評価が高まった。昭和十六年十二月八日、日本と連合国との間に戦争が始まった。所謂太平洋戦争である。ハワイの真珠湾攻撃に成功した日本は、瞬く間に太平洋の広範な地域を占領したが、昭和十七年六月のミッドウェー海戦で大損害を受けた。更には同年八月アメリカ軍のガダルカナル島への攻撃から、連合国の反撃が開始された。アメリカ軍を中心とした連合軍は、豊富な物量を投じ次第に日本軍を圧迫してきた。海軍航空隊は、優勢な敵を阻止するために、必死必中の特別攻撃（特攻）で爆弾諸共、敵艦に体当たりをする作戦を敢行するに至りました。

しかし、敵の攻撃は息をもつかず、遂に日本の本土に接近して来た。もはや空からの守りだけでは祖国を救う方法はない。新しい特攻兵器が戦場に投入された。人間魚雷・回天・海竜・蚊竜（こうりゅう）・爆装モーターボート・震洋（しんよう）・人間爆弾・桜花・爆薬を抱えて敵艦に体当たりするフロッグマン・伏龍（ふくりゅう）など、その何れもが若い予科練を中核とするものであり、空と海上と、海中一体となって戦ったのです。

靖国神社遊就館に展示された艦上爆撃機「彗星」

■艦上爆撃機「彗星」■

①乗員＝2名

②発動機＝愛知「熱田（アツタ）」三二型液冷式倒立V型十二気筒一、四〇〇馬力

③最大速度＝五八〇粁／h（高度五、二五〇m）、巡航速度四二六粁／h

④寸法＝全幅一一・五〇m、全長一〇・二二m、主翼面積二三・六㎡

⑤武装＝七・七粍機銃×2（機首上固定）、七・七粍機銃×1（後席上旋回）、爆弾二五〇～五〇〇瓩×1（胴体下）三〇瓩×2（翼下）

⑥製作所＝海軍航空技術廠、愛知航空機

昭和十三年以後、海軍では試作中の十二試艦上戦闘機（のちの零戦）に続

いて、仮想敵戦闘機よりも高速な艦上爆撃機の試作を立案、ドイツから購入したハインケル He118 急降下爆撃機などを参考に、十三試艦爆の試作を海軍航空技術廠で山名正夫技師の設計主務により、十五年十一月試作一号機を完成したが、増加試作機の審査中に強度不足のため空中分解事故を起し、ダイムラー・ベンツ発動機を国産化した「熱田」一、四〇〇馬力の信頼性不足の問題もあって採用が遅れた。

爆弾倉内にカメラと燃料タンクを増設した艦上偵察機をミッドウェイ海戦に参加させて、その特性が認められ、十七年七月二式艦上偵察機となり、長期改修の結果、十八年十二月に艦上爆撃機「彗星」が誕生した。

しかし発動機の不調などのため稼働率が低く、ついに空冷式星型の三菱「金星」一、五六〇馬力に換装して「彗星」三三型および三四型となり、各種の試作機を含めて合計二、一五七機の量産機に発展した。

## 42　敷島隊特攻出撃

大東亜戦争末期、日本国の命運且つ夕に迫りし昭和十九年十月二十五日、神風特別攻撃隊敷島隊々長、関行男大尉（戦後二階級特進）は、「教え子は散れ山桜、かくの如くに」と辞世の句を残して特攻の先陣となり、２５０キロ爆弾を抱いて敵の空母、「セントロー」に直撃してこれを轟沈した。

この壮挙は憂国の至情に燃える青年将校、関大尉の闘魂の権化であり、わが国武士道の精髄を発揮せしもので、忠烈万世に燦たるものである。

## 43　最後の特攻出撃隊

大分海軍航空隊は、昭和十三年十二月、艦戦、艦攻の実戦機教程を担当の練習航空隊として開隊、十九年三月隊を筑波空に移して解散。後大分海軍基地となり、艦戦・陸攻・陸偵・夜戦の実戦部隊が次々と配備された。

大分基地が最後の神風特別攻撃隊発進の地となった事由は、七〇一空彗星艦爆隊は国分空を本拠に活動、特攻出撃していたが、同地区が連日に亘る米軍艦載機の猛爆で被害甚大で、保有機温存のため大分基地に後退、伴って第五航艦司令部も鹿屋から移って来たのです。

運命の時今来る。

八月十五日、玉音放送で終戦が告げられていた夕刻、司令長官自ら先頭に立って、彗星艦爆十一機を率いて最後の沖縄特攻として飛翔し、遂に還らなかった。

突撃隊名簿（階級は出撃時）

操縦員

中津留達雄大尉（海兵70期）
伊東幸彦中尉（海兵73期）
山川代夫上飛曹（丙飛８期）
池田武徳中尉（予学13期）
渡辺操上飛曹（甲飛11期）
後藤貴男上飛曹（丙飛８期）

松永茂男二飛曹（特乙1期）
藤崎孝良一飛曹（丙飛特11期）

前田又男一飛曹（丙飛特11期）

川野和一一飛曹（乙飛18期）
二村治和一兵曹（甲飛12期）

偵察員

遠藤秋章飛曹長（乙飛9期）……宇垣長官同乗
大木正夫上飛曹（乙飛17期）
北見武雄中尉（海兵73期）
山田勇夫上飛曹（甲飛11期）
内海進中尉（予学13期）
磯村堅少尉（予生1期）
中島英雄一飛曹（乙飛18期）

吉田利一飛曹（乙飛18期）
川良良介中尉（予学13期）不時着生還
日高保一飛曹（乙飛18期）不時着操縦員生還
栗原浩一二飛曹（甲飛13期）不時着生還

宇垣機の突入から六時間後、特攻隊の創設者といわれた、大西瀧次郎海軍中将は、「特攻隊の英霊に曰(エッ)す。善く戦ひたり深謝す。最後の勝利を信じつつ肉弾として散華せり。然れども其の信念は遂に達成し得ざるに至れり。吾死をもって旧部下の英霊と、其の遺族に謝せんとする。」と、自刃した。

以　上

## 44　軍人に賜りたる勅諭

我国の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬つから大伴物部の兵ともを率ゐ中国のまつろはぬものとも討ち平け給ひ高御座に即かせられて天下しいしめし給ひしより二千五百有余年を経ぬ此間世の様の移り換るに隋ひて兵制の沿革も亦　なりき古は天皇躬つから軍隊を率ゐ給ふ御制にて時ありては皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと大凡兵権を臣下に委ね給ふことはかなりき中世に至りて文武の制度皆唐国風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人なと設けられしかは兵制は整ひたれとも打続ける昇平に狃れて朝廷の政務も漸文弱に流れけれは兵農おのつから二に分れ古の徴兵はいつとなく壮兵の姿に変り遂に武士となり兵馬の権は一向に其武士ともの棟梁たる者に帰し世の乱と共に政治の大権も亦其手に落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の様の移り換りて斯なれるは人力もて挽回すへきにあらすとはいひなから且は我国体にり且は我祖宗の御制に背き奉り浅間しき次第なりき降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政衰へ剰外国の事とも起りて其侮をも受けぬへき勢に迫りけれは朕か皇祖仁孝天皇皇考明天皇いたく宸襟を悩し給ひしこそ忝くも又惶け れ然るに朕幼くして天津日嗣を受け

し初征夷大将軍其政権を返上し大名小名其版籍を奉還し年を経すして海内一統の世となり古の制度に復しぬ是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴世祖宗の専蒼生を憐み給ひし御遺沢なりといへとも併我臣民の其心に順逆の理を弁へ大義の重きを知れるか故にこそあれされは此時に於て兵制を更め我国の光を輝さんと思ひ此十五年か程に陸海軍の制をは今の様に建定めぬ夫兵馬の大権は朕か統ふる所なれは其司々をこそ臣下には任すなれ其大綱は朕親之を攬り肯て臣下に委ぬへきものにあらす子々孫々に至るまて篤く斯旨を伝へ天子は文武の大権を掌握するの義を存して再中世以降の如き失体なからんことを望むなり朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるへき朕が国家を保護して上天の恵に応し祖宗の恩に報いまゐらする事を得るも得さるも汝等軍人が其職を尽すと尽ささるとに由るそかし我国の稜威振はさることあらは汝等能く朕と其憂を共にせよ我武維揚りて其栄を耀さに朕汝等と其誉を偕にすへし汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を国家の保護に尽さは我国の蒼生は永く太平の福を受け我国の威烈は大に世界の光華ともなりぬへし朕斯も深く汝等軍人に望むなれは猶訓諭すへき事こそあれていてや之を左に述へむ

一　軍人は忠節を尽すを本分とすへし　凡生を我国に禀くるもの誰かは国に報ゆる

の心なかるへき況して軍人たらん者は此心の固からては物の用に立ち得へしとも思はれす軍人にして報国の心堅固ならされは如何程技芸に熟し学術に長するも猶偶人にひとしかるへし其隊伍も整ひ節制も正くとも忠節を存せさる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かるへし抑国家を保護し国権を維持するは兵力に在れは兵力の消長は是国運の盛衰なることを弁へ世論に惑はす政治に拘らす只々一途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ其操を破りて不覚を取り汚名を受くるなかれ

一　軍人は礼儀を正くすへし　凡軍人には上元帥より下一卒に至るまで其間に官職の階級ありて統属するのみならす同列同級とても停年に新旧あれは新任の者は旧任のものに服従すへきものそ下級のものは上官の命を承ること実は直に朕か命を承る義なりと心得よ己か隷属する所にあらすとも上級の者は勿論停年の己より旧きものに対しては総へて敬礼を尽すへし又上級の者は下級のものに向ひ聊も軽侮驕傲の振舞あるへからす公務の為に威厳を主とする時は格別なれとも其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を専一と心掛け上下一致して王事に勤労せよ若軍人たるものにして礼儀を紊り上を敬はす下を恵ますして一致の和諧を失ひたらんには啻に軍隊

の蠹毒たるのみかは国家の為にもゆるし難き罪人なるへし

一　軍人は武勇を尚ふへし　夫武勇は我国にては古よりいとも貴へる所なれは我国の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまし況して軍人は戦に臨み敵に当るの職なれは片時も武勇を忘れてよかるへきかさはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同からす血気にはやり粗暴の振舞なとせんは武勇とは謂ひ難し軍人たらむものは常に能く義理を弁へ能く胆力を練り思慮を殫して事を謀るへし小敵たりとも侮らす大敵たりとも懼れす己か武職を尽さむこそ誠の大勇にはあれされは武勇を尚ふものは常々人に接るには温和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたらは果は世人も忌嫌ひて豺狼なとの如く思ひなむ心すへきことにこそ

一　軍人は信義を重んすへし　凡信義を守ること常の道にはあれとわきて軍人は信く義なては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難かるへし信とは己か言を践行ひ義とは己か分を尽すをいふなりされは信義を尽さむと思はは始より其事の成し得へきか得へからさるかを審に思考すへし朧気なる事を仮初に諾ひてよしなき関係を結ひ後に至りて信義を立てんとすれは進退谷りて身の措き所に苦むことあり侮

ゆとも其詮なし始に能能事の順逆を弁へ理非を考え其言は所註践むへからすと知り其義はとても守るへからすと悟りなは速に止るこそよけれ古より或は小節の信義を立てんとて大綱の順逆を誤り或は公道の理非は踏迷ひて信義を守りあたら英雄豪傑ともか禍に遭ひ身を滅し屍の上の汚名を後世まで遺せること其例尠からぬものを深く警めてやはあるへき

一　軍人は質素を旨とすへし　凡質素を旨とせされは文弱に流れ軽薄に趨り驕奢華靡の風を好み遂には志汚に陥りて貧も無下に賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はしきせらるる迄に至りぬへし其身生涯の不幸なりといふも中中愚なり此風一たひ軍人の間に起りては彼の伝染病の如く蔓延し士風も兵気も頓に衰へぬへきこと明なり朕深く之を懼れて嚢に免黜条例を施行し略此事を誡め置きつれと猶も其悪習の出んことを憂ひて心安からねは故に又之を訓ふるそかし汝等軍人ゆめ此訓誡を等閒にな思ひそ

右の五ヶ条は軍人たらんもの暫も忽にすへからすさて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ抑此五ヶ条は我軍人の精神にして一の誠心は又五ヶ条の精神なり心誠ならされは

如何なる嘉言も善行も皆うはへの装飾にて何の用にかは立つへき心たに誠あれは何事も成るものそかし況してや此五ヶ条は天地の公道人倫の常経なり行ひ易く守り易し汝等軍人能く朕か訓に遵ひて此道を守り行ひ国に報ゆるの務を尽さは日本国の蒼生挙りて之を悦ひなん朕一人の懌のみならんや

明治十五年一月四日

軍人に賜りたる勅諭　注

カタカナは＝音～ひらがなは訓

隋（ズイ）＝ひて・統一
倣（コウ）＝ならう・まねる
躬（キュウ）＝み・からだ・自分自身
狃（ジュウ）＝なれる・なれしたしむ
弼（ヒツ）＝たすける・すける
宸襟（シンキン）＝天子の心の敬称
惶（コウ）＝おそれる・かしこまる

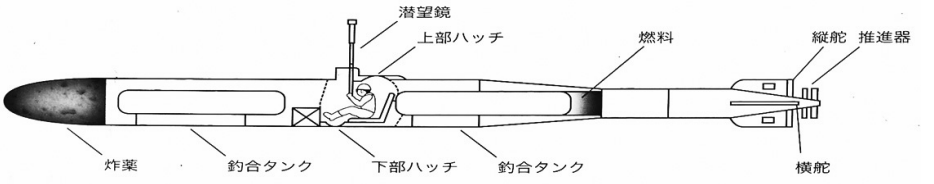
斯旨（シシ）＝このむね
股肱（ココウ）＝手足となるもの・腹心
啻（シ）＝ただ・ただに・それだけ
尚（ショウ）＝たっとぶ・とうとぶ
諾（ダク）＝うべなう
謂（イ）＝いう・おもう・いい・いわれ
踐行（センコウ）＝ふみおこなう・ふむ。位につく
殫（タン）＝つきる・つくす
忌嫌（キ・ケン）＝いむ・いまわしい。きらう・いや
豺狼（サイロウ）＝残酷で欲の深い人
忽（コツ）＝たちまち・ゆるがせにする
紊（ビン）＝みだれる・もつれてみだす
懌（エキ）＝よろこぶ
和諧（ワカイ）＝やわらかぎ調和・なかよくする
嘉言（カゲン）＝よい・めでたい・よろこばしい
免黜（メン・モク）＝免れる・逃れる。だまる・何も云わない

偕（カイ）＝ともに・一緒に・偕老同穴
措（ソ・サク）＝おく・設ける・はからう
尠（セン）＝すくない・すこし・まれ・「部首少ない」
稟（ヒン・リン）＝受ける・承る・申す・上申する
稟とは。稟質・稟奏＝稟姓は天からさずかった静質。稟賦は天性なり。
蠢（ト・サン・テン）＝きくいむし・かいこ
驕奢華靡（キョウシャカビ）＝おごる・ぜいたく・はなやかなさま
朕（チン）＝天皇・天子の自称

昭和十六年前後の少年時代、殉国一途。ひたすら暗唱に勉めました。しかし、この歳になった今、暗唱どころか通読も出来ません。

早速、百科辞典のお世話に相成りました。でも解釈の自信がありません。ご遠慮無く訂正をお願い致します。

## ■ 回天一型断面図、要目・性能 ■



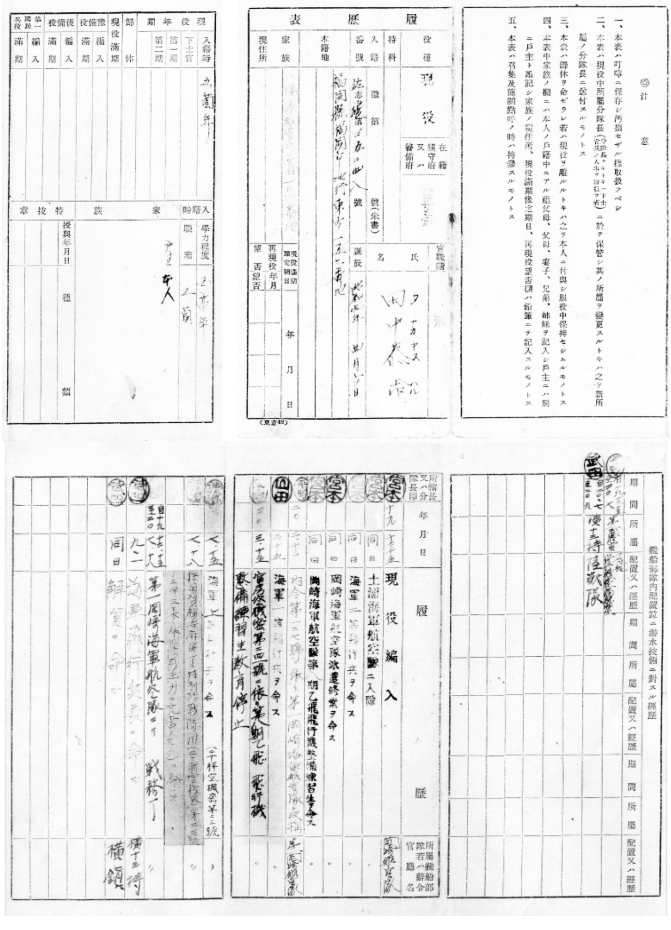

| | |
|---|---|
| 全長 | 14.75 メートル |
| 胴直径 | 1.00 メートル |
| 全重量 | 8.3 トン |
| 最高速力 | 30.0 ノット |
| 行動半径 | 10 ノットで 78,000 メートル |
| | 20 ノットで 43,000 メートル |
| | 30 ノットで 23,000 メートル |
| 機関 | 93 式酸素魚雷機関 |
| 燃料 | 酸素および石油 |
| 軸馬力 | 550 馬力 |
| 頭部炸薬量 | 1.55 トン |
| 備考 | 1. 回天一型は 93 式魚雷を改造したのものである。<br>2. 93 式魚雷とは、日本海軍が各国に先立って創案実用化した無気泡酸素魚雷（水中を航走する時、気泡航跡を残さない魚雷）で、太平洋戦争初期に多大の戦果をあげた。<br>3. 回天一型を改良し、長さ 16.5 メートル、直径 1.35 メートル、全重量 18.37 トン、速力 40 ノット、軸馬力 1,500 馬力という回天二型および四型が試作実験されつつあったが、出撃に至らず敗戦となった。 |

## ■「桜花」11 型　（横須賀空技廠ＭＸＹ８）■

発動機：四式一号 20 型固形燃料ロケット 3、推力 800 キロ
乗員：1
最高時速：900 キロ
航続距離：80 キロ（高度 8,000 メートルから発射）
武装：爆薬 1,200 キロ
自重：440 キロ
全備重量：2,140 キロ
全幅：5.00 メートル
全長：6.07 メートル

## ■ 特効艇「震洋」■

右図の洞窟は、大東亜戦争末期の昭和 20 年（1945）軍司令部は本土決戦を予期して、敵艦隊に魚雷を抱いて体当たりする。
「ベニヤ板の特攻艇【震洋】」を格納するために 3 月から第 1 岡崎航空隊（予科練生第 12 期生「六期会」台 24 期生「八期会」）及び陸軍の暁部隊を派遣して掘削した洞窟である。
竹之浦は「八期会」が 15 番から 36 番まで 22 本を掘削された。戦後、道路建設のためにその多くは崩壊したが残った洞窟は西伊豆町の史跡として保存されている。
ここに格納予定の特攻艇「震洋」
艇の前に炸薬を積込体当たりする戦法の震洋。通称「青蛙」と言われた体当たりモーターボート。
震洋の生産は、軍・民間の製造可能な工場をすべてあげて行われ、計 6200 隻以上が作られた。



| | 日本の情勢 | 日本を取り巻く世界の情勢 |
|---|---|---|
| 1853 | 6月 ペリー浦賀に来航 | |
| 1854 | ペリー再来航。日米和親条約、日英和親条約、日露和親条約 | 太平天国の乱、南京占領 |
| 1855 | 日仏和親条約、日蘭和親条約。 江戸大地震。 | クリミヤ戦争 |
| 1856 | 下田条約締結 | |
| 1858 | 井伊直弼大老に。米、英、蘭、露、仏の五カ国と修好通商条約調印。安政の大獄 | 印度、セポイの反乱・英仏連合軍、広東を占領 |
| 1861 | 露、対馬占領。 | 英、印度の直接統治。ムガール帝国滅亡。 |
| 1863 | 5月馬関戦争。7月薩英戦争。 | |
| 1864 | 池田屋事件。蛤御門の変。第一次長州征伐。 | 南北戦争。イタリア統一。 |
| 1867 | 樺太仮規則 | 米、奴隷解放宣言。ポーランド独立革命。仏、カンボジアを保護国化 |
| 1868 | 1月3日 戊辰戦争開始。3月14日 五箇条の御誓文。4月4日 江戸開城。9月8日 元号が明治に。 | 太平天国軍滅亡。 |
| 1869 | 函館戦争終結。 日英和親条約。日墺修好通商条約。 | ナポレオン3世、メキシコより撤退。 |
| 1873 | 征韓論争。徴兵制公布。 | 清国、捻匪の乱。 |
| 1875 | 露と樺太千島交換条約。 | |
| 1876 | 日朝修好条規調印。 廃刀令。 | スエズ運河開通 |
| 1877 | 西南戦争。 | 三帝（独、露、墺）同盟。朝鮮、大院失脚。 |
| 1882 | 井上馨、不平等条約改正に着手。 | 仏、第三共和国憲法制定 |
| 1883 | 鹿鳴館落成。 | トルコ帝国、憲法制定。 |
| 1885 | 清朝との間に天津条約締結。 | ロシア・トルコ戦争。英領インド帝国成立。 |
| 1889 | 大日本帝国憲法発布。 | |
| 1893 | 陸奥宗光外相の条約改正交渉。 | ペルーがチリに降伏（太平洋戦争）。 |
| 1894 | 日英通商航海条約締結、治外法権の撤廃。日清戦争。 | 天津条約締結。 |
| | | パリ万国博覧会。 |
| | | 朝鮮で東学党の乱 |

| | | |
|---|---|---|
| 1895 | 下関条約調印。三国干渉、遼東半島還付。 | キューバが米国から独立。 |
| 1902 | 第一回、日英同盟成立。 | 米、大統領選でセオドア・ルーズベルトが勝利。オランダ領東インドが成立。 |
| 1904 | 日露戦争。 | サンクトペテルブルクで血の日曜日事件発生。 |
| 1905 | 1月旅順要塞開城。3月奉天会戦。5月日本海海戦。第二次日英同盟。9月ポーツマス条約。ハリマン構想。 | 米英、満州の門戸開放を要請。カリフォルニア州で日本人排斥運動。オレンジ計画。 |
| 1906 | 伊藤博文が韓国統監府の初代統監に就任 | 米国軍が真珠湾に基地を建設。 |
| 1909 | 露から南樺太を受領。伊藤博文暗殺される。ノックス米国務長官の満州鉄道の中立化を提唱も日露両国拒否 | |
| 1911 | 日米通商航海条約改正・関税自主権の回復。 | イタリア・トルコ戦争。外モンゴルが清から独立。 |
| 1914 | 日本、第一次世界大戦に参戦。 | 第一次世界大戦勃発。 |
| 1917 | 日本の満州国権益を米国が承認。石井＝ランシング協定締結。 | ロシア革命。 |
| 1918 | ベルサイユ講和条約がパリ講和会議で締結。日本の提出した人種平等案却下される。 | フィンランド内戦。ポーランドがソ連から独立宣言。 |
| 1921 | 日英同盟廃棄。変わって四カ国条約が締結（日、英、米、仏） | ポーランドとソ連の間でリガ条約が結ばれる。 |
| 1922 | ワシントン海軍軍縮条約（主力艦米、英、日＝5・5・3）。 | ダブリンの戦い。アイルランド内戦勃発。トルコ革命。ソビエト連邦成立。 |
| 1923 | 石井＝ランシング協定破棄。9月関東大震災。 | ネパールが英国から独立。 |
| 1926 | 12月大正天皇崩御。昭和と改元。 | アメリカ合衆国がニカラグアに干渉 |
| 1927 | 5月、蒋介石指導の国民党北伐軍による日本居留民への暴虐事件頻発。第一次山東出兵。 | ニカラグアでサンディーノがアメリカ合衆国の軍事占領に対してゲリラ戦を開始 |
| 1928 | 張作霖爆殺事件（満州某重大事件）。 | 中華民国国民政府が日華通商条約の廃棄を通告 |
| 1929 | 田中義一内閣総辞職。濱口内閣成立 | 蒋介石が国民政府首席に就任 |
| | | ニューヨークで株価大暴落、世界恐慌の始まり。 |

| | |
|---|---|
| 1931 | 柳条湖事件。 |
| 1932 | リットン調査団、満州調査に当たる。五・一五事件。 |
| 1933 | チャップリン来日。<br>国際連盟脱退。 |
| 1934 | ワシントン海軍軍縮条約を廃棄。 |
| 1936 | 二・二六事件。 |
| 1937 | 7月8日　北支事変。<br>7月29日　通州事件。<br>第二次上海事変。北支事変を支那事変に改める。<br>12月　南京攻略。 |
| 1939 | 米、日米通商航海条約の廃棄を通告。ノモンハン事件。 |
| 1940 | 援蒋ルート遮断のため北部仏印に日本軍進駐。日独伊三国軍事同盟。 |
| 1941 | 4月　日ソ中立条約締結。<br>7月　日本軍南部仏印進駐。<br>10月　日米交渉継続か決裂かで近衛首相と東条陸相が対立。ゾルゲ事件。<br>11月26日「ハル・ノート」を突きつけられる。<br>12月　御前会議で対英米蘭開戦を決定。<br>12月8日　日本軍、ハワイ真珠湾を攻撃。マレー半島に上陸。　大東亜戦争始まる。<br>12月21日　日本政府タイと日泰同盟を締結。 |

| | |
|---|---|
| | 米国、張学良軍の対日軍備充実のための兵器工場建設の援助。総額2千600ドルの資金援助も決定。<br>チャコ戦争勃発。　大10回、ロス五輪開催。 |
| | 米、ルーズベルト大統領就任。ヒトラーの独裁政治始まる。<br>2月17日、米国援助による中国広東空軍3年計画契約交渉。<br>張学良が蒋介石を監禁、国共合作、西安事件。<br>スペイン内戦。ビルマ、英国の準自治州に。 |
| | 8月、ドイツ軍ポーランドへ侵攻。英仏、独へ宣戦布告、第二次世界大戦勃発。日本へ対する「モーラル・エンパーゴ」発動。<br>ABCD包囲陣。米、中国への相次ぐ多額の資金援助と新鋭戦闘機50機を送る。<br>生活必需品の日本への禁輸措置。鉄鋼、鉄鋼製品、くず鉄の対日禁輸。<br>7月、米、英、蘭が自国内の日本資産を凍結と通商航海条約の一方的破棄を通告。<br>7月23日、中国からの日本軍爆撃を目的としてB-17爆撃機500機派遣。<br>また269機の戦闘機と66機の爆撃機を装備する事を統合委員会で決定。（フライングタイガース）<br>実質的には既に参戦？ |

10月24日　戦艦武蔵撃沈。
11月24日　米軍新型爆撃機B・29、マリアナ諸島より東京を初空襲。
12月7日　東南海地震。1223名が死亡。
1945
1月13日　三河地震、2306名が死亡。
3月10日　東京大空襲。
3月12日　名古屋大空襲。
3月14日　大阪大空襲。
3月16日　神戸大空襲。
3月25日　名古屋大空襲。
4月1日～6月23日沖縄戦（この間断続的に特攻機突入）
4月6日　菊水作戦発令。
4月7日　戦艦大和沈没。鈴木貫太郎内閣成立。
5月29日　横浜大空襲。
6月5日　神戸大空襲。
6月9日　熱田大空襲。
7月10日　仙台大空襲。
7月14日　函館大空襲。同、釜石艦砲射撃。
7月15日　室蘭艦砲射撃。小樽空襲。
7月28日　呉軍港爆撃。
8月6日　米国、広島に人類初のウラン型原子爆弾投下
福山大空襲。
8月9日　ソ連、日ソ中立条約（第一条不可侵の項目）を一方的に破棄し満州と朝鮮半島に侵攻。

2月クリミア半島でヤルタ会談（英米ソ首脳）。
3月イラン・トルコが対日宣戦布告（トルコ国内では反対デモ）。
3日米、マニラ占領
4月12日ルーズベルト米大統領死没、トルーマンが後継に。
30日ドイツ総統ヒトラー自殺
5月2日ベルリン陥落。
6月26日国際連合発足。
7月16日米、原子爆弾の実験に成功。ポツダム宣言発表。ソ連、日本の和平仲介案拒否
8月18日インドのチャンドラ・ボース、台湾で飛行機事故死。

同日、長崎にプルトニウム型原子爆弾投下。
同、連合国にポツダム宣言受託を打電により通告
8月14日　終戦の詔が出される。中立国にポツダム宣言受諾を通告。
8月15日 玉音放送。鈴木貫太郎内閣総辞職。
8月16日 ソ連軍、南樺太に侵攻開始。大本営停戦命令を出す。
8月18日 ソ連、千島列島の占守島占領。
8月20日 樺太真岡郵便電信局事件。
8月22日 小笠原丸撃沈。
8月25日 ソ連、松輪島占領。
8月28日 択捉島占領。
8月29日 ウルップ島占領
同、米軍第一陣150名横浜に上陸。
8月30日 マッカーサー厚木に到着
9月1日 ソ連、国後島、歯舞群島占領
9月2日 降伏文書調印。大東亜戦争終結。
9月3日 ソ連、色丹島占領。北方四島の占領を完了。関東軍司令部がハバロフスクへ移動、後に60万人以上の日本人がシベリア抑留となる
10月15日　本土の日本軍武装解除完了。

**田中恭治**
昭和4年4月6日生
昭和19年3月　高等小学校卒業
昭和19年12月15日　第一岡崎海軍航空隊入隊
第八期飛行予科練習生（佐志飛三五二四八）
詩集「ひとひらの詩集」「露に咲く」「うず潮」
句集「牛の歩み」等
現在、大阪府泉南市に居住

**第一岡崎海軍航空隊飛行予科練習生**

2009年4月6日発行

著　者 —— **田中恭治**
発行者 —— **田中久雄**
発行所 —— **株式会社かんぽうサービス**
発売元 —— **株式会社かんぽう**
大阪市西区江戸堀1丁目2番14号（〒550-0002）
電話　(06)6443-2171　　FAX　(06)6443-2175

印刷／製本……**モリモト印刷株式会社**

©Yasuharu Tanaka 2009 Printed in Japan
乱丁本・落丁本はお取替えいたします。